朝車雷四合。騎(九)火星一貫。
赫奕(一〇)冠蓋盛。熒煌(一一)朱紫爛。
沙堤亙蝦蟇池。(子城東北低下處、舊號蝦蟇池。)
市路遶龍斷(一二)。
白日忽照耀。紅塵紛散亂。
貴教過客避。榮任行人看。
祥煙滿虛空。春色無邊畔。
鵷(一三)行候晷刻。龍尾(一四)登霄漢。
臺殿暖宜攀。風光晴可翫。
草鋪地茵褥(一五)。雲卷天幃幔(一六)。
鶯雜佩鏘鏘。花遶衣粲粲。
何言終日樂。獨起臨風歎。
歎我同心(一九)人。一別春七換。
相望山隔礙。欲去官羈絆。

朝車雷四合し、騎火星一貫なり。
赫奕として冠蓋盛に、熒煌として朱紫爛たり。
沙堤蝦蟇池に亙り、
市路龍斷を遶る。
白日忽ち照耀し、紅塵紛として散亂す。
貴は過客をして避けしめ、榮は行人の看るに任す。
祥煙虛空に滿ち、春色邊畔無し。
鵷行晷刻を候ち、龍尾霄漢に登る。
臺殿暖かにして宜しく攀づべく、風光晴れて翫ぶ可し。
草は地の茵褥を鋪き、雲は天の幃幔を卷く。
鶯雜りて佩鏘鏘、花遶りて衣粲粲。
何ぞ言はん終日の樂、獨り臨風の歎を起す。
歎く我が同心の人、一たび別れて春七たび換はる。
相望むに山隔礙し、去らんと欲して官羈絆す。

何日到江東。超然似(二〇)張翰。
何れの日か江東に到り、超然として張翰に似ん。

【字解】【一】 稽山　會稽山、越に在り。元稹の居る處。【二】 秦城　長安の都、樂天の居る處。【三】 丁丁　水時計の音。漏は水時計。【四】 鼕鼕　夜明を告げる鼓の音。【五】 南山　長安の南に在る終南山。沈沈は深邃の貌。【六】 星河　あまのがは。【七】 輪煥　高大華美なるをいふ。【八】 朝車　參朝する百官の車。【九】 騎火　騎馬の人の持つあかり。一貫は同一なること。【一〇】 赫奕　光りかがやく貌。冠蓋は冠と車蓋。【一一】 熒煌　てりかがやく。朱紫は官服の色。【一二】 龍斷　高くきり立てる丘。龍は壟なり。【一三】 鵷行　百官の行列。晷刻は定めの時刻。【一四】 龍尾　含元殿前升殿の道。霄漢は天空。宮殿にたとふ。【一五】 茵褥　しとね。敷物。【一六】 幃幔　とばり。幕。【一七】 佩　腰におぶる玉。鏘鏘は佩玉の音。【一八】 粲粲　鮮明の貌。詩經に粲粲衣服とある。【一九】 同心人　元稹を指して言ふ。【二〇】 張翰　晉の吳の人、齊王冏辟して大司馬東曹掾となす。秋風の起るに因りて吳中の菰菜蓴羹鱸魚膾を思ひ、遂に駕を命じて歸る。

【題義】 曉景を望むと題する詩に和したのである。

【詩意】 越州の曉色を詠ずるを休めて、吾が長安の朝景色を詠ずるを聽き給へ。雞は鳴いても宿鳥はまだ塒を離れず、水時計の音も絶えんとして夜明を告げる鼓も既に鳴つた。青青と終南山は霞の奥に靜に立ち、東の空が一帶に白くなると、街衢もほの白くなつて流水の如く、城壁は斷岸のやうである。天河は一隅に傾いて宮闕が巍然として現れる。やがて蝦蟇池に亙る沙堤にも壟斷を遶る市路にも日光が照り輝き、貴顯紳士の往來に紅塵が飛散する。參朝する百官の行列は定めの時刻を待つて龍尾道から登城する。臺殿の風光亦實に賞翫に値し、草は褥を敷きたるが如く、雲は幔を卷きたるが如く、佩玉鏘鏘として鶯聲と相雜はり、花に映じて衣冠が燦爛としてゐる。他人の終日熙熙として樂んでゐ

る中に吾は獨り風に臨んで歎息する。そは他の儀に在らず。我と心を同じうする君は、一たび別れて七年になり、今や幾山川を隔てて相遇ふ由もない。是れ吾が歎息する所以である。いつになつたら彼の張翰のやうに自由の身になつて君の居る江東に往かれるであらう。

〔十五〕

和李勢女

減一分太短。增一分太長。
不朱面若花。不粉肌如霜。
色爲天下豔。心乃女中郎。
自言重不幸。家破身未亡。
人各有一死。此死職所當。
忍將先人體。與主爲疣瘡。
妾死主意快。從此兩無妨。
願信赤心語。速卽白刃光。
南郡忽感激。却立捨鋒鋩。
撫背稱阿姊。歸我如歸鄉。
竟以恩信待。豈止猜妬忘。
由來机上肉。不足揮干將。
南郡死已久。骨枯墓蒼蒼。
願於墓上頭。立石鐫此章。
勸誡天下婦。不令陰勝陽。

李勢の女に和す

減ずること一分なれば太だ短し、增すこと一分なれば太だ長し。
朱ぬらざれども面花の若く、粉せざれども肌霜の如し。
色は天下の豔たり、心は乃ち女中の郎。
自ら言ふ重ねて不幸なり、家破れて身未だ亡びず。
人各一死有り、此死職として當る所。
忍んで先人の體を將つて、主の與に疣瘡と爲さん。
妾死して主の意快し、此れより兩ながら妨無し。
願はくは赤心の語を信じて、速かに白刃の光に卽かん。
南郡忽ち感激し、却立して鋒鋩を捨つ。
撫背して阿姊と稱し、我に歸すること鄉に歸るが如くせよ。
竟に恩信を以て待つ、豈止猜妬を忘るるのみならんや。
由來机上の肉、干將を揮ふに足らず。
南郡死すること已に久し、骨枯れて墓蒼蒼たり。
願はくは墓上の頭に於て、石を立てて此章を鐫り、
天下の婦に勸誡し、陰をして陽に勝たしめざらん。

【字解】【一】女中郎　男子を郎といふ。因つて女にして男子の氣力ある者を女郎といふ。古樂府に始知木蘭是女郎とある。【二】未亡　死せぬこと。【三】先人體　父母の遺體。吾が身をいふ。【四】疣瘡　いぼ。贅肉。【五】南郡　湖北省の荆州府襄陽府の南境をいふ。【六】干將　古の名劍の名。【七】蒼蒼　古色を帶びたこと。

【題義】李勢の女の敵に屈せざる志氣を褒めた詩である。

【詩意】彼女は丈高からず低からず丁度程よきに叶ひ、紅粉を附けずして面は花の如く肌は霜の如くであり、容色は天下に比類なく、心は男子にも劣らない。「家は破れて我が身のみ空しく殘つた。死は固より我が分である。忍んで父母の遺體たる我が身を殺して主に殉しよう。妾死せば主も定めて滿足するであらう。いざ白刃の下に自ら斃れよう」と言つて覺悟を定めたので、南郡の將も忽ち感激し、

却立して其鋒を捨て其背を撫でて姉と呼び、我に歸すること故郷に歸るが如くせよとて、猜妬の心を棄て恩信を以て待遇した。歸服すれば俎上の肉も同樣で、さうなつては却つて刃を揮ふことは出來ないものだ。今や南郡の將死して已に久しく、骨朽ち墓も古びた。願はくは墓上に石を立てて此詩を刻し、天下の婦人に勸戒して陰をして陽に勝たしめないやうにしたいものだ。

〔十六〕

和酬鄭侍御東陽春悶放懷追越遊見寄

鄭侍御東陽の春悶に懷を放にし越遊を追ひて寄せられしに酬ゆるに和す

君得嘉魚置賓席。
樂如南有嘉魚時。
勁氣森爽竹竿竦。
妍文煥爛芙蓉披。
載筆在幕名已重。
補袞於朝官尚卑。
一緘疏入掩谷永。
三都賦成排左思。
自言拜辭主人後。
離心蕩颺風前旗。
東南門館別經歲。
春眼悵望秋心悲。
已上敍二嘉魚一。
昨日嘉魚來訪我。
方駕同出何所之。
樂遊原頭春尚早。
百舌新語聲稗稗。
日趂花忙向南坼。
風催柳急從東吹。
流年憾恍不饒我。
美景鮮妍來爲誰。

君嘉魚を得て賓席に置く、
樂は南に嘉魚有りし時の如し。
勁氣森爽竹竿竦え。
妍文煥爛芙蓉披く。
筆を載せ幕に在りて名已に重く、
袞を補ひ朝に於て官尚卑し。
一緘疏入りて谷永を掩ひ、
三都賦成りて左思を排す。
自ら言ふ主人に拜辭して後、
離心蕩颺す風前の旗。
東南の門館別れて歲を經、
春眼悵望して秋心悲しむ。
昨日嘉魚來りて我を訪ひ、
駕を方べて同く出でて何くに之く所ぞ。
樂遊原頭春尚早し、
百舌の新語聲稗稗たり。
日は花を趂うて忙しく南に向ひて坼き、
風は柳を催すこと急に東より吹く。
流年憾恍我を饒さず。
美景鮮妍來る誰が爲めぞ。

【字解】〔一〕嘉魚　人名。賓席は幕賓たる地位。
〔二〕南有嘉魚　詩經小雅の篇名。序に南有嘉魚樂與賢也、太平之君子、至誠樂與賢者共之也とあり。中に南有嘉魚、烝然罩罩、君子有酒、嘉賓式燕以樂とある。
〔三〕勁氣云云　氣象の俊爽なるをいふ。
〔四〕妍文云云　文章の美なるをいふ。
〔五〕補袞　袞は袞龍の服。天子の服する所のもの。天子を輔佐すること。詩經大雅烝民篇に袞職有闕、維仲山甫補之とある。
〔六〕一緘　一封なり。疏は上書。谷永は漢の長安の人、字は子雲。樓護と俱に五侯の上客となる。長安語して曰く、谷子雲の筆札、樓君卿の脣舌と。
〔七〕左思　晉の文士。三都の賦を作り十年にして乃ち成る。豪貴の家競ひて相傳寫し、洛陽の紙價之が爲に貴し。
〔八〕主人　元稹を指す。
〔九〕離心　離居の悲。
〔一〇〕樂遊原　長安の名所。漢の宣帝廟宇を曲江池の北に立て樂遊と號す。因つて其地を稱して樂遊原となす。原は京城の最高に居り、四望寬

紅塵三條界阡陌。
碧草千里鋪郊畿。
餘霞斷時綺幅裂。
斜雲展處羅文紕。
暮鐘遠近聲互動。
暝鳥高下飛追隨。
酒酣將歸未能去。
悵然廻望天四垂。
生何足養嵇著論。
途何足泣楊漣洏。
胡不花下伴春醉。
滿酌綠酒聽黃鸝。
嘉魚點頭時一歎。
聽我此言不知疲。

紅塵三條阡陌を界し、
碧草千里郊畿に鋪く。
餘霞斷ゆる時綺幅裂け、
斜雲展ぶる處羅文紕ふ。
暮鐘遠近聲互に動き、
暝鳥高下飛びて追隨す。
酒酣に將に歸らんとして未だ去る能はず、
悵然廻望すれば天四に垂る。
生何ぞ養ふに足らん嵇は論を著し、
途何ぞ泣くに足らん楊漣洏たり。
胡ぞ花下春醉に伴ひ、
綠酒を滿酌して黃鸝を聽かざる。
嘉魚頭を點して時に一たび歎ず、
我が此言を聽きて疲るるを知らず。

【一】 紅塵　鳥の名。もず。新語は敝なり。
【二】 百舌　鳥の名。
【三】 流年　歲月の推移の速なるをいふ。
【四】 綺幅　あやぎぬ。
【五】 羅文　薄絹の模樣。
【六】 暝鳥　夕に飛ぶ鳥。
【七】 嵇著論　魏の嵇康、字は叔夜氣を導き性を養ひ養生論を著す。
【八】 楊漣洏　淮南子說林訓に楊朱見二岐路一而哭レ之、爲レ其可二以南一可二以北一とある。漣洏は涙の流るる貌。
【九】 黃鸝　鳥の名。
【一〇】 點レ頭　うなづく。

語終興盡各分散。
東西軒騎分逶迤。
此詩勿遣閒人見。
見恐與他爲笑資。
白首舊寮知我者。
憑君一詠向周師。

語終り興盡きて各〻分散す、
東西軒騎分れて逶迤たり。
此詩閒人をして見しむる勿れ、
見ば恐らくは他の與に笑資と爲らん。
白首の舊寮我を知れる者、
君に憑む一詠して周師に向へ。

周判官師範、蘇杭舊判官。去レ範字一叶レ韻。

【題義】 侍御（官名）鄭東陽が春日憂悶のあまり越州に在る元稹を懷うて寄せた詩に酬いた元稹の作に和したのである。

【詩意】 君は嘉魚（鄭侍御なり）を幕賓としてゐた。君と嘉魚との和樂の狀は詩經にある南有嘉魚の篇にも比ぶべき程であつた。嘉魚は氣象の俊爽なことは竹の聳ゆるが如く、文章のすぐれてゐることは蓮花の開くが如くであつた。筆を載せ幕賓となりて文名世に著れたが、朝廷に仕へて天子を輔佐し官職がまだ卑かつた。併し其上書の文章は漢の谷永を壓倒し、賦を作れば三都賦の作者たる左思をも凌駕する伎倆を持つてゐた。さてその嘉魚は君に別れてからは、「主人が越州に去つてから我が離居

【一一】 軒騎　軒は馬車なり。車騎といふが如し。逶迤は斜に去る貌。
【一二】 閒人　ひまのある人。
【一三】 笑資　わらひぐさ。
【一四】 舊寮　もとの同僚。
【一五】 周師　周師範。樂天が蘇州・杭州の刺史たりし時、判官の職に居りし人。

の心情は宛ら風前に蕩颺する旗の如く、春も秋も東南越州の方を望んで悲嘆に暮れてゐる」と自ら言つてゐる。昨日も我を來り訪ひ俱に騎を竝べて遊びに出かけた。樂遊原のあたりは春もまだ淺く、百舌の聲も若若しく、日は花を趁うて先づ南枝の蕾を破り、風は柳の絲を弄して東から吹いて來る。歳月の推移は流水の如く速で、我をして心を傷ましめるが、忽ち復陽春の美景が展開されたことは悅ばしい、見渡せば三條の大路に紅塵が揚り、千里の郊畿に綠草が生え、霞の斷えた處は綺幅の裂けたるが如く、斜雲の棚曳く處は薄絹の模樣がもつれてゐる如くである。いつしか夕の鐘が遠近に鳴り、塒に歸る鳥が連立つて飛びかはしてゐる。我等は酒に醉うて將に歸らんとして未だ歸らず、悵然として廻望すれば雲が四方に垂れてゐる。嵇康は養生論を著はしたが生を養つて長生を計るなどは無用の沙汰で、楊朱は岐路を見て泣いたといふが今更泣いても始まらない。それよりは寧ろ花下春醉に伴ひ、綠酒を滿酌して黃鸝の歌を聽く方が遙にましである。嘉魚も我が此言を聽いて點頭き、疲れたのも忘れて贊嘆した。語終り興盡きて始めて東西に別れて歸つた。さて此詩をば世の閒人に見せてくれるな。彼等に見せると、徒らに彼等の笑草になるばかりだ。我を知る白髮の舊同僚たる周師範にだけは、どうぞ讀んで聽かせてやつてくれ。

〔十七〕

和自勸二首　自ら勸むるに和す　二首

稀稀疎疎遶籬竹。
窄窄狹狹向陽屋。
屋中有一曝背翁。
委置形骸如土木。
日暮半爐麩炭火。
夜深一盞紗籠燭。
不知有益及民無。
二十年來食官祿。
就暖移盤簷下食。
防寒擁被帷中宿。
秋官月俸八九萬。
豈徒遣爾身溫足。
勤操丹筆念黃沙。
莫使飢寒囚滯獄。

稀稀疎疎たり籬を遶る竹、
窄窄狹狹たり陽に向へる屋。
屋中に一の背を曝す翁有り、
形骸を委置すること土木の如し。
日は暮る半爐麩炭の火、
夜は深し一盞紗籠の燭。
知らず益有り民に及ぶや無や、
二十年來官祿を食む。
暖に就き盤を移して簷下に食し、
寒を防ぎ被を擁して帷中に宿す。
秋官の月俸八九萬、
豈徒に爾が身をして溫かに足らしむる「のみならんや。」
勤めて丹筆を操りて黃沙を念ふ、
飢寒の囚をして獄に滯らしむる莫れ。

【字解】【一】窄窄狹狹　せまき貌。
【二】曝背翁　ひなたぼつこをしてゐる老人。
【三】委置　すておく。形骸は身體。
【四】麩炭　炭の水に入りて浮ぶもの。浮炭ともいふ。
【五】一盞　一個の燈明皿。紗籠燭は紗を張つたボンボリ。
【六】擁被　夜著にくるまる。
【七】秋官　刑部の官。
【八】丹筆　丹を以て罪を書すること。黃沙は晉書職官志に、泰始四年黃沙獄治書侍御史一人を置くとある。

【題義】元稹の「自ら勸む」と題する詩に和した作である。

【詩意】籬を遶つて疎に竹が生えて居り、その中に日當りのよい小屋がある。屋中に日向ぼつこをしてゐる一人の老翁（樂天自ら謂ふ）が居り、形骸を土木にして敢て惜まない。晝は麩炭の爐を圍んで日を送り、夜は一個の燈火に對して深更まで坐してゐる。格別人民に利澤を施したやうにも見えぬが、二十年來官祿を戴いて生活し、簷下の暖かな處へ盆を持ち出して飽食し、夜著にくるまつて寒を防ぎ帷中に安臥してゐる。刑部侍郎の月俸は八九萬錢であるが、この俸祿は決して身を溫足にせしめる爲にのみ給せられるのではない。されば丹筆を操つて獄事を治め、囚人をして永く獄中に滯り飢寒に泣かしめるやうな事があつてはならない。

〔十八〕

(一)急景凋年急於水。
念此攬衣中夜起。
門無宿客共誰言。
煖酒挑燈對妻子。
自飲數盃妻一盞。
餘酌分張與兒女。
微酣靜坐未能眠。
風霰(二)蕭蕭打窓紙。
自問有何才與術。
入爲丞(四)郎出刺史。
爭知壽命短復長。
豈得營(五)營心不止。
請看韋孔與錢崔。
半月之間四人死。

韋中書・孔京兆・錢尚書・崔華州、十五日間、相次而逝。

【字解】【一】急景凋年　光陰の迅速なるをいふ。

【二】蕭蕭　淋しく風の吹く音。

【三】一盞　一杯。

【四】丞郎　副佐の官。樂天の刑部侍郎たるをいふ。

【五】營營　名利を貪り求むる貌。

【詩意】歳月の推移は水の流よりも速い。此を念うて感慨に堪へず、中夜に衣を纏つて起きあがつたが、宿客もなければ共に語るべき者がないので、酒を煖め燈を挑げて妻子を相手に數杯を傾け、兒女にも分ち與へた。微醺を帶びて靜に坐せば、霰の窓を打つ聲が淋しく聞える。因つて「一體俺は何の才能があつて入りては丞郎となり出でては刺史となつたのであらう」などと自ら問うて見た。人の壽

命の長短は知るべからず、然るに名利を求めて齷齪して止むことを知らないのは、こけの骨頂である。見よ吾が舊友たる韋・孔・錢・崔の四人は僅か半月の間に死んでしまつたではないか。

〔十九〕

和雨中花

雨中の花に和す

眞宰倒持生殺柄。
閒物命長人短命。
松枝上鶴著下龜。
千年不死仍無病。
人生不得似龜鶴。
少去老來同旦暝。
何異花開旦暝間。
未落仍遭風雨横。
草得經年菜連月。
唯花不與多時節。

眞宰倒に生殺の柄を持し、
閒物は命長く人は短命。
松枝の上の鶴著の下の龜、
千年死せず仍ほ病無し。
人生龜鶴に似るを得ず、
少去り老來る旦暝に同じ。
何ぞ異ならん花の旦暝の間に開き、
未だ落ちずして仍りに風雨の横に遭ふに。
草は年を經るを得て菜は月を連ね、
唯花にのみ多くの時節を與へず。

【字解】【一】眞宰　造物者、神。生殺柄は生殺の權。
【二】閒物　無用の物。
【三】著　草の名。古其莖を取りて占筮の用に供せり。
【四】旦暝　朝暮。

一年三百六十日。
花能幾日供攀折。
桃李無言難自訴。
黄鶯解語憑君說。
鶯雖爲說不分明。
葉底枝頭謾饒舌。

一年三百六十日、
花能く幾日か攀折に供する。
桃李言ふこと無ければ自ら訴へ難し、
黄鶯語を解すれば君に憑みて說かしむ。
鶯は說くことを爲すと雖も分明ならず、
葉底枝頭謾りに饒舌。

【五】君　鶯を指して言ふ。

【題義】雨中の花と題する元稹の詩に和したのである。

【詩意】造物者の生殺の權を執ることが甚だ不當で、つまらない物には長命を與へながら人には短命しか與へない。松上の鶴や著下の龜は千年も無病で生きながらへ人は忽ち老死する。されば人生は花の朝暮の間に開き、未だ落ちざるに雨風に虐げられるのに似てゐる。草は年を經ても枯れず野菜は數月の壽命を保つが、花は壽命が極めて短く、一年三百六十日の中に、花を攀折し得る日は幾何もない。桃や李は物が言へないから不平を述べないが、語を解する鶯に賴んで訴へさせる。鶯は葉の蔭や枝の上でくどくどと訴へはするが、惜いかな言ふことがはつきりしない。

〔二十〕

格詩　和雨中花

和晨興因報問龜兒(一)

冬旦寒慘(二)澹。雲日無晶輝。
當此歲暮感。見君晨興詩。
君詩亦多苦。苦在兄遠離。
我苦不在遠。纏(三)綿肝與脾。
西院病孀婦。後牀孤(五)姪兒。
黃昏一慟(六)後。夜半十(七)起時。
病眼兩行淚。衰鬢萬莖絲(八)。
咽絶五臟脈。瘦消百骸脂。
雙目失一目。四肢斷兩肢。
不如溘(九)然逝。安用半活爲。
誰謂荼(一〇)蘖苦。荼蘖甘如飴。
誰謂湯火熱。湯火冷如澌。
前時君寄詩。憂念問阿(一一)龜。
喉燥聲氣窒。經年無報(一二)辭。
及覩晨興句。未吟先涕垂。
因茲漣(一三)洳際。一吐心中悲。
茫茫四海間。此苦唯君知。
去我四千里。使我告訴誰。
仰頭向青天。但見鴈南飛。
憑鴈寄一語。爲我達微之。
弦絶有續(一四)膠。樹斬可接枝。
唯我中腸斷。應無連得期。

晨興に和し因つて龜兒を問ふに報ゆ

冬旦寒くして慘澹、雲日晶輝無し。
此歲暮の感に當り、君が晨興の詩を見る。
君が詩亦苦み多し、苦みは兄の遠く離るるに在り。
我が苦みは遠に在らず、肝と脾とに纏綿たり。
西院には病孀婦あり、後牀には孤姪兒あり。
黃昏に一たび慟して後、夜半に十たび起くる時。
病眼兩行の淚、衰鬢萬莖の絲。
五臟の脈を咽絶し、百骸の脂を瘦消す。
雙目は一目を失ひ、四肢は兩肢を斷つ。
如かず溘然として逝かんには、安んぞ半ば活くるを用て爲さん。
誰か荼蘖を苦しと謂ふ、荼蘖甘きこと飴の如し。
誰か湯火を熱しと謂ふ、湯火冷かなること澌の如し。
前時君詩を寄す、憂念して阿龜を問ふ。
喉燥きて聲氣窒がり、年を經て報辭無し。
晨興の句を覩るに及び、未だ吟せざるに先づ涕垂る。
茲漣洳の際に因りて、一たび心中の悲みを吐く。
茫茫たる四海の間、此苦み唯君のみ知る。
我を去ること四千里、我をして誰にか告訴せしむる。
頭を仰ぎて青天に向へば、但鴈の南に飛ぶを見る。
鴈に憑みて一語を寄す、我が爲に微之に達せよ。
弦絶ゆるも續膠有り、樹斬らるるも枝を接ぐ可し。
唯我が中腸の斷えたるは、應に連ね得る期無かるべし。

【字解】【一】晨興　朝早く起きること。龜兒は樂天の弟行簡の子。行簡は寶曆二年冬歿した。【二】慘澹　陰氣な貌。【三】纏綿　まとひつくこと。肝脾は竝に內臟の名。【四】西院　西の書院。病孀婦は寡婦となれる行簡の妻。【五】孤姪兒　孤兒となれる姪、龜兒をいふ。【六】一慟　行簡の死を哭すること。【七】十起　後漢の第五倫が兄の子の病める時、一夜に十たび往きて見舞ひし故事。【八】絲　白毛。【九】溘然逝　忽然と死ぬこと。【一〇】荼蘖　苦菜。詩經邶風谷風篇に誰謂荼苦、其甘如齊とある。【一一】阿龜　龜兒なり。【一二】報辭　返答の詩。【一三】漣洳　涕泣の貌。【一四】續膠　斷えたるをつぐニカハ。十洲記に鳳麟洲上多鳳麟、數萬爲羣、煮鳳喙及麟角、合煎作膏、名之爲續弦膠云云とある。

【題義】元稹の晨興と題する詩に和し、兼ねて元稹が龜兒の近況を問へるに答へた作である。

【詩意】冬の朝は何處となく陰氣で日の光も薄い、かかる感傷的な時節に君の晨興と題する詩を見た。君の詩にも兄の遠く離れてゐることを悲んだ悲觀的な趣があるが、我が悲みは遠別の爲ではなく、近く肝脾の間にからみついてゐるのである。卽ち西院には病寡婦が居り、後床には孤姪兒がゐるので、夕方には弟の死を哭し、夜半には姪の病を見舞ひ、病眼からは涙が流れ、衰鬢には白毛が增すばかりで、身も心も瘦せ細り、雙目は一目を失ひ四肢は兩肢を斷つたも同然である。こんな半死半生の日を送るよりは寧ろ一思ひに死んだ方がましだと思ふ。人は茶を苦いといふが、吾が心の苦きに比すれば飴よりも甘いであらう。又人は湯火を熱いといふが、吾が心の熱きに比すれば氷のやうに冷かである。嚮に君は龜兒の樣子を問ふ詩を寄せてくれたが、當時は悲みの爲に喉がつまつて、年を經るまで返事も差上げずにゐたが、今晨興の詩を見るに及び、吟ずる前に先づ涙が流れた。この涙の流るる際に一たび心中の悲みを申し上げる。廣い世間に我が苦みを知る者は唯君一人であるが、我は君と相距ること四千里であるから、面のあたり訴ふる由がない。仰いで天に訴ふれば唯雁の南に飛ぶを見るのみで、天は何とも答へない。因つて南飛の雁に憑んで此詩を君に寄せる。弓弦は斷れても續ぐべき膠があり、樹は斬られても接ぐべき枝があるが、我が腸の斷れたのは復と續ぐべき時はないのである。

〔二十一〕

和朝回與王鍊師遊南山下

朝より回りて王鍊師と南山の下に遊ぶに和す

(一)藹藹春景餘。峩峩夏雲初。
(二)蹉跎退朝騎。飄颻隨風裾。
晨從四丞相。入拜白玉除。
暮與一道士。出尋青谿居。
吏隱本齊致。朝野孰云殊。
道在有中適。機忘無外虞。
但愧煙霄上。鸞鳳爲吾徒。
又慙雲水間。鷗鶴不我疎。
坐傾數杯酒。臥枕一卷書。
興酣頭兀兀。睡覺心于于。
以此送日月。問師爲何如。

【字解】【一】王鍊師　王は姓。鍊師は道士の德高く思精なる者の稱。南山は長安の南に在る終南山。【二】藹藹　盛多の貌。

格詩　和朝回與王鍊師遊南山下

【三】 峩峩　山の聳ゆる貌。夏雲は陶淵明の四時の詩に夏雲多二奇峯一とある。【四】 覆蹀　行く貌。【五】 白玉除　宮殿の階段。【六】 吏隱　官吏と隱者と。【七】 中適　心中の快適。【八】 機忘　世事を忘るること。外虞は心外の憂。【九】 煙霄　青雲といふが如し。【一〇】 鸞鳳　英俊の士に喩ふ。【一一】 兀兀　醉ふ貌。劉伶の酒德頌に兀然而醉とある。【一二】 于于　無知の貌。莊子に其覺也于于とある。【一三】 師　王鍊師。

【題義】 朝廷から退出して後、王鍊師と終南山の下に遊んだことを賦した詩に和したのである。

【詩意】 春は既に過ぎて夏の初めになつた。馬に跨り衣を飄して朝廷から退出する官吏があちこちに見える。晨には四丞相に從ひ入りて天子に拜謁し、暮には一道士と相攜へて青谿に遊ぶ。吏と隱と本より其趣を同うし、朝に在ると野に在ると決して異る所はない。道を修めて心中常に快よく、世事を忘れて何等の憂もない、ただ宮中に入りては俊傑の士と伍し、雲水に遊んでは鷗鶴と侶たるを愧づるのみである。坐しては數杯の酒を傾け、臥しては一卷の書を枕し、常に兀兀として醉ひ、于于として覺め、此の如くにして月日を送り、鍊師に向つて以て何如となすかを問うた。

〔二十二〕

和嘗新酒

空腹嘗新酒。偶成卯時醉。
醉來擁褐裘。直至齋時睡。
睡酣不語笑。眞寢無夢寐。
殆欲忘形骸。詎知屬天地。
醒餘和未散。起坐澹無事。
擧臂一欠伸。引琴彈秋思。

【字解】【一】 卯時　午前六時。因つて朝酒を飲むを卯時醉といふ。【二】 齋時　僧家の晝食を齋といひ、午後の食を非時といふ。【三】 醒餘　醉後。【四】 欠伸　あくびやのびをすること。

【題義】 新酒を飲んだことを賦した詩に和したのである。

【詩意】 空腹な處へ朝酒を飲み、醉うて褐裘を擁し、午頃まで睡つた。ぐつすりと睡込んで夢さへ見ず、殆ど身をも忘れるばかりであつたから、身の天地の間に在ることなどは勿論知らない。醒めての後も和氣未だ散せず、起きあがつても唯茫然として爲す事もなく、臂を張つて欠伸をしてから琴を引寄せて秋思を彈じた。

〔二十三〕

和順之琴者

陰陰花院月。耿耿蘭房燭。

順之が琴ひく者に和す

陰陰たる花院の月、耿耿たる蘭房の燭。

中有弄琴人。聲貌俱如玉。　中に琴を弄ぶ人有り、聲貌俱に玉の如し。
清冷石泉引。澹泞風松曲。　清冷たる石泉の引、澹泞たる風松の曲。
遂使君子心。不愛凡絲竹。　遂に君子の心をして、凡絲竹を愛せざらしむ。

【字解】【一】順之　庾敬休の字。【二】陰陰　陰翳の狀。花院は花の咲いてゐる中庭。【三】耿耿　明なる貌。蘭房は香氣ある部屋。【四】石泉引　泉水の石罅を迸る如き曲調。【五】澹泞　水の澄みて深き貌。【六】凡絲竹　平凡な管絃。

【題義】庾敬休が家の琴に堪能なる妓のことを賦した詩に和したのである。

【詩意】月が陰陰たる花院を照らし、燈火の皎皎たる蘭室の中に、琴を彈ずる妓女がある。その聲も貌も玉の如く美しい。泉水の石罅に迸り青松の風中に吟ずるが如き清澄な曲調を聞いては、遂に君子の心をして凡俗な管絃の音を聞くを厭ふやうにならしめるであらう。

感舊寫眞

李放寫我眞。寫來二十載。　舊寫眞に感ず
莫問眞何如。畫亦銷光彩。　李放我が眞を寫し、寫し來りて二十載。
朱顏與玄鬢。日夜改復改。　眞は何如と問ふこと莫れ、畫も亦光彩を銷せり。
朱顏と玄鬢と、日夜改りて復改る。

【字解】【一】李放　人名。【二】朱顏　紅顏なり。若若しき顏色。玄鬢は黑き鬢の毛。

【題義】二十年前に畫いた己の肖像畫を觀て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】李放が二十年前に我が肖像畫を畫いてくれた。よく我眞を得て居るか否かは問題ではない。その色彩さへ消磨してしまひ、紅顏も黑髮も日夜に變じてしまつた。併し、我は顏貌の衰へたことを嗟くよりも、寧ろ身の猶存するを喜んでゐる。

無嗟貌遽非。且喜身猶在。　貌の遽に非なるを嗟くこと無し、且身の猶在るを喜ぶ。

授太子賓客歸洛　自此後東都作。

太子賓客を授けられ洛に歸る　此より後は、東都に作る。

南省去拂衣。東都來掩扉。　南省を去りて衣を拂ひ、東都に來りて扉を掩ふ。
病將老齊至。心與身同歸。　病は老と齊しく至り、心は身と同じく歸る。
白首外緣少。紅塵前事非。　白首外緣少く、紅塵前事非なり。
懷哉紫芝叟。千載心相依。　懷しい哉紫芝の叟、千載心相依る。

【字解】【一】南省　尚書省をいふ。【二】白首　しらがあたま。【三】紅塵　世間の熱鬧繁華をいふ。【四】紫芝叟　漢の四皓洛陽の商山に隱る。高祖之を聘す。天を仰いで歌じ歌を作りて曰く、曄曄紫芝、可二以療一飢　唐虞往矣、吾當二安歸一と。【五】千載

千年。

【題義】太子賓客の官を授けられて東都洛陽に歸つたことを述べた詩である。

【詩意】刑部侍郎を罷めて尚書省を去り、洛陽に來て門扉を閉ぢて閑居してゐる。今や身心ともに老病の纏ふ所となり、世間との交渉が少くなつたのは宜しいが、過ぎ來し方を回顧すれば事毎に失敗だらけである。ただ商山の四皓を慕ひ、千歳を隔てて遠く心を寄せてゐる。

秋池二首

身閒無所爲。心閒無所思。
況當故園夜。復此新秋池。
岸闇鳥棲後。橋明月出時。
菱風香散漫。桂露光參差。
靜境多獨得。幽懷竟誰知。
悠然心中語。自問來何遲。

【字解】【一】故園　故郷、洛陽を指して言ふ。【三】參差　ちらちらする貌。【三】悠然　心がのびのびする貌。

秋池二首

身閒にして爲す所無く、心閒にして思ふ所無し。
況んや故園の夜に當りて、復此新秋の池なるをや。
岸は闇し鳥の棲む後、橋は明かなり月の出づる時。
菱風香散漫、桂露光參差。
靜境多く獨り得たり、幽懷竟に誰か知らん。
悠然として心中に語り、自ら問ふ來る何ぞ遲きと。

【題義】秋日池邊の情景を敍した詩である。

【詩意】身も心も閑暇多ければ爲す事もなく思ひ煩ふ事もない。まして故郷の夜新秋の池邊に閑居する我は尚更である。鳥が塒に就く頃には池の岸が暗くなり、やがて月が出て橋が明るくなつた。風が菱を吹いて香氣が散じ、月が露を照らして光がちらついてゐる。かかる靜境を獨り占め得た我が幽懷をば誰も知る者はあるまい。因つて悠然として心中に獨語した。「もつと早く來ればよかつたに」と。

〔一〕
朝衣薄且健。晩簟清仍滑。
社近燕影稀。雨餘蟬聲歇。
閒中得詩境。此境幽難說。
露荷珠自傾。風竹玉相戞。
誰能一同宿。共翫新秋月。
暑退早涼歸。池邊好時節。

〔一〕
朝衣薄くして且健に、晩簟清くして仍滑かなり。
社近くして燕影稀に、雨餘蟬聲歇む。
閒中詩境を得、此境幽にして說き難し。
露荷珠自ら傾き、風竹玉相戞す。
誰か能く一たび同じく宿し、共に新秋の月を翫ばん。
暑退きて早涼歸り、池邊好時節なり。

【字解】【一】朝衣　あさの著物。健はさつぱりしてゐること。【三】晩簟　夕のたかむしろ。【三】社　立秋後第五の戊の日を

秋社といふ。【四】露荷　露のたまつてゐる蓮の葉。

【詩意】朝著物を纏へば薄く且爽で、夕に簟の上に臥せば清く且滑かである。社日も近づいたので燕の影も少くなり、雨あがりで蟬の聲も絶えた。閒中に詩境を得て、その幽境は口舌を以て說くことは出來ない。蓮の葉の上の露は自ら傾いて珠と散り、風が竹を搖かして玉の相擊つやうな音がする。誰か能く我と同じく此處に宿して、新秋の月を賞するであらう。今や暑氣退いて早涼來り、池邊は一年中の最好時節である。

中隱

大隱住朝市。小隱入丘樊。
丘樊太冷落。朝市太囂諠。
不如作中隱。隱在留司官。
似出復似處。非忙亦非閒。
不勞心與力。又免飢與寒。
終歲無公事。隨月有俸錢。

中隱

大隱は朝市に住み、小隱は丘樊に入る。
丘樊は太だ冷落、朝市は太だ囂諠。
如かず中隱と作り、隱れて留司の官に在るには。
出づるに似て復處るに似たり、忙しきに非ず亦閒なるに非ず。
心と力とを勞せず、又飢と寒とを免る。
歲を終るまで公事無く、月に隨ひて俸錢有り。

君若好登臨。城南有秋山。
君若愛遊蕩。城東有春園。
君若欲一醉。時出赴賓筵。
洛中多君子。可以恣歡言。
君若欲高臥。但自深掩關。
亦無車馬客。造次到門前。
人生處一世。其道難兩全。
賤卽苦凍餒。貴則多憂患。
唯此中隱士。致身吉且安。
窮通與豐約。正在四者間。

君若し登臨を好まば、城南に秋山有り。
君若し遊蕩を愛せば、城東に春園有り。
君若し一醉を欲せば、時に出でて賓筵に赴け。
洛中に君子多し、以て歡言を恣にす可し。
君若し高臥を欲せば、但自ら深く關を掩へ。
亦車馬の客、造次門前に到る無し。
人生れて一世に處る、其道兩ながら全くし難し。
賤くしては卽ち凍餒に苦しみ、貴くしては則ち憂患多し。
唯此中隱の士、身を致すこと吉にして且安し。
窮通と豐約と、正に四者の間に在り。

【字解】【一】丘樊　林丘なり。【二】冷落　寂靜なり。【三】囂諠　噪がしきこと。【四】留司　留守に同じ。分司東都の職をいふ。【五】公事　職事なり。【六】遊蕩　遊樂なり。【七】洛中　東都洛陽なり。【八】造次　匆卒といふが如し。【九】四者　窮通豐約なり。

【題義】太子賓客分司東都の閑職を得て、半隱生活を送つてゐる氣樂さを述べた詩である。

【詩意】大隱は都會に住み小隱は林丘に住むが、林丘は物淋しく都會は諠噪である。されば東都に分司として中隱生活を送るこそ尤も宜しきに叶つてゐる。東都分司の官は出でて仕ふるが如く退いて隱るるが如く、忙しいといふ程でもなく閑散といふ程でもなく、心力を勞することもなく飢寒の心配もなく、年中これといふ仕事もなく、それで毎月俸錢が戴ける。だから仕官するなら東都分司になるがよい。君若し登臨を好むならば洛城の南に山がある。若し又遊樂を好むならば洛城の東に林園がある。春でも秋でも思ふ存分遊賞することが出來る。若し一醉を欲するならば出でて賓筵に赴くがよい。洛陽は士君子の淵藪だから遊び相手はいくらでもある。若し高臥を欲するならば門を閉ぢて閑居するがよい。車馬の客の匆卒に闖入するやうなことはない。一體何でも兩全を得ることの出來ないのが憂世で、卑賤なれば凍餒の苦みがあり、高貴なれば憂が多い。ただ中隱の士だけは常に身の吉安を得て、窮通豐約四者の中間に居ることが出來る。

問秋光

殷卿領北鎭。崔尹開南幕。
外事信爲榮。中懷未必樂。
何如不才者。兀兀無所作。

秋光に問ふ

殷卿は北鎭を領し、崔尹は南幕を開く。
外事信に榮と爲す、中懷未だ必ずしも樂しからず。
何ぞ如かん不才の者、兀兀として作す所無きに。

不引窓下琴。卽擧池上酌。
淡交唯對水。老伴無如鶴。
自適頗從容。旁觀誠濩落。
身心轉恬泰。烟景彌淡泊。
廻首語秋光。東來應不錯。

窓下の琴を引かず、卽ち池上の酌を擧ぐ。
淡交唯水に對し、老伴鶴に如くは無し。
自適頗る從容、旁觀誠に濩落。
身心轉た恬泰、烟景彌〻淡泊。
首を廻らして秋光に語る、東に來れること應に錯らざるべし。

【字解】【一】北鎭　北方の鎭營。【二】南幕　南方の幕府。【三】外事　外部に現れた榮華。【四】中懷　中情。【五】兀兀　不動の貌。【六】旁觀　あたりを觀ること。濩落は蕭條たること。

【題義】自己の感想を述べて秋に問うた詩である。

【詩意】殷卿（殷は姓）は北方の鎭將となり、崔尹（崔は姓）は南方の鎭將となつて、俱に外觀だけは榮華を極めてゐるが、心中は必ずしも樂んでゐないであらう。寧ろ不才で何の取柄もない我の兀兀として作す所なく、安閑としてゐるには及ぶまい。我は窓下に琴を引いて彈ずることもせず、唯池邊に酒を酌みつつ、水に對して淡き交を結び、鶴を無上の相手としてゐる。獨り從容として自適し、あたりを觀ても寂寞としてゐる。身も心も安泰で四圍の景色も淡泊である。因つて首を回らして秋に問うた。「我が東都に來たのは誠に宜しきを得てゐるであらう」と。

引泉

一爲止足限。二爲衰疾牽。
邴罷不因事。陶歸非待年。
歸來嵩洛下。閉戸何翛然。
靜掃林下地。閒疏池畔泉。
伊流狹似帶。洛石大如拳。
誰教明月下。爲我聲濺濺。
竟夕舟中坐。有時橋上眠。
何用施屏障。水竹繞牀前。

泉を引く

一には止足の爲に限られ、二には衰疾の爲に牽かる。
邴の罷むるは事に因らず、陶の歸るは年を待つに非ず。
歸り來る嵩洛の下、戸を閉ぢて何ぞ翛然たる。
靜に林下の地を掃ひ、閒に池畔の泉を疏す。
伊流は狹くして帶に似たり、洛石は大さ拳の如し。
誰か明月の下、我が爲に聲濺濺たらしむる。
竟夕舟中に坐し、時有りて橋上に眠る。
何ぞ用ひん屏障を施すを、水竹牀前を繞る。

【字解】【一】止足　老子に知レ足不レ辱、知レ止不レ殆とある。【二】邴　晉の邴郁か。成帝博く異行の士を求め、博士を以て郁を徵す。郁辭して赴かず。【三】陶　晉の陶淵明、嘗て柴桑の令となる。忽ち歸去來兮辭を賦して鄉に歸る。【四】嵩洛　嵩は山の名、洛は川の名。並に洛陽の附近に在り。【五】翛然　自然にして無心なるをいふ。【六】伊流　伊河なり。洛水に注ぐ。【七】洛石　洛河石なり。宋史方技傳に、王處訥少時有二老叟一至舍、煮二洛河石一如レ麵、令二處訥食レ之、且曰、汝性聰悟、後當レ爲二人師一とある。【八】濺濺　水の流るる音。【九】竟夕　終夜。【一〇】屏障　屏風、衝立の如きもの。

【題義】泉を引き濺濺と流るる聲を聽いて樂むことを敍した詩である。

【詩意】吾が官を罷めたのは邴郁と同じで別に深い事情があつたわけではなく、洛陽に歸つたのは陶淵明と同じで年を待つて歸臥したのではない。一つには程よい處で足を洗はうといふ考からで、二つには老病の爲に餘儀なくされたのである。洛陽に歸つてからは戸を閉ぢて閑居し、林下の地を掃ひ泉の水を引いて趣を添へた。伊河の流は帶のやうに狹く、洛河石は拳の如く大きい。明月の下に耳を傾くれば濺濺として流れてゐる。我は此聲を聽きつつ或は終夜舟中に坐し或は橋上に眠ることもある。しかし敢て屏障を施すの要はない。美しい水竹が吾が牀前を繞つてゐるから。

知足吟　和二崔十八未レ貧作一。

不レ種二一隴田一。倉中有二餘粟一。
不レ採二一株桑一。箱中有二餘服一。
官閒離二憂責一。身泰無二羈束一。
中人百戸稅。賓客一年祿。
樽中不レ乏レ酒。籬下仍多レ菊。
是物皆有レ餘。非二心無一所レ欲。

知足吟　崔十八が未だ貧しからずの作に和す。

一隴の田を種ゑず、倉中に餘粟有り。
一株の桑を採らず、箱中に餘服有り。
官閒にして憂責を離れ、身泰くして羈束無し。
中人百戸の稅、賓客一年の祿。
樽中酒に乏しからず、籬下仍菊多し。
是物皆餘り有り、心の欲する所無きに非ず。

吟君未貧作。因歌知足曲。
自問此時心。不足何時足。

【字解】【一】中人　中産階級の民。【二】賓客　官名。太子賓客。時に樂天は此官に在り。

【題義】崔十八は崔玄亮（字は晦叔）である。此詩は崔玄亮の作つた未貧と題する詩に和したのである。

【詩意】自分は耕作もしないのに倉には餘粟があり、養蠶もしないのに衣服が餘る程ある。官職は閑散で心にかかる憂もなく、身は泰くして何の束縛もない。しかも中人百戸の税に相當する程の俸祿を戴いてゐる。樽中には酒があり、籬下には菊があつて、他に欲望がないわけではないが、目前の樂みを取るには少しも不足を感じない。君の作つた「未だ貧ならず」と題する詩を吟ずるに因つて、我も「足るを知る」と題する詩を作り、且自ら吾が心に問うた。「今に於て自ら足れりとせずんば何れの日にか足るであらう」と。

君が未だ貧しからざる作を吟じ、因つて足るを知る曲を歌ふ。
自ら問ふ此時の心、足らずして何れの時か足らん。

酬集賢劉郎中對月見寄兼懷元浙東

集賢劉郎中が月に對して寄せられしに酬い兼ねて元浙東を懷ふ

月在洛陽天。天高淨如水。
月は洛陽の天に在り、天高くして淨きこと水の如し。
下有白頭人。擥衣中夜起。
下に白頭の人有り、衣を擥りて中夜に起く。
思遠鏡亭上。光深書殿裏。
思は遠し鏡亭の上、光は深し書殿の裏。
眇然三處心。相去各千里。
眇然たり三處の心、相去る各千里。

【字解】【一】集賢　殿の名。劉郎中は劉禹錫をいふ。禹錫は時に集賢直學士であつた。【二】元浙東　浙東觀察使元稹。【三】白頭人　白樂天自ら謂ふ。【四】鏡亭　鏡湖の畔に在る亭。鏡湖は浙江省紹興縣の南に在る。【五】書殿　集賢殿なり。【六】眇然　遠く視る貌。

【題義】集賢直學士劉禹錫が月を觀て感ずる所を賦し、樂天に寄せた詩に酬い、兼ねて浙東觀察使たる元稹を懷うて此詩を作つたのである。

【詩意】月は正に洛陽の天に懸つてゐる。天は高く澄んで水のやうに清い。白髮の老爺たる我は天上の月を觀て感慨に堪へず、衣を纏うて夜中に起き、遙に思を鏡湖の邊に居る元稹や、集賢殿中奥深い處に宿直する劉禹錫に馳せた。我等三人は各〻處を異にし千里を隔ててゐるので、殊に思慕の情が深いのである。

太湖石

遠望老嵯峨。近觀怪嶔崟。
遠く望めば老いて嵯峨たり、近く觀れば怪くして嶔崟。

格詩　酬集賢劉郎中對月見寄兼懷元浙東　太湖石

纔高八九尺。勢若千萬尋。
嵌空華陽洞。重疊匡山岑。
邈矣仙掌迥。呀然劍門深。
形質冠今古。氣色通晴陰。
未秋已瑟瑟。欲雨先沈沈。
天姿信爲異。時用非所任。
磨刀不如礪。擣帛不如砧。
何乃主人意。重之如萬金。
豈伊造物者。獨能知我心。

纔に高きこと八九尺、勢は千萬尋の若し。
嵌空なり華陽の洞、重疊す匡山の岑。
邈矣として仙掌迥に、呀然として劍門深し。
形質今古に冠たり、氣色晴陰に通ず。
未だ秋ならざるに已に瑟瑟、雨ふらんと欲して先づ沈沈。
天姿信に異と爲す、時用任ふる所に非ず。
刀を磨ぐには礪に如かず、帛を擣つには砧に如かず。
何ぞ乃ち主人の意、之を重んずること萬金の如くなる。
豈伊れ造物者、獨り能く我が心を知らん。

【字解】【一】太湖石　園林中疊む所の假山石は孔穴及び皺紋の多いのを貴ぶ。多くは之を太湖より採る故、之を太湖石といふ。揚州畫舫錄に、太湖石乃太湖中石骨、溟激波滌、年久孔穴自生、因レ在二水中一、殊難二運致一とある。【二】嵯峨　高く聳ゆる貌。【三】嵌崟　聳え立つ貌。【四】嵌空　うつろなること。華陽は華山の南。【五】匡山　山の名。四川省江油縣の西に在る。【六】仙掌　華嶽志に嶽頂東峯曰二仙人掌一、峯側石上有レ痕、自レ下望レ之、宛然一掌、五指俱備とある。【七】呀然　聳ゆる貌。劍門は山の名。四川省劍閣縣の北に在る。【八】瑟瑟　風の聲。【九】沈沈　斷續悠遠の聲。【一〇】天姿　天然の形。【一一】時用　現時の實用。【一二】主人　持主。樂天自ら謂ふ。【一三】造物者　宇宙の主宰者。神。

【題義】太湖石のことを詠じた詩である。

【詩意】此石は遠く望んでも近く觀ても、古色を帶び奇怪な形をして山のやうに聳えてゐる。高さは纔に八九尺に過ぎないが其氣勢は千萬尋もあるかのやうである。恰も華陽洞の陷入するが如く匡山の重疊するが如く、仙掌の遙に天に聳え、劍門の深く雲に聳ゆるが如く、形も質も古今に冠絶し色合は晴陰何れにも宜しく、秋に先だつて已に瑟瑟の聲をなし、未だ雨ふらざるに先づ沈沈の聲を呈する。自然の姿は實に美妙であるが、唯惜しいかな實用にはならない。されば刀を磨ぐには砥石に如かず、帛を擣つには砧に及ばない。こんな物の役にも立たない頑石を、萬金の寶のやうに珍重する我が心は誰も知る者はあるまい。唯ひとり造物者が知るだけであらう。

偶作二首

擾擾貪生人。幾何不夭閼。
遑遑愛名人。幾何能貴達。
伊余信多幸。拖紫垂白髮。
身爲三品官。年已五十八。
筋骸雖早衰。尚未苦羸惙。

偶作　二首

擾擾として生を貪る人、幾何か夭閼せざらん。
遑遑として名を愛する人、幾何か能く貴達せん。
伊れ余信に幸多し、紫を拖きて白髮を垂る。
身は三品の官たり、年は已に五十八。
筋骸早く衰へたりと雖も、尚未だ苦だしくは羸惙せず。

資産雖不豐。亦不甚貧竭。資産豐ならずと雖も、亦甚だしくは貧竭せず。
登山力猶在。遇酒興時發。山に登るに力猶在り、酒に遇ひて興時に發る。
無事日月長。不羈天地濶。事無くして日月長く、羈されずして天地濶し。
安身有處所。適意無時節。身を安んずるに處所有り、意に適ふに時節無し。
解帶松下風。抱琴池上月。帶を松下の風に解き、琴を池上の月に抱く。
人間所重者。相印將軍鉞。人間重んずる所の者、相の印と將軍の鉞と。
謀慮繫安危。威權主生殺。謀慮安危に繫り、威權生殺を主る。
焦心一身苦。炙手旁人熱。心を焦して一身苦しみ、手を炙れば旁人熱す。
未必方寸間。得如吾快活。未だ必ずしも方寸の間、吾が快活の如くなるを得ざらん。

【字解】【一】擾擾　紛紛といふが如し。【二】天閼　わかじた。【三】遑遑　あくせくすること。【四】貴達　榮達なり。【五】拖紫　紫綬を佩びること。高位にのぼること。【六】三品　三位なり。【七】羸惙　疲れ憂ふこと。【八】人間　世間。【九】炙手旁人熱　傍の人が手をかざせば熱氣を感ずる程勢焰の盛んなこと。【一〇】方寸　心をいふ。

【題義】偶然心に感ずる儘を賦した詩である。

【詩意】世人は紛紛として長壽を貪るが、果して幾人天死せぬ者があるであらう。又齷齪として名利を求めるが、果して幾人榮達するであらう。唯我は幸にも身は三品の官となりて紫綬を佩び、五十八年の壽を保つて白髮を垂れてゐる。身は早く衰へたけれども甚だしく困憊もせず、資産は豐ではないが甚だしく貧乏でもない。山に登る氣力も尙存し、酒を飲めばまだまだ感興が湧く。爲す事もなければ日の長きを覺え、何等の束縛もないので天地の寬きを感ずる。身を安んずるには安住の地があり、意に適する快事は時を擇ばずにある。或は帶を解いて松下の風に對し、或は琴を抱いて池上の月を仰ぎなどして樂んでゐる。世人は將相となることを貴ぶが、將相となれば心は天下の安危に繫り、手に生殺の權を握り、常に國事に心を焦し、勢焰の赫奕たるものがあるが、其心中は恐らく我のやうに快活を得てはゐないであらう。

〔二〕

日出起盥櫛。振衣入道場。日出でて起きて盥櫛し、衣を振ひて道場に入る。
寂然無他念。但對一爐香。寂然として他念無し、但一爐の香に對す。
日高始就食。食亦非膏粱。日高くして始めて食に就く、食亦膏粱に非ず。
精粗隨所有。亦足飽充腸。精粗有る所に隨ひ、亦腸に飽充せしむるに足る。
日午脫巾簪。燕息窓下牀。日午にして巾簪を脫ぎ、窓下の牀に燕息す。

清風颯然至。臥可致羲皇。
日西引杖屨。散步遊林塘。
或飲茶一盞。或吟詩一章。
日入多不食。有時唯命觴。
何以送閒夜。一曲秋霓裳。

清風颯然として至る、臥して羲皇に致す可し。
日西にして杖屨を引き、散歩して林塘に遊ぶ。
或は茶一盞を飲み、或は詩一章を吟ず。
日入りて多くは食はず、時有りて唯觴を命ず。
何を以てか閒夜を送らん、一曲秋霓裳。

一日分五時。作息率有常。
自喜老後健。不嫌閒中忙。
是非一以貫。身世交相忘。
若問此何許。此是無何鄉。

一日五時に分け、作息率ね常有り。
自ら喜ぶ老後に健なるを、閒中の忙を嫌はず。
是非一以て貫ぬけり、身世交も相忘る。
若し此は何許ぞと問はば、此は是れ無何の鄉。

【字解】【一】道場　道法を宣行する處。釋道ともいふ。【二】膏粱　肥肉とよき米。【三】燕息　休息なり。【四】羲皇　伏羲。太古の天子。陶淵明の文に常言五六月中北窓下臥、遇三涼風暫至一自謂是羲皇上人とある。【五】杖屨　つゑ、くつ。【六】一盞一杯。【七】霓裳　舞曲の名。【八】作息　作は働く、息は休むこと。ここは所作の意。【九】無何鄉　虛無の境。莊子逍遙遊篇に、無何有之鄉、廣莫之野とある。

【詩意】夜が明ければ起きて顏を洗ひ髮を梳り、衣を振つて道場に入り、心を落著け一爐の香に對して勤行する。日が高く昇れば食事をするが決して膏粱の美味を貪りはせず、ただ有るに任せて腹を充たすのみである。正午になれば頭巾を脫いで窓下の牀に横臥する。清風がそよそよと吹き我を誘うて太古醇朴の世界に遊ばしめる。日が西に傾けば杖を曳いて林塘の間を散歩し、或は茶を啜り詩を吟じて樂む。日が暮れれば大抵は食を廢して唯酒を飲み、霓裳の曲を歌つて秋の夜を送る。斯の如く一日を五時に分け一定の所作をきめて日を消し、老いて尙健なるを喜び閑中の忙を厭はない。是非を以て一如となし身と世と相忘れてゐる。人若し此は何處ぞと問はば、無何有の鄉だと答へるであらう。

葺池上舊亭

池月夜凄凉。池風曉蕭颯。
欲入池上冬。先葺池中閣。
向暖窓戶開。迎寒簾幕合。
苔封舊瓦木。水照新朱蠟。
軟火深土爐。香醪小瓷榼。
中有獨宿翁。一燈對一榻。

池上の舊亭を葺く

池月夜凄凉、池風曉蕭颯。
池上の冬に入らんと欲し、先づ池中の閣を葺く。
暖に向ひて窓戶開き、寒を迎へて簾幕合ふ。
苔は舊瓦木を封じ、水は新朱蠟を照らす。
軟火深土爐、香醪小瓷榼。
中に獨宿の翁有り、一燈一榻に對す。

【字解】【一】凄凉　寒凉なり。【二】蕭颯　淋しき貌。【三】新朱蠟　新しく塗つた赤い蠟。【四】香榼　濁酒。瓷榼は酒瓶。

【五】獨宿翁　樂天自ら謂ふ。【六】一榻　一個のこしかけ。

【題義】池邊の舊亭を修理したことを述べた詩である。

【詩意】夜は池上の月が寒げに見え、朝は池邊の風が淋しく吹き、追追冬に入らんとするので、先づ池邊の舊亭を修理した。暖に向へば窓戸を開け放つが、寒を迎へるのだから簾幕を皆卸した。苔は舊い瓦や木に生えまつはり、水は新に塗つた朱蠟を照らして雅致を添へてゐる。地爐の中に深く火を埋め、酒瓶に濁酒を貯へ、燈下に一榻に對して獨り亭中に寐宿してゐる。

崔十八新池

愛君新小池。池色無人知。
見底月明夜。無波風定時。
忽看不似水。一泊稀琉璃。

【字解】【一】一泊　湖澤を泊といふ。稀琉璃は薄き琉璃。

【題義】崔十八（名は玄亮、字は晦叔）が家の小池を詠じた詩である。

【詩意】我は崔君の家の新に鑿つた小池を愛する。その池の色を知る者は唯我ひとりである。月夜には底まで澄んで見え、風の鎮まつた時は鏡のやうに靜かで、ちよつと見ては水とは思はれず、薄い琉璃を展べたやうである。

翫止水

動者樂流水。靜者樂止水。
利物不如流。鑒形不如止。
凄清早霜降。淅瀝微風起。
中面紅葉開。四隅綠萍委。
廣狹八九丈。灣環有涯涘。
淺深三四尺。洞徹無表裏。
淨分鶴翹足。澄見魚掉尾。
迎眸洗眼塵。隔胷蕩心滓。
定將禪不別。明與誠相似。
清能律貪夫。淡可交君子。

止水を翫ぶ

動く者は流水を樂み、靜なる者は止水を樂む。物を利するは流に如かず、形を鑒るは止に如かず。凄清として早霜降り、淅瀝として微風起る。中面に紅葉開き、四隅に綠萍委す。廣狹八九丈、灣環して涯涘有り。淺深三四尺、洞徹表裏無し。淨くしては鶴の足を翹ぐるを分ち、澄みては魚の尾を掉ふを見る。眸を迎へて眼塵を洗ひ、胷を隔てて心滓を蕩ふ。定は禪と別ならず、明は誠と相似たり。清は能く貪夫を律し、淡は君子に交はる可し。

豈唯空狎翫。亦取相倫擬。
欲識靜者心。心源只如此。

【字解】【一】淅瀝　風の聲。【二】綠萍　綠のうきくさ。【三】涯涘　岸。【四】洞徹　すきとほる。【五】心滓　心のけがれ。【六】倫擬　見做ふこと。【七】心源　心根。心底といふが如し。

【題義】靜止して流れない水を賞翫して作つた詩である。

【詩意】活動的の人は流水を樂み、靜寂を愛する人は止水を樂む。萬物に利澤を施すは流水に如くものはないが、己の姿を鑒みるには止水に如くものはない。今や時正に秋に入り霜も降り風も寒く、池の中には紅葉が燃え、四方の岸には綠萍が枯れてゐる。池の廣さは八九丈もあつて環りて灣をなし、深さは三四尺ばかりで底まですきとほつて見える。その淨さは鶴の足を翹げるのが明かにうつり、魚の尾を掉かすのも見える。一たび此池に對すれば眼の塵も洗はれ心の滓れも拭はれて、禪定に入り至誠に達したと同じ精神狀態になる。此水の淸は能く貪夫に律度を示し、淡は君子に交際の範を示してゐる。予が此水を賞翫するのは實に其德に見做はんが爲である。抑も靜者の心を識らんと欲する者は止水を見て其心を察知するがよい。

聞崔十八宿予新昌弊宅時予亦宿崔家依仁

新亭。一宵偶同。兩興暗合。因而成詠。聊以寫懷

崔十八予が新昌の弊宅に宿すと聞く。時に予も亦崔家依仁の新亭に宿す。一宵偶〻同じく、兩興暗に合ふ。因つて詠を成し、聊か以て懷を寫す

陋巷掩弊廬。高居敞華屋。
新昌十株松。依仁萬莖竹。
松前月臺白。竹下風池綠。
君向我齋眠。我在君亭宿。
平生有微尙。彼此多幽獨。
何必求主人。兩心聊自足。

【字解】【一】弊廬　あばらや。【二】微尙　いやしき好尙。【三】彼此　君と我と。

【題義】崔十八（名は玄亮、字は晦叔）が長安の新昌里に在る白樂天の家に宿せる由を聞いた丁度其晩、樂天も亦洛陽の依仁里に在る崔氏の新亭に宿した。同一夜に期せずして兩人の感興が暗合したのは實に奇緣と謂つてよい。因つて此詩を作つて感懷を敍したのである。

【詩意】我は陋巷に敝廬を結び、君は高敞の地に新邸を構へた。我が新昌里の邸には十株ばかりの松

があり、君が依仁里の邸には萬竿の竹がある。松前の臺地は明月皎皎として、竹下の池水は綠波を漂はせてゐる。君は我が室に宿り我は君の亭に宿るとは誠に奇緣である。平生互に相慕つてゐるが、相會する機會を得ずに幽獨を嘆じてゐる。併し主人には遇はなくとも、各〻其邸に宿するを得たからは銘銘の心に不足を感ずることは少しもない。

日長

日長晝加餐。夜短朝餘睡。
春來寢食閒。雖老猶有味。
林塘得芳景。園曲生幽致。
愛水多棹舟。惜花不掃地。
幸無眼下病。且向樽前醉。
身外何足言。人間本無事。

【字解】【一】園曲　庭園のあたり。【二】眼下　目前なり。【三】人間　世間。

【題義】春の日長の狀を述べた詩である。

【詩意】日が長くて晝は間食でもしたくなり、夜は短くて朝まで眠込んでしまふ。春に入りてこのかた眠食ともに安穩で、年は取つてもまだまだ味が深い。林塘の間には春色が滿ち、庭園にも風致が生じた。水を愛して多くは舟に棹し、花を惜んで掃除もしない。幸に目前の病氣もないから常に酒杯に親んでゐる。身外の富貴は我が求むる所ではない。ただ無事安泰に世を涉るのが我が願である。

三月三十日作

今朝三月盡。寂寞春事畢。
黃鳥漸無聲。朱櫻新結實。
臨風獨長歎。此歎意非一。
半百過九年。艷陽殘一日。
隨年減歡笑。逐日添衰疾。
且遣花下歌。送此杯中物。

【字解】【一】朱櫻　さくらんぼ。【二】半百　五十。【三】艷陽　春景色。【四】杯中物　酒なり。

【題義】三月三十日卽ち春の盡きる日に作つた詩である。

【詩意】今朝は三月の晦で愈〻春も終りを告げるのである。黄鳥の聲も聞かれなくなり、櫻桃は新に實を結んだ。自分は風に臨んで坐ろに長嘆した。嘆息した意味は色色あるが、五十九歳の春景色も今日が最後で、一日增しに歡笑が減じて衰病が加はると思へば自然と嘆息せざるを得ない。因つて花下に歌つて强ひて酒を勸めさせた。

慵不能

架上非無書。眼慵不能看。
匣中亦有琴。手慵不能彈。
腰慵不能帶。頭慵不能冠。
午後恣情寢。午時隨事餐。
一餐終日飽。一寢至夜安。
飢寒亦閒事。況乃不飢寒。

【字解】【一】閒事　むだ事。

【題義】萬事に慵くして爲す能はざる狀を述べた詩である。

慵不能

架上書無きに非ず、眼慵くして看る能はず。
匣中亦琴有り、手慵くして彈く能はず。
腰慵くして帶する能はず、頭慵くして冠する能はず。
午後情を恣にして寢ね、午時事に隨ひて餐す。
一餐終日飽き、一寢夜に至るまで安し。
飢寒亦閒事、況んや乃ち飢寒せざるをや。

【詩意】架上に書があつても眼が慵くて讀まれず、匣中に琴があつても手が慵くて彈かれず、腰は帶をしめるに慵く、頭は冠を被るに慵く、午後は欲するが儘に眠り、午時は好みに任せて食ひ、寢ると食ふとで日を送つてゐる。予は飢寒さへ意に介するに足らぬ閒事と心得てゐるが、その飢寒さへないのだから呑氣なものだ。

晨興

宿鳥動前林。晨光上東屋。
銅爐添早香。紗籠滅殘燭。
頭醒風稍愈。眼飽睡初足。
起坐兀無思。叩齒三十六。
何以解宿齋。一杯雲母粥。

【字解】【一】早香　朝に焚く香。【二】紗籠　薄紗をはつたボンボリ。【三】風　頭痛。【四】兀　動かざる貌。【五】叩齒　顏氏家訓に吾嘗患齒、搖動欲落、飲食熱冷皆苦疼痛、見抱朴子叩齒之法、早朝叩齒三百下爲良とある。【六】解宿齋　啓顏錄に北齊王元景、每旦起索食、謂之解齋とある。【七】雲母粥　雲母は鑛物にて藥用とある。唐書尉遲敬德傳に敬德晚節謝賓客、不與通、飤雲母粉爲方士術延年とある。

晨興

宿鳥前林に動き、晨光東屋に上る。
銅爐早香を添へ、沙籠殘燭滅す。
頭醒めて風稍愈え、眼飽きて睡り初めて足る。
起坐兀として思ひ無し、齒を叩くこと三十六。
何を以て宿齋を解く、一杯雲母の粥。

【題義】朝早く起きてからの情味を述べた詩である。

【詩意】宿鳥が前の林に動めき、旭の光が東の屋根に上つた。銅製の香爐に香を焚き添へなどする折しも紗籠の火が滅えさうになつた。睡りから醒めて頭痛もやみ、睡り足りて眼も冴えた。何の屈託もなく靜かに坐し齒を三十六回叩いた。やがて一杯の雲母粥を啜つて朝の食事をすませた。

朝課

平甃白石渠。靜掃青苔院。〔一〕
池上好風來。新荷大如扇。〔二〕
小亭中何有。素琴對黃卷。〔三〕
藥〔四〕珠諷數篇。秋思彈一遍。〔五〕
從容朝課畢。方與客相見。

【字解】〔一〕院　庭。〔二〕新荷　新しく生えた蓮の葉。〔三〕素琴　しらきの琴。黃卷は書籍。書言故事に古人寫レ書盡用二黃紙一用二黃檗一染レ之以辟レ蠹、故謂二之黃卷一とある。〔四〕藥珠　道書黃庭經をいふ。〔五〕一遍　一曲なり。

【題義】朝の日課を述べた詩である。

【詩意】渠に白い石を甃み、青苔の生えた庭を靜に掃ひなどすれば、池上にそよ風が吹いて來て扇程の大きさの蓮の葉を搖かす。亭中には白木の琴と書籍とがあつて、黃庭經數篇を誦し秋思一曲を彈じ、以上の日課が畢つた所で、始めて客と應接する。

天竺寺七葉堂避暑

鬱〔一〕鬱復鬱鬱。伏〔二〕熱何時畢。
行入七葉堂。煩暑隨步失。
檐雨稍霏〔三〕微。窓風正蕭〔四〕瑟。
清宵一覺〔五〕睡。可以銷百疾。

【字解】〔一〕鬱鬱　悶悶といふが如し。〔二〕伏熱　三伏の暑熱。〔三〕霏微　雨の細に降る貌。〔四〕蕭瑟　風の寒き貌。〔五〕覺睡　眠ること。

【題義】天竺寺の七葉堂で暑を避けたことを述べた詩である。

【詩意】暑氣烈しくして何日畢るべしとも思はれないのに、七葉堂に入れば一足毎に暑氣が消失する。まして雨がしよぼしよぼと檐を打ち、涼しい風が窓に吹き込んで來る。一晩ここに寢れば如何なる病も盡く癒えるであらう。

【餘論】汪立名曰く、臨安志に下天竺寺に七葉堂ありとて、公の此詩を載すれば、是れ亦杭州の作な

り。編者誤つて洛下の詩に入れしのみ。然れども集中前後倒置する者甚だ多し。未だ盡く正す能はざるなりと。

香山寺石樓潭夜浴

炎光晝方熾。暑氣宵彌毒。
搖扇風甚微。褰裳汗霢霂。
起向月下行。來就潭中浴。
平石爲浴牀。窪石爲浴斛。
綃巾薄露頂。草屨輕乘足。
清涼詠而歸。歸上石樓宿。

香山寺石樓の潭にて夜浴す

炎光晝方に熾に、暑氣宵彌〻毒なり。
扇を搖かせども風甚だ微に、裳を褰ぐれども汗霢霂たり。
起ちて月下に向ひて行き、來りて潭中に就きて浴す。
平石を浴牀と爲し、窪石を浴斛と爲す。
綃巾は薄くして頂を露し、草屨は輕くして足を乘す。
清涼にして詠じて歸り、歸りて石樓に上りて宿す。

【字解】【一】炎光　日の光。【二】霢霂　小雨の降る貌。【三】浴斛　浴槽。【四】綃巾　薄紗の頭巾。【五】草屨　草履。【六】詠而歸　論語先進篇に浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸とある。

【題義】香山寺の石樓の潭で夜水浴をしたことを述べた詩である。

【詩意】日光が盛に照りつけ夜になつても暑氣烈しく、扇を搖かしても風さへ起らず、裳を褰げても汗が流れる。因つて月下を行いて潭中に浴した。此潭は平な石を浴牀とし、窪い石を浴槽としてある。一浴の後は薄紗の頭巾を阿彌陀にかぶり、輕い草履をひつかけ、さつぱりとした氣持で詩を吟じながら歸り、石樓に上つて一宿した。

嗟髮落

朝亦嗟髮落。暮亦嗟髮落。
落盡誠可嗟。盡來亦不惡。
既不勞洗沐。又不煩梳掠。
最宜濕暑天。頭輕無髻縛。
脫置垢巾幘。解去塵纓絡。
銀瓶貯寒泉。當頂傾一勺。
有如醍醐灌。坐受清涼樂。
因悟自在僧。亦資於剃削。

髮の落つるを嗟く

朝にも亦髮の落つるを嗟き、暮にも亦髮の落つるを嗟く。
落ち盡くるは誠に嗟く可し、盡き來るも亦惡からず。
既に洗沐を勞せず、又梳掠を煩はさず。
最も濕暑の天に宜し、頭輕くして髻の縛する無し。
垢巾幘を脫置し、塵纓絡を解去す。
銀瓶寒泉を貯へ、頂に當りて一勺を傾く。
醍醐の灌ぐが如き有り、坐して清涼の樂を受く。
因つて悟る自在の僧、亦剃削に資るを。

【字解】【一】垢巾幘　垢のついた頭巾。【二】塵纓絡　塵のついた冠の紐。【三】醍醐　五味の一、甘露といふが如し。【四】

自在僧　何等の束縛をも受けない僧侶。【五】剃髢　頭髪を剃ること。

【題義】老衰して頭髪の抜け落ちるのを嗟いた詩である。

【詩意】朝にも髪の落ちるのを嗟き、暮にも髪の落ちるのを嗟く。段段と頭髪の落ち盡きるのは誠に嗟かはしい事であるが、盡きて無くなるのも強ち惡い事ではない。盡きて無くなれば洗梳する手數もなく、特に蒸暑い時節には髪を結ぶこともないから頭が輕くて氣持がよい。垢じみた頭巾を脱ぎ塵のついた冠の紐を解き、水瓶に貯へた一勺の水を腦天にかけると、醍醐の灌頂を受けるやうで頓に清涼の樂を感ずる。かの僧侶が心に何等の束縛もなく自由の境地に安住することの出來るのも、頭髪を剃り落すからであらう。

安穩眠　安穩に眠る

家雖二日漸貧一。猶未レ苦二飢凍一。　家は日に漸く貧しと雖も、猶未だ飢凍に苦しまず。
身雖二日漸老一。幸無二疾病痛一。　身は日に漸く老ゆと雖も、幸に疾病の痛み無し。
眼逢二鬧處一合。心向二閒時一用。　眼は鬧しき處に逢ひて合し、心は閒なる時に向ひて用ふ。
既得二安穩眠一。亦無二顚倒夢一。　既に安穩に眠るを得、亦顚倒の夢無し。

【題義】心穩かに眠り安き狀を述べた詩である。

【詩意】家計は益〻貧しけれども凍餒に艱む程ではない。身は日增に老いるけれども幸に病難を免れてゐる。うるさい事は目を塞いで見ず、閒に乘じて心を樂ませてゐる。故に安らかに眠ることが出來て惡夢に襲はれることはない。

池上夜境　池上の夜境

晴空星月落二池塘一。　晴空の星月池塘に落ち、
澄鮮淨綠表裏光。　澄鮮淨綠表裏光る。
〔一〕露簟清瑩迎レ夜滑。　露簟清瑩夜を迎へて滑かに、
風襟瀟〔二〕洒先レ秋涼。　風襟瀟洒秋に先だちて涼し。
無二人驚一處野禽下。　人の驚かすこと無き處に野禽下り、
新睡覺時幽草香。　新に睡の覺むる時幽草香し。
但問塵埃能去否。　但問ふ塵埃能く去るや否や、
濯〔三〕纓何必向二滄浪一。　纓を濯ふ何ぞ必ずしも滄浪に向はん。

【題義】池邊の夜景を敍した詩である。

【字解】【一】露簟　露のおちてゐるタカムシロ。
【二】瀟洒　爽なる貌。
【三】濯レ纓　冠の紐を洗ふ。孟子離婁上篇に有二孺子一歌曰、滄浪之水清兮、可三以濯二我纓一。滄浪之水濁兮、可三以濯二我足一とある。滄浪は川の名。

【詩意】空が晴れて星月の影が池の水にうつり水は綠に澄んで底まですきとほつて見える。露を帶びた簟は月を迎へて光滑かに、風が襟元を吹き渡つてまだ秋ならぬに涼しさを覺える。驚かす人もないので野禽が狎れて下り、午睡の夢が覺めて獨り幽草の香を聞き、頓に塵氛の一掃されたことを感ずる。昔は滄浪の水で塵纓を洗つたさうだが、塵が洗ひ去られるか否かが問題なのであるから、塵さへ洗ひ去られれば必ずしも滄浪に赴くには及ばない。

書紳

紳に書す

仕有職役勞。農有畎畝勤。
仕へては職役の勞有り、農には畎畝の勤有り。
優哉分司叟。心力無苦辛。
優なる哉分司の叟、心力苦辛無し。
歲晚頭又白。自問何欣欣。
歲晚れて頭又白し、自ら問ふ何ぞ欣欣たる。
新酒始開甕。舊穀猶滿囷。
新酒始めて甕を開き、舊穀猶囷に滿つ。
吾嘗靜自思。往往夜達晨。
吾嘗て靜に自ら思ひ、往往夜より晨に達す。
何以送吾老。何以安吾貧。
何を以てか吾が老を送らん、何を以てか吾が貧を安んせん。
歲計莫如穀。飽則不干人。
歲計は穀に如くは莫し、飽けば則ち人に干めず。
日計莫如醉。醉則兼忘身。
日計は醉に如くは莫し、醉へば則ち兼ねて身を忘る。
誠知有道理。未敢勸交親。
誠に知る道理有るを、未だ敢て交親に勸めず。
恐爲人所哂。聊自書諸紳。
恐らくは人の哂ふ所とならん、聊か自ら諸を紳に書す。

【字解】【一】畎畝勤　耕作の勞苦。【二】優哉　のんきな貌。分司叟は分司東都の役を勤めてゐる翁。樂天自ら謂ふ。【三】歲晚　年老ゆること。【四】歲計　一年間の計畫。【五】日計　毎日の計畫。

【題義】紳は大帶である。紳に書して遺忘に備へた詩である。

【詩意】仕官すれば職務上の苦勞があり、農民となれば耕作の苦勞があり、どちらにしても苦勞を免れないが、唯分司東都の閑職に在る吾は優游して何の苦勞もない。年老いて頭髪は白くなつたが心は常に欣欣としてゐる。何となれば甕には新酒が熟して居り、食ひ殘りの舊穀はまだ倉に滿ちてゐるからである。吾は嘗て夜どほし靜に考へ込んだことがある。どうして老年を送らうか、どうして貧を救はうかと。併し今は其れが全く杞憂に終つたのは誠に幸である。因つて思ふに歲計は穀を得るに如くはない。穀さへ十分あれば何も人に求める所はない。又日計は酒に醉ふに如くはない。醉つてゐれば吾が身さへも忘れてゐられる。此れは疑ひなき道理であるが、恐らくは人に哂はれるだらうと思つて、未だ誰にも勸めはしない。唯吾が紳に書して置く。

秋遊平泉贈韋處士閒禪師

格詩　書紳　秋遊平泉贈韋處士閒禪師

秋平泉に遊び韋處士・閒禪師に贈る

秋景引閒步。山遊不知疲。
杖藜捨輿馬。十里與僧期。
昔嘗憂六十。四體不支持。
今來已及此。猶未苦衰羸。

予往年有詩、云、三十氣太壯、胷中多是非。六十年太老、四體不支持。今故云。

心興遇境發。身力因行知。
尋雲到起處。愛泉聽滴時。
南村韋處士。西寺閒禪師。
山頭與澗底。聞健且相隨。

【題義】秋平泉といふ處に遊び韋處士（名は楚）と閒禪師とに贈つた詩である。

【詩意】秋景色に誘はれて山に遊んだが少しも疲勞を感じない。輿馬を捨て藜の杖をついて僧と相會せんが爲に十里の道を歩いて來た。昔は六十になつたら身體がもつまいと心配したが、今一こまで來ても少しも苦痛を感せず、よい景色に遇つては感興を發し、行けば行くほど身力も增すやうに思はれ、或は雲の起る處に分け入り、或は泉の滴る聲を聽きなどして樂んだ。南村の韋處士と西寺の閒禪師とに會し、二人が山頂と澗底とに達者で常に相從遊してゐるといふ話も聞くことが出來た。

遊坊口懸泉偶題石上　時爲河南尹。

坊口の懸泉に遊び偶〻石上に題す　時に河南尹たり。

濟源山水好。老尹知之久。
常日聽人言。今秋入吾手。
孔山刀劒立。沁水龍蛇走。
危磴上懸泉。澄灣轉坊口。
虛明見深底。淨綠無纖垢。
仙棹浪悠揚。塵纓風抖藪。
巖寒松柏短。石古莓苔厚。
錦座纓高低。翠屏張左右。
雖無安石妓。不乏文擧酒。
談笑逐身來。管絃隨事有。
時逢杖錫客。或値垂綸叟。

濟源山水好し、老尹之を知ること久し。
常日人の言を聽き、今秋吾が手に入る。
孔山刀劒のごとく立ち、沁水龍蛇のごとく走る。
危磴懸泉に上り、澄灣坊口に轉ず。
虛明にして深底を見、淨綠にして纖垢無し。
仙棹浪悠揚し、塵纓風抖藪す。
巖寒くして松柏短く、石古りて莓苔厚し。
錦座高低を纓り、翠屏左右に張る。
安石が妓無しと雖も、文擧が酒に乏しからず。
談笑身を逐ひて來り、管絃事に隨ひて有り。
時に錫を杖つける客に逢ひ、或は綸を垂るる叟に値ふ。

相與澹忘歸。自辰將及酉。
公門欲返駕。溪路猶廻首。
早晩重來遊。心期罷官後。

【字解】【一】坊口　町の入口。懸泉は瀑布なり。柳宗元の詩に懸泉粲成レ簾とある。【二】濟源　縣の名。河南省に屬す。【三】老尹　樂天自ら謂ふ。時に河南尹たり。【四】常日　嘗て。【五】孔山　山の名。【六】沁水　川の名。【七】悠揚　ゆつたりしてゐる貌。【八】塵纓　塵にまみれた冠の紐。抖擻は動かすこと。【九】翠屏　綠の屏風。【一〇】安石　晉の謝安字は安石、東山に隱居し妓を以て相從ふ、人語をなして曰く、安石出でずんば蒼生を如何せんと。年四十餘、始めて出でて桓溫の司馬となる。【一一】文舉　後漢の孔融、字は文舉。漢室の亂に値ひ志靖難に在り、然れども、才疏に意廣く、終に成功なし。嘗て自ら謂ふ、座上客常に滿ち、樽中酒空しからず、吾憂なしと。【一二】錫　錫杖、僧の持つ所の杖。【一三】綸　釣絲。【一四】辰　午前八時、酉は午後六時。【一五】公門　役所の門。【一六】早晩　いつか。

【題義】町の入口に在る瀑布の處に遊び石に題した詩である。

【詩意】濟源の山水の景色のよい處であることは自分も久しい前から知つてゐた。今迄は人の言ふのを聽いてゐたのであるが、今秋は其處が我が管轄内の地になつた。孔山が劍のやうに聳え、沁水が龍蛇のやうに走り、瀑布の上には高い石段があり、瀧壺が灣を成して町の入口を回轉してゐる。其水が澄んでゐて底まで見え纖塵をも留めない。波のまにまに舟を棹せば風がそよそよと吹いて來て、巖に倚つて矮松が立ち、古びた石に苔が生えてゐる。高く低く錦の座席を敷いたやうで、右に左に綠の屏風を立てたやうである。謝安のやうに妓を携へてはゐないが、孔融と同じく酒は十分にある。因つて談笑したり管絃を弄したりして樂み、時に僧侶や釣徒に遇ひ、相與に歸るのも忘れて朝から夕方までゐた。いざ駕を返して役所に歸らうとしたが、去るのを惜んで又振返つて觀た。いづれ官を罷め自由の身になつたら重ねて來り遊ばうと心に期した。

對火翫雪

火に對して雪を翫ぶ

平生所心愛。愛火兼憐雪。
火是臘天春。雪爲陰夜月。
鵝毛紛正墮。獸炭敲初折。
盈尺白鹽寒。滿爐紅玉熱。
稍宜杯酌動。漸引笙歌發。
但識歡來由。不知醉時節。
銀盤堆柳絮。羅袖摶瓊屑。
共愁明日銷。便作經年別。

平生心に愛する所は、火を愛し兼ねて雪を憐む。火は是れ臘天の春、雪は陰夜の月たり。鵝毛紛として正に墮ち、獸炭敲きて初めて折る。尺に盈ちて白鹽寒く、爐に滿ちて紅玉熱す。稍く杯酌の動くに宜しく、漸く笙歌を引きて發す。但歡の來る由を識り、醉の時節を知らず。銀盤柳絮を堆くし、羅袖瓊屑を摶つ。共に愁ふ明日銷え、便ち年を經る別を作さんことを。

【字解】【一】臘天　十二月をいふ。【二】陰夜　暗夜。【三】鵝毛　鵝鳥の羽。雪に喩ふ。【四】獸炭　獸の形に製した炭。晉書に羊琇性豪侈、炭屑和作二獸形一以温レ酒、洛下豪貴、咸競效レ之とある。【五】柳絮　柳の花。雪に喩ふ。【六】羅袖　薄絹の袖。瓊屑は玉の細屑。雪に喩ふ。

【題義】火に當りながら雪を賞したことを述べた詩である。

【詩意】余は平生火と雪とを愛する。火は寒中の春ともいふべく、雪は暗夜の月ともいふべきである。鵝毛のやうに雪のふりしきるとき、獸炭を折つて爐に投ずれば、雪は積つて白鹽の如く、火は熱して紅玉の如くである。漸く酒を酌み笙歌を發すれば、いつの間に醉つたのか、歡樂の情が湧いて來て銀の盆に雪を盛り薄絹の袖で之を搏つた。併し明日此火と雪とが銷ゆれば又一年間の別となるのかと思へば頓に憂愁の情を發せしめる。

六年寒食。洛下宴遊。贈二馮李二少尹一

六年の寒食、洛下に宴遊し、馮・李二少尹に贈る

豐年寒食の節、美景洛陽の城。
豐年寒食の節、美景洛陽の城。
三尹皆强健。七日盡晴明。
三尹皆强健、七日盡く晴明。
東郊蹋二青草一。南園攀二紫荆一。
東郊青草を蹋み、南園紫荆を攀づ。
風拆二海榴豔一。露墜二木蘭英一。
風は海榴の豔を拆き、露は木蘭の英を墜す。
假開春未老。宴合日屢傾。
假開けて春未だ老いず、宴合して日屢傾く。
珠翠混二花影一。管絃藏二水聲一。
珠翠花影に混じ、管絃水聲を藏す。
佳會不易得。良辰亦難幷。
佳會得易からず、良辰亦幷せ難し。
聽吟歌暫輟。看舞杯徐行。
吟を聽きて歌暫く輟み、舞を看て杯徐に行る。
米價賤如土。酒味濃於飳。
米價賤きこと土の如く、酒味飳よりも濃なり。
此時不盡醉。但恐負平生。
此時醉を盡さずんば、但恐らくは平生に負かんことを。
殷勤二曹長。各捧一銀觥。
殷勤なる二曹長、各一の銀觥を捧ぐ。

【字解】【一】三尹　白樂天自身と馮・李二少尹とをいふ。【二】假開　休暇が始まる。【四】珠翠　妓女の裝飾。【五】良辰　よき時。【六】殷勤　れんごろなること。曹長は少尹をいふ。【七】銀觥　さかづき。

【題義】太和六年の寒食（冬至から百五日目を云ふ）に洛陽城下に宴遊し、馮・李二少尹（時に樂天は河南尹であつた）に贈つた詩である。

【詩意】今や豐年の寒食に遇ひ洛陽城下の景色が特に美しい。三尹ともに皆强健で七日の休暇が毎日晴天なのも嬉しい。因つて東郊に青草を蹋んで散歩し、南園に紫荆を攀ぢて遊べば、風は海榴の豔な

るを拆き、露は木蘭の英を墜し、實に心地よき限りである。休暇が始まつて春未だ老いず、毎日毎日宴會で日を送り、珠翠の粧を凝らした美妓が花の影に雜り、管絃の音に水聲も消されてしまふほどである。佳會はまた得べからず、良時は重ねて來らねば、思ふ存分興を盡さうと思ひ、詩を吟ずるのを聽いて吾が歌を輟め、舞に看とれて杯をさすのを忘れなどした。今や豐年の事とて米價も安く酒は錫よりも濃い。かかる時に醉はなければ平生の願に負くわけである。さればにや馮・李二少尹は殷勤にも余に各〻一杯づつの酒を捧げた。

苦熱中寄舒員外

何堪日衰病。復此時炎燠。
厭對俗杯盤。倦聽凡絲竹。
藤牀鋪晚雪。角枕截寒玉。
安得清瘦人。新秋夜同宿。
非君固不可。何夕枉高躅。

苦熱の中舒員外に寄す

何ぞ日に衰病するに堪へん、復此時炎燠なり。
俗杯盤に對するを厭ひ、凡絲竹を聽くに倦む。
藤牀晚雪を鋪き、角枕寒玉を截る。
安んぞ清瘦の人を得て、新秋夜同じく宿せん。
君に非ずんば固より不可なり、何れの夕にか高躅を枉ぐる。

【字解】【一】炎燠　炎熱なり。【二】高躅　高尚な足迹。

【題義】炎暑甚だしき時舒員外に寄せた詩である。

【詩意】この炎熱甚だしき時に方り身の日に衰病するを覺え、俗物を相手に酒を飲む氣にもなれず、くだらない音樂を聽かうとも思はない。藤の寢臺は雪を鋪いたやうに白く、角製の枕は寒玉を截つたやうである。願はくは清瘦の人を得て新秋の夜に同じく此處に寢たいものである。それには君を措いて外に人はない。いつ御出で下さるであらうか。

閒夕

一聲早蟬發。數點新螢度。
蘭釭耿無煙。筠簟清有露。
未歸後房寢。且下前軒步。
斜月入低廊。涼風滿高樹。
放懷常自適。遇境多成趣。
何法使之然。心中無細故。

閒夕

一聲早蟬發し、數點新螢度る。
蘭釭耿として煙無く、筠簟清くして露有り。
未だ後房に歸りて寢ねず、且く前軒に下りて步む。
斜月低廊に入り、涼風高樹に滿つ。
懷を放にして常に自適し、境に遇ひて多く趣を成す。
何の法か之をして然らしむる、心中細故無し。

【字解】【一】蘭釭　蘭膏を燃やす所の燈。耿は明なる貌。【二】筠簟　たかむしろ。竹を編んで作つた敷物。【三】後房　奥の

方の部屋。【四】細故　すこしの故障。すこしの心配。

【題義】閑静な初秋の夜の境地を敍した詩である。

【詩意】一聲二聲蟬も鳴き始め、螢もちらほら飛び交はし、蘭膏の燈は明かにして煙も立たず、簟には清らかに露がおちてゐる。まだ部屋にはひつて寢るには時が早いので、暫く軒先を歩きまはつてゐると、月が斜に低廊にさし込み、風は涼しく高樹を吹き、誠に爽快である。因つて思の儘に心を樂ましめ、それぞれの境地に遇うて皆佳趣を感ずる。何の敎法が此の如き效果を與へたのか、心中に少しのこだはりもない。

寄情

情を寄す

灼灼早春梅。東南枝最早。
持來翫未足。花向手中老。
芳香銷掌握。悵望生懷抱。
豈無後開花。念此先開好。

灼灼たり早春の梅、東南の枝最も早し。
持し來りて翫ぶこと未だ足らず、花は手中に向ひて老ゆ。
芳香掌握に銷し、悵望懷抱に生ず。
豈後に開く花無からんや、此の先づ開けるの好きを念ふ。

【字解】【一】灼灼　花の美しき貌。【二】懷抱　心中。

【題義】早春の梅花を惜んだ詩である。

【詩意】早春の梅の花が灼灼として美しく、東南の方にさした枝が特に早く花を著けた。折り來つてまだ十分に賞翫しないうちに、早くも手中の花は萎んで來た。いつしか香氣も失せたので坐ろに悵恨の情が湧き起つた。此後開く花はいくらもあるのではあるが、百花の魁をなす此早梅を惜むの情に堪へない。

舒員外遊香山寺。數日不歸。兼辱尺書。大誇勝事。時正値坐衙慮囚之際。走筆題長句以贈之

舒員外香山寺に遊び、數日歸らず、兼ねて尺書を辱うし、大に勝事を誇る。時正に衙に坐して囚を慮るの際に値ふ。筆を走らし長句を題して以て之に贈る

香山石樓倚天開。香山の石樓天に倚りて開き、
翠屏壁立波環廻。翠屏壁立波環廻す。
黃菊繁時好客到。黃菊繁き時好客到り、

【字解】【一】香山寺　洛陽の龍門山の東なる香山に在る寺の名。【二】尺書　書信なり。尺牘といふが如し。

碧雲合處佳人來。（謂遣三英・蒨二妓一與二舒君一同遊。）

碧雲合する處佳人來る。

酡顏一笑天桃綻。
清吟數聲寒玉哀。
軒騎逶遲棹容與。
留連三日不能廻。
白頭老尹府中坐。
早衙纔退暮衙催。
庭前堦上何所有。
纍囚成貫案成堆。
豈無池塘長秋草。
亦有絲竹生塵埃。
今日清光昨夜月。
竟無人來勸一杯。

酡顏一笑天桃綻び、
清吟數聲寒玉哀む。
軒騎は逶遲し棹は容與し、
留連三日廻る能はず。
白頭の老尹府中に坐し、
早衙纔に退きて暮衙催す。
庭前堦上何の有る所ぞ、
纍囚貫を成し案は堆を成す。
豈池塘に秋草を長ぜる無からんや、
亦絲竹の塵埃を生ぜる有り。
今日の清光昨夜の月、
竟に人の來りて一杯を勸むる無し。

【題義】舒員外、香山寺に遊び數日留連して歸らず、且書を樂天に寄せて其快を誇稱した。時に樂天は役所にゐて罪人の取調べに忙殺されてゐたので、筆を走らせ此詩を書して贈つたのである。

【詩意】香山の石樓が天に倚つて聳え、巖壁が削立して水が環流してゐる。菊の花盛りに好客が舞ひ込み、碧雲の聚まる處に美人が來合せ、醉うて笑ふ美人の顏は桃の花の綻びたやうで、數聲の清吟は寒玉の哀響のやうであつたらう。因つて君は車騎を列ね舟に棹し三日の間留連して歸る能はず、書を我に寄せて勝事を誇つた。時に白髮の老尹たる我は役所にゐたが、早衙が終つたと思ふうちに早くも暮衙の時刻になり、庭前堦上に罪人が列を成し其調書が山を成す有樣で、君と樂みを俱にすることなどは思ひも寄らない。池塘に秋草が成長して賞するに足る風情がないのではないが、多忙の爲に管絃を弄する暇もなく、昨日も今日も明月であるのに、來て杯を勸めてくれる人もない。

【三】勝事　愉快な事。
【四】衙　役所。
【五】石樓　香山に石樓あり。
【六】翠屏　綠の屏風。巖壁に喩ふ。
【七】好客　よき客。舒員外を指す。
【八】酡顏　酒に醉うて顏の赤くなること。楚辭に美人既醉、朱顏酡些とある。天桃は若き女子に喩ふ。詩經周南桃夭篇に桃之夭夭、灼灼其華とある。
【九】軒騎　車と馬。逶遲は斜に去る貌。容與は徘徊といふが如し。
【一〇】留連　逗留すること。
【一一】白頭老尹　白樂天自ら謂ふ。時に河南尹たり。府中は役所の中。
【一二】早衙　官署の朝の禮式。暮衙は夕方の禮式。
【一三】纍囚　縛せられてゐる囚人。貫は列なり。

早冬遊王屋自靈都抵陽臺上方望天壇偶吟成章寄溫谷周尊師中書李相公

早冬遊王屋。自靈都抵陽臺上方。望天壇。偶吟成章。寄溫谷周尊師中書李相公

早冬王屋に遊び、靈都より陽臺の上方に抵り、天壇を望み、偶吟して章を成し、溫谷の周尊師・中書李相公に寄す

霜降山水清。王屋十月時。

霜降りて山水清し、王屋十月の時。

格詩　早冬遊王屋自靈都抵陽臺上方望天壇偶吟成章寄溫谷周尊師中書李相公

石泉碧漾漾。巖樹紅離離。
朝爲靈都遊。暮有陽臺期。
飄然世塵外。鸞鶴如可追。
忽念公程盡。復慙身力衰。
天壇在天半。欲上心遲遲。
嘗聞此遊者。隱客與損之。
各抱貴仙骨。俱非泥垢姿。
二人相顧言。彼此稱男兒。
若不爲松喬。卽須作皐夔。
今果如其語。光彩雙葳蕤。
一人佩金印。一人翳玉芝。
我來高其事。詠歎偶成詩。
爲君題石上。欲使故山知。

【字解】【一】王屋　山の名。山西省陽城縣の西南に在り、南は河南省濟源縣に跨り、西は垣曲縣の界に跨る。寰宇記に山高八千丈、廣數百里、三十六洞、小有爲蓬洞　尊　十九山、王屋爲衆山之最一とある。靈都、陽臺は皆山の名であらう。【三】天壇　山の名。王屋山を天壇山ともいふ。【三】中書李相公　中書門下同平章事李宗閔をいふ。【四】漾漾　水の動く貌。【五】離離　分披繁茂の貌。【六】公程　公事なり。【七】遲遲　ためらふ貌。【八】隱客　周尊師を指す。損之は李宗閔の字。【九】松喬　赤松子と王子喬。並に古の仙人。【一〇】皐夔　舜の時の大臣、皐陶と夔。【一一】葳蕤　草木葉垂るる貌。【一二】玉芝　靈草。【一三】故山　もとゐた山。天壇山を指す。

【題義】冬の初めに王屋山に遊び、靈都より陽臺の頂に至り、天壇山を望見して偶〻此詩を作り、周尊師と李宗閔とに寄せたのである。

【詩意】冬十月のことであるから王屋山には既に霜が降つて山水が一入清澄になり、石泉は綠波を漂はせ巖樹は紅葉してゐる。余は朝に靈都に遊び暮に陽臺にたどりついた。身は世塵の外に飄然として鸞鶴と相伍することも出來さうなので、忽ち公職を退いて隱遁でもしようかと思ひ、復身力の減退を慙ぢた。仰げば天壇の峯が天半に聳えてゐる。更に其頂に上らうかと思つたが心に躊躇した。聞けば君等は嘗て此山に遊び、各〻仙人たる資質を有し、俗氣が少しもなかつたさうだ。且兩人相顧みて「君も僕も均しく男兒であるからは、將來若し仙人とならずば、必ず宰相とならうではないか」と言つたさうだが、今日は其言が實現されて俱に光彩を發し、一人は金印を佩びて宰相となり、一人は靈草を翳して道士となつた。我今此山に來て其事に感じ、詠嘆のあまり此詩を作つた。因つて君等の爲に此詩を石上に題し、天壇山をして君等の現狀を知らしめる次第である。

醉中重留夢得

醉中重ねて夢得を留む

劉郎劉郎莫先起。
蘇臺蘇臺隔雲水。
酒盞來從一百分。
馬頭去便三千里。

劉郎劉郎先づ起つこと莫れ、
蘇臺蘇臺雲水を隔つ。
酒盞來り從ふこと一百分、
馬頭去れば便ち三千里。

【題義】劉禹錫が蘇州刺史に任ぜられて赴任するとき、醉中別れを惜んで引留めた詩である。

【詩意】劉郎よ、そんなに出立を急がずに、我がなみなみとついだ此酒を落著いて飲むがよい。蘇州は雲水を隔つる遠い處で、一たび馬に乘つて去れば此を距ること三千里である。

【字解】【一】夢得　劉禹錫の字。【二】劉郎　劉禹錫をいふ。【三】蘇臺　蘇州なり。劉禹錫は和州刺史より入りて主客郎中・集賢直學士となり、復た蘇州刺史となる。【四】酒盞　さかづき。一百分は杯に滿つること。杜牧の醉後題二僧院一に、艤船一掉百分空、十歲青春不レ負レ公とある。

白樂天詩後集　卷三

格詩　凡五十八首

詠興五首　并序

詠興五首　并に序

七年四月。予罷二河南府一。歸二履道第一。廬舍自給。衣儲自充。無レ欲無レ營。或歌或舞。頽然自適。蓋河洛間一幸人也。遇レ興發レ詠。偶成二五章一。各以二首句一命爲二題目一。

【訓讀】七年四月、予河南府を罷め、履道の第に歸る。廬舍自ら給し、衣儲自ら充ち、欲する無く營む無く、或は歌ひ或は舞ひ、頽然として自適す。蓋し河洛間の一幸人なり。興に遇ひて詠を發し、偶〻五章を成す。各〻首句を以て命じて題目と爲す。

【字解】【一】七年四月　太和七年四月、樂天、病を以て河南尹を免ぜられ、再び賓客分司を授けらる。【二】第は邸なり。【三】衣儲　衣食といふが如し。【四】頽然自適　靜に心に任せて日を送ること。【五】履道　洛陽の里名。

【一】

解印出公府

印を解きて公府を出づ

解印出公府。抖擻塵土衣。
百吏放爾散。雙鶴隨我歸。
歸來履道宅。下馬入柴扉。
馬嘶返舊櫪。鶴舞還故池。
雞犬何忻忻。鄰里亦依依。
年顏老去日。生計勝前時。
有帛禦冬寒。有穀防歲飢。
飽於東方朔。樂於榮啓期。
人生且如此。此外吾不知。

印を解きて公府を出で、塵土の衣を抖擻す。
百吏爾を放して散せしめ、雙鶴我に隨ひて歸る。
歸り來る履道の宅、馬より下りて柴扉に入る。
馬嘶きて舊櫪に返り、鶴舞ひて故池に還る。
雞犬何ぞ忻忻たる、鄰里亦依依たり。
年顏は去りし日より老い、生計前時に勝れり。
帛有りて冬の寒きを禦ぎ、穀有りて歲の飢を防ぐ。
東方朔よりも飽き、榮啓期よりも樂めり。
人生且此の如し、此外吾知らず。

【字解】【一】解印　官を辭すること。公府　役所。河南府。【二】抖擻　掃ひ除くこと。【三】舊櫪　もとの廐。【四】忻忻　よろこぶ貌。【五】依依　なつかしき貌。【六】東方朔　漢の武帝に事ふ。嘗て帝に謂うて曰く、侏儒は飽いて死せんと欲し、臣朔は饑ゑて死せんと欲すと。【七】榮啓期　孔子泰山に遊び榮啓期の鹿裘帶索し琴を鼓して歌ふを見、問うて曰く、先生何をか樂むと。曰く吾が樂最も多し。天萬物を生じ人を貴しとなす。吾、人たるを得たるは一樂なり云云と。

【詩意】印を解き官を辭して役所を去り、衣の塵を掃ひ除き、部下の官吏等を退散せしめ、二羽の鶴を隨へて我が履道里の邸に歸つた。かくて馬ももとの廐に歸り鶴ももとの池に還つた。雞犬も吾が歸つたことを欣び、近鄰の人も特に懷しさを感ずるやうに見える。吾は嘗て此を去つた時から見れば大分ふけたけれども、生計は以前よりも裕福になり、寒さを防ぐ衣服もあり、飢ゑ凌ぐ穀物もあり、東方朔よりも饒に、榮啓期よりも樂しい。これでこそ人生の滿足を得たといふもので、此外には何も求むる所はない。

〔二〕出府歸吾廬

府を出でて吾が廬に歸る

出府歸吾廬。靜然安且逸。
更無客干謁。時有僧問疾。
家僮十餘人。櫪馬三四匹。
慵發經旬臥。興來連日出。
出遊愛何處。嵩碧伊瑟瑟。
況有清和天。正當疎散日。
身閒自爲貴。何必居榮秩。

府を出でて吾が廬に歸り、靜然として安く且つ逸す。
更に客の謁を干むる無く、時に僧の疾を問ふ有り。
家僮十餘人、櫪馬三四匹。
慵發るときは旬を經て臥し、興來るときは日を連ねて出づ。
出遊何れの處をか愛する、嵩碧伊れ瑟瑟たり。
況んや清和の天有り、正に疎散の日に當るをや。
身閒なれば自ら貴たり、何ぞ必ずしも榮秩に居らん。

心足卽非貧。豈唯金滿室。
吾觀權勢者。苦以身徇物。
炙手外炎炎。履氷中慄慄。
朝飢口忘味。夕惕心憂失。
但有富貴名。而無富貴實。

【字解】【一】嵩碧　嵩山の綠。悉悉は綠色の貌。【二】清和天　四月頃をいふ。【三】榮秩　高位。【四】炙手　手をかざせば熱さを感ずる程勢焰の盛なるをいふ。炎炎は熱の强き貌。【五】履氷　薄氷をふむが如く危きこと。中慄慄は心中常に懼れ抱くこと。

【詩意】役所を去つて吾が家に歸り、始めて身心の安逸を悟つた。面會を求める客もなく、たまに僧が病氣見舞に來るぐらゐのものだ。十餘人の僮僕と三四匹の馬を畜ひおき、大儀になれば十日間も寐て居り、氣が向けば毎日でも遊びに出る。どこが一番氣に入つてゐるかといへば、何と謂つても嵩山の綠の悉悉たるさまが一等である。今は清和の氣候で、おまけに閑散の身と來てゐるから愉快なことは此上なしだ。世に身の閑暇なほど貴いことはあるまい。位の高いことなどは問題ではない。また心の滿足が何よりの富だ。金が堂に滿ちてゐるばかりが富ではない。世の權勢家を觀るに、身を苦めて名利を貪り、外觀だけは勢威赫赫であるが內心は常に疑懼を抱き、飢ゑては味を忘れて貪り食ひ、名利を失ふことを惕れては心常に憂へ、富貴といふは名ばかりで少しも其實はない。

【餘論】唐宋詩醇に云く「胸に眞得あり、手に信せて拈來し、自ら天趣饒し。此種の詩境は的に是れ淵明より脫化して出づ。ただ繁簡古近の別なからざるも、必ず字句形迹を以て之を求むるは、是れ耳食の見なり」と。

〔三〕

池上有小舟

池上有小舟。舟中有胡牀。
牀前有新酒。獨酌還獨嘗。
熏若春日氣。皎如秋水光。
可洗機巧心。可蕩塵垢腸。
岸曲舟行遲。一曲進一觴。
未知幾曲醉。醉入無何鄉。
賓緣潭島間。水竹深青蒼。
身閒心無事。白日爲我長。

池上に小舟あり

池上に小舟有り、舟中に胡牀有り。
牀前に新酒有り、獨り酌みて還獨り嘗む。
熏ずること春日の氣の若く、皎たること秋水の光の如し。
機巧の心を洗ふ可く、塵垢の腸を蕩ふ可し。
岸曲りて舟の行くこと遲く、一曲に一觴を進む。
未だ知らず幾曲にて醉ふを、醉ひて無何の鄉に入る。
潭島の間に賓緣すれば、水竹深くして靑蒼。
身閒にして心無事、白日我が爲に長し。

我若未忘世。雖閒心亦忙。
世若未忘我。雖退身難藏。
我今異於是。身世交相忘。

【字解】〔一〕胡牀　牀几。こしかけ。〔二〕機巧心　名利を求むる俗心。〔三〕無何鄉　莊子逍遙遊篇に無何有鄉とあり。〔四〕貪緣　つきまとふ。

【詩意】池上に小舟があり、舟の中に牀几があり、牀几の前に酒がある。獨りで酌んで獨りで飲む。酒の香は春の氣の如く、光は秋の水の如くで、之を飲めば俗念枯腸を一洗することが出來る。岸の曲るに隨つて遲遲として舟を進め、一曲ごとに一杯を傾くれば、幾曲で醉ふか知らぬが、醉へば憂を忘れて無何有鄉に入り、潭や島の間に緣り沿へば水竹の綠が滴るやうである。身も心も無事安泰で特に日の長いのが嬉しい。併し我若し世を忘れなければ、如何に身は閒でも心は忙しいであらう。また世が若し我を忘れなければ、たとひ官を退いても我が身を藏しておくことは出來まい。所が今然らずして身も世も相忘れてゐるから、かくの如く無事安泰でゐられるのである。

〔四〕

四月池水滿
四月池水滿。龜游魚躍出。
四月池水滿ち、龜游び魚躍り出づ。

吾亦愛吾池。池邊開一室。
人魚雖異族。其樂歸於一。
且與爾爲徒。逍遙同過日。
爾無羨滄海。蒲藻可委質。
吾亦忘青雲。衡茅足容膝。
況吾與爾輩。本非蛟龍匹。
假如雲雨來。祇是池中物。

【字解】〔一〕滄海　大海。〔二〕蒲藻　池中に生ずる草。〔三〕青雲　高位高官に喩ふ。〔四〕衡茅　衡門茅屋。〔五〕池中物　三國志に、周瑜曰、劉備非久屈爲人用者、恐蛟龍得雲雨、終非池中物也とある。

【詩意】四月になつて池の水が滿ち、龜や魚が遊んだり躍つたりしてゐる。吾も吾が池を愛して、其傍に一室を構へた。人と魚とは種類を異にしてはゐるが、其樂には相違のある筈はないのだから、吾と汝と仲間になり逍遙して俱に日を送らう。汝も大海などを羨まずに、蒲や藻の間に身を託してゐるがよい。吾も榮達などを希はず、草廬の中に安んじて暮さう。まして吾も汝も固より蛟龍の類ではないから、たとひ、雲や雨を得ても大飛躍は出來ず、生涯この池の中に埋もれ果てるのが柄相當なのであるから。

〔五〕

小庭亦有月

小庭亦有月。小院亦有花。
可憐好風景。不解嫌貧家。
菱角執笙簧。谷兒抹琵琶。
紅綃信手舞。紫綃隨意歌。
菱・谷・紫・紅。皆小鬟獲名也。
村歌與社舞。客哂主人誇。
但問樂不樂。豈在鐘鼓多。
客告暮將歸。主稱日未斜。
請客稍深酌。願見朱顏酡。
客知主意厚。分數隨後加。
堂上燭未秉。座中冠已峩。
左顧短紅袖。右命小青蛾。

小庭にも亦月あり

小庭にも亦月有り、小院にも亦花有り。
憐む可し好風景、貧家を嫌ふを解せず。
菱角笙簧を執り、谷兒琵琶を抹す。
紅綃手に信せて舞ひ、紫綃意に隨ひて歌ふ。
村歌と社舞と、客哂ひ主人誇る。
但問ふ樂むと樂まざると、豈鐘鼓の多きに在らんや。
客は告げて暮に將に歸らんとす、主は稱す日未だ斜なら[ずと]。
請ふ客稍や深く酌め、願くは朱顏の酡きを見ん。
客は主意の厚きを知り、分數隨ひて後に加はる。
堂上燭未だ秉らず、座中冠已に峩し。
左に短紅袖を顧み、右に小青蛾に命ず。

長跪謝貴客。蓬門勞見過。
客散有餘興。醉臥獨吟哦。
幕天而席地。誰奈劉伶何。

長跪貴客に謝し、蓬門見過を勞す。
客散じて餘興有り、醉臥して獨り吟哦す。
天を幕として地を席とす、誰か劉伶を奈何せん。

【字解】【一】小院　なかには。【二】笙簧　樂器の名。【三】抹　かきならす。【四】朱顏　紅顏。【五】分數　杯の數。【六】燭未秉　燈火を點ぜぬこと。【七】冠已峩　冠をかぶつて歸る支度をすること。【八】短紅袖　少婢をいふ。【九】小青蛾　前に同じ。【一〇】蓬門　茅屋といふが如し。見過は來訪なり。【一一】劉伶　晉の大酒家の名。樂天自ら比して謂ふ。

【詩意】我が小庭にも月もあれば花もある。花月の好風景が貧家をも嫌はず風情を添へてくれるのは誠に愛すべき限である。菱角は笙簧を吹き谷兒は琵琶をかきならし、紅綃は手に任せて舞ひ紫綃は意の儘に歌つた。鄙歌と田舍踊ではあるが、客は微笑して鑑賞し、主人(樂天自ら謂ふ)は得意になつてゐる。要は人が樂めばよいので鐘鼓の多いばかりが能ではない。やがて客は「日が暮れるから」と歸らうとすると、主人は「まだまだ日も高いから、もつと杯を重ねなされ」と引留めた。客は主人の厚意にほだされて杯の數を重ねたが、火ともし頃になつて冠をかぶつて歸支度を整へた。因つて主人は左右の少婢に命じなどして跪いて客に謝し、茅屋に來訪せられた勞を慰した。客が歸つた後で天を幕とし地を席として醉臥し、高らかに詩を吟じた。ただ獨り醉吟してゐる劉伶を誰も奈何ともすることが出來なかつた。

秋涼閒臥

殘暑晝猶長。早涼秋尙嫩。
露荷散清香。風竹含疎韻。
幽閒竟日臥。衰病無人問。
薄暮宅門前。槐花深一寸。

【字解】【一】嫩　わかきこと。【二】露荷　露を帶びた蓮。【三】疎韻　まばらな響。【四】竟日　終日。

【題義】秋の初に閒臥してゐるさまを述べた詩である。

【詩意】秋とはいふものの、まだ暑氣が名殘を留め日足も長い。露を帶びた蓮が淸香を散じ、風に吹かれる竹が折折淸韻を發する。暇に任せて終日寐てゐるが、誰も來り訪ふ者もない。夕方門前に出て見れば槐の花が落ちて一寸も積つてゐる。

酬思黯相公見過弊居戲贈

軒蓋光照地。行人爲徘徊。
呼傳君子出。乃是故人來。

思黯相公の弊居に見過し戲に贈るに酬ゆ

軒蓋光地を照し、行人徘徊を爲す。
呼びて君子の出づるを傳ふ、乃ち是れ故人來る。

訪我入窮巷。引君登小臺。
臺前多竹樹。池上無塵埃。
貧家何所有。新酒三兩盃。
欸曲語上馬。從容復遲廻。
留守不外宿。日斜宮漏催。
但留金刀贈。未接玉山頹。
家醞不敢惜。待君來卽開。
村妓不辭出。恐君驟然咍。

我を訪ひて窮巷に入る、君を引きて小臺に登る。
臺前に竹樹多く、池上塵埃無し。
貧家何の有る所ぞ、新酒三兩盃。
欸曲に語りて馬に上り、從容として復遲く廻る。
留守外に宿せず、日斜にして宮漏催す。
但だ金刀の贈を留め、未だ玉山の頹るるに接せず。
家醞敢て惜まず、君が來るを待ちて卽ち開く。
村妓辭せずして出づ、恐らくは君が驟然として咍はんこと。

【字解】【一】思黯相公　牛僧孺、字は思黯、太和四年同平章事たり。因つて相公といふ。見過は來訪といふが如し。【二】軒蓋　馬車の日蔽。【三】行人　道をあるいてゐる人。【四】君子　高貴の人。思黯相公を指す。【五】故人　舊友。【六】欸曲　れんごろに。【七】留守　官名。東都留守なり、居守ともいふ。卷四にも和三思黯居守獨飲偶醉見示六韻一と題する詩がある。時に牛僧孺は東都留守であつたのであらう。【八】宮漏　水時計。【九】玉山頹　醉ひつぶれること。【一〇】家醞　手作りの酒。【一一】驟然　大笑する貌。

【題義】前宰相牛僧孺が樂天の宅を訪問して戲に贈つた詩に酬いた作である。

【詩意】馬車の光がきらきらと閃き道行く人が右往左往する。何事かと見て居れば高貴の御方の御出

ましだといふ。一體誰だらうと思つた所が吾が故人の牛相公の御來臨であつた。相公は我を訪うて駕を窮巷に枉げさせられたので、我は相公を案内して小臺に登つた。臺の前には竹樹が茂つて居り池は塵さへ留めず水が澄んでゐる。折角の御來臨ではあるが貧家のことで何も差上げるものもなく、ただ二三杯の新酒を勧めた。相公は歡談良久うして馬に上り別を惜んで歸らうとせられた。相公は東都留守の官に在るので外泊することは出來ず、日も西に傾き時刻も移つた所から、ただ置土産に金刀をくれたばかりで、醉倒する程歡醉もされずに御歸りになつたのは誠に遺憾である。手作りの酒を惜しげもなく勧め、村妓が遠慮もなくでしやばりなどしたので、相公には定めて大笑されたであらう。

再授賓客分司

優穩四皓官。清崇三品列。
伊予再塵忝。内愧非才哲。
俸錢七八萬。給受無虚月。
分命在東司。又不勞朝謁。
既資閒養疾。亦賴慵藏拙。
賓友得從容。琴觴恣怡悅。

再び賓客分司を授けらる

優穩なり四皓の官、清崇なり三品の列。
伊れ予再び塵し忝くし、内才哲に非ざるを愧づ。
俸錢七八萬、給受虚月無し。
分命東司に在り、又朝謁を勞せず。
既に閒に疾を養ふを資り、亦慵くして拙を藏するに賴る。
賓友從容するを得、琴觴怡悅を恣にす。

乘籃城外去。繫馬花前歇。
六遊金谷春。五看龍門雪。
吾若默無語。安知吾快活。
吾欲更盡言。復恐人豪奪。
應爲時所笑。苦惜分司闕。
但問適意無。豈論官冷熱。

籃に乘りて城外に去り、馬を繫ぎて花前に歇ふ。
六たび金谷の春に遊び、五たび龍門の雪を看る。
吾若し默して語る無くんば、安んぞ吾が快活を知らん。
吾更に言を盡さんと欲するも、復恐らくは人の豪奪せん—
應に時の笑ふ所となるべし、苦だ分司の闕くるを惜む。
但問ふ意に適するや無や、豈官の冷熱を論ぜん。—ことを。

【字解】【一】四皓官　漢の高祖の時、商山の四皓が太子の賓客になつた。因つて太子賓客の官をいふ。【二】三品　三位。【三】給受　俸錢を頂戴する。【四】分命在東司　東都分司の官に任ぜられたこと。【五】從容　くつろぎ樂むこと。【六】金谷　地名。洛陽の西に在り、昔、石崇の園を開き、豪奢を極めし處。【七】龍門　山の名。伊闕ともいふ。洛陽の南に在る。【八】豪奪　强奪といふが如し。【九】冷熱　閒散なると權要なると。

【題義】太和七年四月、病を以て河南尹を免ぜられ、再び太子賓客・分司東都の官を授けられたことを述べた詩である。

【詩意】太子賓客といふ官職は位も高く呑氣でもある。自分は菲才を以て再び此官に任ぜられ、毎月七八萬錢の俸給を頂戴し、且東都に分司してゐるので朝謁の勞をも免れ、靜に病を養ひ拙陋の身を藏してゐることも出來、友達と俱にくつろぎ琴酒を弄して樂を恣にすることも出來る。又籃に乘つたり馬に乘つたりして郊外に遊び、金谷の春や龍門の雪を賞することも出來る。誠に無上の幸福と謂

つて宜しい。若し默して此樂を語らなければ、誰も吾が樂を知らずにゐるであらう。併しあまり語り過ぎると此官を人に强奪される恐がある。世人からは笑はれるかも知れないが、自分は切に此官を免せられることを惜んでゐる。自分に取つては官職が快いか否かが問題なので。權力のあるなしは論ずる所ではないのだ。

把酒

把酒仰問天。古今誰不死。
所貴未死間。少憂多歡喜。
窮通諒在天。憂喜卽由己。
是故達道人。去彼而取此。
勿言未富貴。久忝居祿仕。
借問宗族間。幾人拖金紫。
勿憂漸衰老。且喜加年紀。
試數班行中。幾人及暮齒。
朝餐不過飽。五鼎徒爲爾。

酒を把る

酒を把りて仰ぎて天に問ふ、古今誰か死せざらん。
貴ぶ所は未だ死せざる間、憂少くして歡喜多きを。
窮通は諒に天に在り、憂喜は卽ち己に由る。
是故に達道の人、彼を去りて此を取る。
言ふ勿れ未だ富貴ならずと、久しく祿仕に居るを忝くす。
借問す宗族の間、幾人か金紫を拖く。
憂ふる勿れ漸く衰老するを、且年紀を加ふるを喜ぶ。
試みに班行の中を數ふるに、幾人か暮齒に及べる。
朝餐は飽くに過ぎず、五鼎は徒爲爾。

夕寢止求安。一衾而已矣。
此外皆長物。於我雲相似。
有子不留金。何況兼無子。

【字解】【一】窮通　窮達なり。【二】金紫　金印紫綬。高位高官。【三】年紀　年齢。【四】班行　同僚。【五】暮齒　老年。【六】五鼎　澤山の食饌。【七】長物　餘計な物。無用の長物。

【題義】酒杯を把つて天に問うたといふ意。

【詩意】杯を把つて天に問うた。昔から死なずに濟んだ人は一人もあるまい。だから生ある中に憂を少くし歡喜を多くすることが何よりも大事だ。窮達は天に在り憂喜は己に由るのだ。故に道に通じた人は憂を捨てて歡喜を取つた。予は未だ富貴にはならないが忝くも久しく官職にゐて俸祿を食んでゐる。宗族の間にも自分ほど高位に昇つた者はないのだ。段段衰老するのは憂ふるに足らない。寧ろ年齡の加はるのを喜んでゐる。吾が同僚の中でも予ほど老年になるまで生きた者が幾人あるか。珍味佳肴も高が一飽に過ぎない。孤衾の中に安眠するのが何よりの幸福といふものだ。其外は皆無用の長物で、我に取つては浮雲も同樣である。自分は子があつても金などを遺してやらうとは思はぬ。まして金も子もないから心に懸る雲もない。

首夏

林靜蚊未生。池靜蛙未鳴。
景長天氣好。竟日和且清。
春禽餘哢在。夏木新陰成。
兀爾水邊坐。翛然橋上行。
自問一何適。身閑官不輕。
料錢隨月用。生計逐日營。
食飽慙伯夷。酒足愧淵明。

陶潛詩云。飲酒常不足。

壽倍顏氏子。富百黔婁生。
有一卽爲樂。況吾四者并。
所以私自慰。雖老有心情。

【字解】【一】竟日　終日。【二】餘哢　あまりの鳴聲。【三】兀爾　動かざる貌。【四】翛然　ゆつたりとして。【五】料錢　唐制職官俸祿の外、別に食料を給す。之を料錢といふ。【六】伯夷　首陽山に餓死せし人。【七】淵明　晉の陶淵明。【八】顏氏子　孔子の弟子顏回、不幸短命にして死す。【九】黔婁生　古の貧士の名。

【題義】初夏の情景を敍した詩である。

【詩意】林が靜で蚊もまだ出ず、池も靜で蛙もまだ鳴かない。日が長く天氣もよく終日清和である。春禽の歌も名殘を留め夏木立の陰も濃になつた。我は爲す事もなく、或は水邊に坐し、或は橋上をさまよひなどしてゐる。因つて自ら問ふ。何と愉快なことであらう。身は閑職に在つて月月俸祿を賜はり、日日の生計には少しの心配もなく、食は飽き酒は足り、顏回の倍も生きて黔婁よりは百倍も富んでゐる。食・酒・壽・富四者の中の一つあつても樂いのに、自分は此四者を兼有してゐる。故に私に自ら慰めて老いたりと雖も悅んでゐるのである。

代鶴

我本海上鶴。偶逢江南客。
感君一顧恩。同來洛陽陌。
洛陽寡族類。皎皎唯兩翼。
貌是天與高。色非日浴白。
主人誠可戀。其奈軒庭窄。
飲啄雜雞羣。年深損標格。
故鄉渺何處。雲水重重隔。

鶴に代る

我は本海上の鶴、偶江南の客に逢ふ。
君が一顧の恩に感じ、同じく洛陽の陌に來る。
洛陽には族類寡し、皎皎唯兩翼。
貌は是れ天と與に高く、色は日に浴するに非ずして白し。
主人誠に戀ふ可し、軒庭の窄きを其奈せん。
飲啄して雞羣に雜り、年深くして標格を損す。
故鄉渺として何の處ぞ、雲水重重として隔る。

誰念深籠中。七換摩天翮。

誰か念はん深籠の中、七び摩天の翮を換へんとは。

【字解】【一】江南客　蘇州刺史たる白樂天をいふ。【二】君　白樂天を指して言ふ。【三】族類　同類の鶴。【四】皎皎　白き貌。【五】主人　白樂天を指して言ふ。【六】軒庭　のきさきや庭。【七】標格　器量。【八】七換摩天翮　天を摩して上る翮が七回換へる。即ち七年を經ること。

【題義】鶴に代つて其意中を述べた詩である。

【詩意】吾は本海邊の鶴であつたが、偶然江南に客たりし白樂天に逢ひ、遂に其恩に感じて俱に洛陽に歸つて來た。洛陽には吾が族類は至つて寡く、ただ吾等二羽在るのみである。（後集卷三、解印出二公府一及び後集卷八、有二雙鶴一留在二洛中一、忽見二劉郎中一依然鳴顧。劉因爲二鶴歎二篇一寄レ予。予以二二絶句一答レ之參照。）吾が貌は天と俱に高く、吾が色は浴せずとも潔白である。吾が主人の白樂天は吾が慕つて離るるに忍びぬ所の人であるが、其邸庭の狹いのには閉口する。吾は其庭内に久しく雞羣と相伍してゐるので、近頃では大分器量が低下したやうに思はれる。故郷は雲水遠く隔り、殆ど其の何處なるかを辨せぬ位である。籠の中に畜はれて七年にならうとは思ひもかけぬ所であつた。

立秋夕有レ懷夢得

露簟荻竹青。風扇蒲葵輕。
一與故人別。再見新蟬鳴。

立秋の夕夢得を懷ふあり

露簟は荻竹青く、風扇は蒲葵輕し。
一たび故人と別れ、再び新蟬の鳴くを見る。

是夕涼颯起。閒境入幽情。
迴燈見棲鶴。隔竹聞吹笙。
夜茶一兩杓。秋吟三數聲。
所思渺千里。雲水長洲城。

是夕涼颯起り、閒境幽情に入る。
燈を迴らして棲鶴を見、竹を隔てて吹笙を聞く。
夜茶一兩杓、秋吟三數聲。
思ふ所渺として千里、雲水長洲の城。

【字解】【一】夢得　劉禹錫、字は夢得。【二】露簟　露の降つたタカムシロ。【三】蒲葵　草の名、之を編んで團扇にする。【四】故人　舊友。劉夢得を指す。【五】所レ思　吾が思ふ所の人、即ち劉夢得。【六】長洲　蘇州なり。時に劉夢得は蘇州刺史であつた。

【題義】立秋の晩に蘇州に居る劉禹錫を懷うて作つた詩である。

【詩意】露がおりて簟の荻や竹が青く涼しげに見え、風を送る蒲葵の團扇も輕い秋となつた。一たび君と別れてから早くも二年目の新秋を迎へたのである。今日は立秋だといふので吹く風も特に涼しく感ぜられ、閑靜な境地の感興を惹くことが一入深い。燈を廻らして塒についた鶴を見たり、竹藪の外から漏れる笙の音を聞いたりして、澁茶を啜り詩を吟じて、雲水千里を隔つる長洲城に居る君の下に遙に想を馳せてゐる。

哭崔常侍晦叔

頑賤一拳石。精珍百鍊金。

崔常侍晦叔を哭す

頑賤なり一拳の石、精珍なり百鍊の金。

名價既相遠。交分何其深。
中誠一以合。外物不能侵。
逶迤二十年。與世同浮沈。
晚有退閒約。白首歸雲林。
垂老忽相失。悲哉口語心。
春日嵩高陽。秋夜清洛陰。
丘園共誰卜。山水共誰尋。
風月共誰賞。詩篇共誰吟。
花開共誰看。酒熟共誰斟。
惠死莊杜口。鍾歿師廢琴。
道理使之然。從古非獨今。
吾道自此孤。我情安可任。
唯將病眼淚。一灑秋風襟。

【字解】【一】一拳石　一個の石。中庸に今夫山、一拳石之多とある。樂天自ら喩ふ。【二】交分　交誼といふが如し。【三】中誠　心中の誠。【四】逶迤　引續く貌。【五】退閒　官を退いて閑居すること。【六】嵩高　嵩山。【七】清洛　洛水。【八】惠死莊杜口　惠施が死んでからは莊周も相手がなくなつたので口を閉ぢて談論しない。【九】鍾歿師廢琴　鍾子期が死んでからは、よく其技を解してくれる者がないので、伯牙も琴を彈ぜぬやうになつた。

【題義】常侍は官名。崔玄亮、字は晦叔の死を哭した詩である。

【詩意】我は一個の頑石の如き取柄のない男で君は百鍊の精金の如き傑士である。されば聲價は非常な相違であるが、どういふものか交誼が深く、よく心が一致和合して何物も侵害することが出來ず、二十年の間同じく相浮沈して來た。晩年になつたら官を退いて雲林の間に歸隱しようと約してゐたが、今老年に垂んとして君と死別し、獨り悲しく胸中の思を語るのみである。今後は春の日の嵩山の陽、秋の夜の洛水の陰、誰と共に丘園を卜し誰と共に山水を尋ねよう。風月を賞する相手もなく詩篇を吟ずる友もなく、花が咲いても酒が熟しても共に樂む人がなくなつてしまつた。昔惠施が死んでからは莊周は口を閉ぢて論ぜず、鍾子期が死んでからは伯牙は琴を彈かなかつたといふが、それは誠に道理である。昔から其通りで唯今に始まつたことではない。吾も共に道を樂む相手がなくなつて實に心細さを痛感し、病眼の涙をば秋風寒き襟に灑がざるを得ないのである。

新秋曉興

濁暑忽已退。清宵未全長。

濁暑忽ち已に退き、清宵未だ全く長からず。

晨缸耿殘焰。宿閣凝微香。
喔喔雞下樹。輝輝日上梁。
枕低茵席軟。臥穩身入牀。
睡足景猶早。起初風乍涼。
展張小屏障。收拾生衣裳。
還有惆悵事。遲遲未能忘。
拂鏡梳白髮。可憐氷照霜。

晨缸殘焰耿に、宿閣微香を凝らす。
喔喔として雞樹を下り、輝輝として日梁に上る。
枕低くして茵席軟に、臥すこと穩にして身牀に入る。
睡足りて景猶早く、起くる初め風乍ち涼し。
小屏障を展べ張りて、生衣裳を收拾す。
還惆悵の事有り、遲遲として未だ忘るる能はず。
鏡を拂ひて白髮を梳れば、憐む可し氷霜を照す。

【字解】【一】晨缸　朝まで殘る燈火。【二】喔喔　雞の鳴く聲。【三】茵席　しとね、寢臺の上の敷物。【四】小屏障　小屏風。【五】生衣裳　單衣、夏著。

【題義】新秋の時節に朝早く起きた情景を述べた詩である。

【詩意】夏の炎暑は已に退いたが、秋の夜長にはまだならない。夜が明けても殘燈の光尚ほ明かに、寢室には香のかをりがまだ漂つてゐる。曉を告ぐる雞も既に木から下り、日は輝輝として梁の上まで昇つた。枕を低くして床上に横臥せる吾は、蒲團が軟なので身が寢臺の中まで落ち込みさうである。睡も足りたので少し早目に起きて見た所が、時節柄とて風の涼しきを感じた。因つて小屏風を立てまはし夏著を取片附けなどした。その外に悲むべき事件があつて、いつまでも心に懸つて忘れられない。そは他にあらず、鏡を拭つて髮を梳れば、氷の霜を照すが如く、憐れにも吾が白頭が鏡に寫つたことである。

秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌。凡二百三十八字

秋日張賓客・舒著作と同じく龍門に遊び、醉中狂歌す。凡て二百三十八字

秋天高高秋光清。
秋風嫋嫋秋蟲鳴。
嵩峯餘霞錦綺卷。
伊水細浪鱗甲生。
洛陽閒客知無數。
少出遊山多在城。
商嶺老人自追逐。
蓬丘逸士相逢迎。
南出鼎門十八里。

秋天高高として秋光清く、
秋風嫋嫋として秋蟲鳴く。
嵩峯の餘霞錦綺卷き、
伊水の細浪鱗甲生ず。
洛陽の閒客知んぬ無數、
出でて山に遊ぶこと少く多くは城に在り。
商嶺の老人自ら追逐し、
蓬丘の逸士相逢迎す。
南鼎門を出づること十八里、

【字解】【一】嵩峯　嵩山。洛陽の東南五十里に在る。【二】伊水　川の名。洛陽の附近に在る。【三】知　知らずの意。【四】商嶺老人　張賓客を指す。後集卷十二、早春招張賓客一を見よ。【五】蓬丘逸士　舒著作を指す。【六】鼎門　洛陽の門の名。

莊店邐迤橋道平。
不寒不熱好時節。
鞍馬穩快衣衫輕。
竝轡踟蹰下西岸。
扣舷容與遶中汀。
開懷曠達無所繫。
觸目勝絶不可名。
荷衰欲黃荇猶綠。
魚樂自躍鷗不驚。
翠藻蔓長孔雀尾。
彩船櫓急寒鴈聲。
家醞一壺白玉液。
野花數把黃金英。
晝遊四看西日暮。

莊店邐迤橋道平なり。
寒からず熱からず好時節、
鞍馬穩快衣衫輕し。
轡を竝べ踟蹰して西岸より下り、
舷を扣き容與して中汀を遶る。
懷を開くこと曠達にして繫かる所無く、
目に觸るること勝絶にして名く可からず。
荷衰へて黃ならんと欲し荇は猶綠なり、
魚は樂みて自ら躍れども鷗は驚かず。
翠藻蔓長ず孔雀の尾、
彩船櫓急なり寒鴈の聲。
家醞一壺白玉の液、
野花數把黃金の英。
晝遊四たび西日の暮るるを看、

【七】邐迤　斜に續く貌。
【八】容與　徘徊といふが如し。
【九】荷　蓮の葉。荇は水草の名。
【一〇】家醞　手作りの酒。

夜話三及東方明。
暫停盃觴輟吟詠。
我有狂言君試聽。
丈夫一生有二志。
兼濟獨善難得并。
不能救療生民病。
卽須先濯塵土纓。
況吾頭白眼已暗。
終日戚促何所成。
不如展眉開口笑。
龍門醉臥香山行。

夜話三たび東方の明かなるに及ぶ。
暫く盃觴を停めて吟詠を輟めよ、
我に狂言有り君試に聽け。
丈夫一生に二志有り、
兼濟獨善得て并せ難し。
生民の病を救療する能はずんば、
卽ち須らく先づ塵土の纓を濯ふべし。
況んや吾頭白くして眼已に暗し、
終日戚促何の成す所あらん。
如かず眉を展べ口を開きて笑ひ、
龍門に醉臥して香山に行かんには。

【題義】秋、張賓客（賓客は官名、太子賓客なり）舒著作（著作は官名、著作郎か。舒は姓）と俱に龍門（洛陽の南に在る山の名、伊闕ともいふ）に遊び、醉うて狂歌した詩である。

【詩意】秋の空が高く澄み風そよぎ蟲鳴き、嵩山の霞は綺錦の卷くが如く、伊水の浪間には魚が躍つ

【一】丈夫　男子。二志とは兼ねて天下の民を濟ふと、退いて獨り己の身を善くするとをいふ。
【二】戚促　齷齪といふが如し。
【三】香山　龍門山の東に在る。

てゐる。洛陽には定めて無數の閑人が居るに相違ないが、出でて山に遊ぶ風流人は少く、多くは市中にくすぶつてゐる。吾は張賓客・舒著作と三人相攜へて、南の方鼎門を出づること十八里、人家の斜に連り道の平な處を進み行けば、熱からず寒からざる好時節で、馬の歩みも速に衣の袖も輕い。相倶に轡を竝べて西岸より下り、舟に棹して中汀を遶れば、氣も晴れ晴れとして心に繫る雲もなく、目に觸るる所皆名狀すべからざる絶景である。蓮の葉は既に枯れて黄色になつたが荇はまだ綠を漂はし、魚は樂んで躍れども鷗は驚かず、碧の藻は孔雀の尾のやうに長く伸び、櫓の音は雁の聲のやうに急である。白玉の液の如き酒を酌み、黄金の英の如き野花を把り、四日三晩遊び續けた。吾は杯を停め吟詠を輟めさせて兩人に向つて言つた。「男子の一生に二つの願がある。卽ち兼濟と獨善とである。併し此二つを兼ね行ふことは出來ないから、民の疾苦を救ひ天下を兼濟することが出來ないならば、須らく先づ塵に汙れた冠の纓を濯つて獨善の計を爲すがよい。況んや已に老境に入つて終日齷齪するとも何事も成すことは出來ないのであるから、愁眉を展べ口を開いて笑ひ、龍門山にでも香山にでも行樂醉臥するがよいのである」と。

(一)履信池櫻桃島上醉後走筆送別舒員外。

兼寄宗正李卿考功崔郎中

櫻桃島前春。
去春花萬枝。
忽憶與宗卿閒飲
日。
又憶與考功狂醉
時。
歲晚無花空有葉。
風吹滿地乾重疊。
蹋葉悲秋復憶春。
池邊樹下重殷勤。
今朝一酌臨寒水。
此地三回別故人。

履信池の櫻桃島の上にて醉後筆を走らせて舒員外を送別し、兼ねて宗正李卿・考功崔郎中に寄す

櫻桃島前の春、
去春花萬枝。
忽ち憶ふ宗卿と閒飲せし日、
又憶ふ考功と狂醉せし時。
歲晚れて花無く空しく葉有り、
風吹き地に滿ち乾きて重疊す。
葉を蹋み秋を悲み復春を憶ふ、
池邊の樹下重ねて殷勤。
今朝一たび酌みて寒水に臨む、
此地三回故人に別る。

【字解】【一】履信池　履信は長安の街名。そこに在る池の名であらう。櫻桃島は池中の島の名。

【二】殷勤　れんごろに思慕すること。

【三】故人　舊友。

櫻桃花來春千萬　櫻桃花は來春千萬朶、
朶。
來春共誰花下坐。　來春誰と共にか花下に坐せん。
不論崔李上青雲。　論せず崔・李の青雲に上るを、
明日舒三亦拋我。　明日舒三も亦我を拋たん。

【題義】履信池の櫻桃島の上で醉後筆を走らせて舒員外（舒は姓、員外は官名）を送別し、兼ねて宗正卿（皇族の事を掌る官名）李氏。考功郎中（官名）崔氏に寄せた詩である。

【詩意】この櫻桃島には過ぎし春の頃萬朶の花が咲いて、宗正卿と閑飲したり、考功郎中と狂醉したりしたものであつた。今や歳も晩れて花はなく空しく葉を留むるのみで、その葉も風に吹き落され乾枯らびて地に滿ちてゐる。その落葉を蹋み秋を悲むにつけても復春を憶ひ、池邊の樹下を思慕する情が深い。今朝も舒員外を送るについて酒を酌んで此池に臨んだが、ここは三たび舊友と別れる感慨に堪へない處である。（曾て宗正と別れ、考功郎中と別れ、今亦舒員外と別れる。）櫻桃の花は來年の春も千朶萬朶の花を開くであらうが、併し誰と共に花下に坐して其花を賞するであらう。崔郎中や李卿の高官に昇り去つたことは謂ふまでもなく、明日は舒三までも我を棄てて此地を去るのである。實に惜別の情に堪へないではないか。

【四】青雲　高位高官に喩ふ。
【五】舒三　舒員外なり。三は輩行。

秋池獨泛

蕭疎秋竹籬。清淺秋風池。
一隻短舫艇。一張斑鹿皮。
皮上有野叟。手中持酒巵。
半酣箕踞坐。自問身爲誰。
嚴子垂釣日。蘇門長嘯時。
悠然意自得。意外何人知。

秋池に獨り泛ぶ

蕭疎なる秋竹の籬、清淺なる秋風の池。
一隻の短舫艇、一張の斑鹿皮。
皮上に野叟有り、手中に酒巵を持つ。
半酣にして箕踞して坐し、自ら問ふ身を誰とか爲す。
嚴子釣を垂るる日、蘇門長く嘯く時。
悠然として意自得す、意外何人か知らん。

【字解】【一】蕭疎　さびしくまばらなこと。【二】短舫艇　小舟。【三】斑鹿皮　まだらの鹿の皮の敷物。【四】酒巵　さかづき。【五】箕踞　兩足を伸ばして坐すること。【六】嚴子　後漢の嚴光、字は子陵、少き時光武と同じく遊學す。光武の位に卽くや、名姓を變じ身を隱して見えず。帝物色して之を得、諫議大夫に除せしむ。就かず。富春山中に耕す。後人その釣處を名づけて嚴陵瀨といふ。【七】蘇門　山の名。晉の阮籍嘗て孫登を蘇門山に訪ふ。登言はず。籍因つて長嘯して退く。半嶺に至り聲あり鸞鳳の音の如く岩谷に響くを聞く。則ち登の嘯くなり。【八】悠然　おちつきて閑暇ある貌。

【題義】秋池上に舟を泛べて獨り樂んだ情味を述べた詩である。

【詩意】物淋しく疎な竹籬を遶らした中に水の澄んだ池がある。池上に一隻の小舟を泛べ、中に鹿の皮の敷物を敷き、一人の野老（樂天自ら謂ふ）が手に酒杯を持つて坐し、醉のまはるにつれて居ずまゐをくづし、兩足をなげ出して自問自答してゐる。「一體俺は何人であるか。澤中に釣を垂れた嚴光か

蘇門山に長嘯した孫登にも比すべき者で、獨り心に樂を抱き、外人の窺ひ知る事の出來ぬものがある」と。

冬日早起閒詠

氷塘耀初旭。風竹飄餘霰。
幽境雖目前。不因閒不見。
晨起對爐香。道經尋兩卷。
晩坐拂琴塵。秋思彈一遍。
此外更無事。開樽時自勸。
何必東風來。一盃春上面。

【字解】【一】道經　老子道德經、上下二卷あり。【二】秋思　琴曲の名、一遍は一曲なり。【三】東風　春風。

【題義】冬朝早く起きて閒生活を敍した詩である。

【詩意】旭が氷のはりつめた池塘を照し、風にそよぐ竹からは殘りの霰がはらはらと落ちる。幽寂の境地が眼前に在つても閒情がなければ其味はわかならない。吾は朝は早く起きて香爐に對し、上下二卷の老子道德經を讀み、夕には琴上の塵を拂つて秋思の曲を彈ずるを常としてゐる。其外には此れといふ仕事もなく、時時樽を開いて自ら酒を酌んでゐる。たとひ東風は吹かずとも、酒さへ飲めば春色が顏に漲つて來る。

歳暮

慘澹歳云暮。窮陰動經旬。
霜風裂人面。冰雪摧車輪。
而我當是時。獨不知苦辛。
晨炊廩有米。夕爨厨有薪。
夾帽長覆耳。重裘寛裹身。
加之一盃酒。煦嫗如陽春。
洛城士與庶。比屋多飢貧。
何處爐有火。誰家甑無塵。
如我飽煖者。百人無一人。
安得不慙愧。放歌聊自陳。

歳暮

慘澹として歳云に暮れ、窮陰動もすれば旬を經。
霜風人面を裂き、冰雪車輪を摧く。
而も我是時に當り、獨り苦辛を知らず。
晨炊廩に米有り、夕爨厨に薪有り。
帽を夾みて長く耳を覆ひ、裘を重ねて寛く身を裹む。
加之一杯の酒、煦嫗たること陽春の如し。
洛城は士と庶と、比屋多く飢貧なり。
何の處にか爐に火有る、誰が家か甑に塵無き。
我の如く飽煖なる者、百人に一人も無し。
安んぞ慙愧せざるを得ん、放歌して聊か自ら陳ぶ。

【字解】【一】煦嫗　暖かなこと。【二】洛城　洛陽の都。【三】比屋　かどなみ。戸ごとに。

【題義】歳暮の感を述べた詩である。

【詩意】淋しく歳が暮れ行き陰慘な天氣が十日も打續いてゐる。風は人の面を裂くばかりに寒く、氷雪は車輪を摧くほど堅くはりつめてゐる。かかる時節にも吾は何の苦もなく安らかに日を送り、米もあり薪もあつて活計に事缺かず、煖に著て酒さへ飲んでゐるので、その暖なことは春のやうである。飜つて思ふに洛陽の人は士人も庶民も多くは貧窮で、爐には火なく甑には塵が積り、俺のやうに飽食煖衣してゐる者は百人に一人もない。無能無才で此幸を得てゐるのは誠の慙愧に堪へない。因つて放歌高吟して此事を陳べる次第である。

南池早春有懷

朝遊北橋上。晩憩南塘畔。
西日雪全銷。東風氷盡泮。
篴篴魚尾掉。瞥瞥鵝毛換。
泥暖草芽生。沙虛泉脈散。
晴芳冒苔島。宿潤侵蒲岸。

南池の早春懷あり

朝に北橋の上に遊び、晩に南塘の畔に憩ふ。
西日雪全く銷え、東風氷盡く泮く。
篴篴として魚尾掉ひ、瞥瞥として鵝毛換はる。
泥暖にして草芽生じ、沙虛しくして泉脈散ず。
晴芳苔島を冒し、宿潤蒲岸を侵す。

【字解】【一】西日　夕日。【二】東風　春風。【三】篴篴　掉ふ貌。【四】瞥瞥　ちらちらする貌。【五】宿潤　久しきうるほひ。【六】洛下　洛陽。【七】時光　時節、光陰。章應物の詩に濟濟衆君子、高宴及二時光一とある。

【題義】早春洛陽の南池に遊び懷ふ所を述べた詩である。

【詩意】朝に北橋の上に遊び夕に南池の邊に憩へば、日は西に傾いて雪全く消え、東風がそよそよと吹いて氷も盡く解けた。ちらちらと魚の尾の動くのや鵝鳥の去來するのも面白く、泥の暖な處に草の芽が生え、沙の軟な處を泉がちよろちよろと分流し、春の光が苔島を冒し、水の潤ひが蒲岸を侵して、今や洛陽の南池は日が永く春も半ならんとする好氣節である。ただ光陰の人を抛擲して冉冉と推移するのは悲嘆に堪へない。因つて棹に倚つて去年俱に此池上に遊んだ友の死を坐に追懷した。

洛下日初長。江南春欲半。
時光共抛擲。人事堪嗟歎。
倚棹忽尋思。去年池上伴。

洛下日初めて長く、江南春半ならんと欲す。
時光共に抛擲し、人事嗟歎するに堪へたり。
棹に倚りて忽ち尋思す、去年池上の伴。

古意

脈脈復脈脈。美人千里隔。
不見來幾時。瑤草三四碧。

古意

脈脈復脈脈、美人千里に隔たる。
見ざるより來た幾時ぞ、瑤草三四碧なり。

玉琴聲悄悄、鸞鏡塵曂曂。
昔爲連理枝、今作分飛翮。
寄書多不達、加飯終無益。
心腸不自寬、衣帶何由窄。

【字解】【一】脈脈　情を含んで語らんと欲する貌。古詩十九首に脈脈不レ得レ語とある。【二】美人　夫を指して言ふ。【三】瑤草　玉の如く美しき草。【四】悄悄　悲しげな貌。【五】鸞鏡　鏡。曂曂は分布覆被の貌。【六】加レ飯　攝生加養すること。

【題義】古詩十九首などの風貌に模して作つた詩だから古意と題したので、夫に離れて寡居する妻の事を詠じたのである。

【詩意】情を含んで語らんと欲するも吾が夫は遠く離れてゐて語ることは出來ない。一たび別れてから早くも三四年を經た。憂を霽らさうと琴を彈ずれば琴の音も悲しげに響き、身だしなみも怠りがちなので鏡には塵が積つてゐる。昔は連理の枝となつてゐたが、今は分れ飛ぶ鳥となつてしまつた。手紙をやつても多くは屆かず、思に痞せる身を加養すれども其甲斐もない。心は常に憂へて寬からず、身は益〻痞せて著物の身幅が廣くなるばかりである。

山遊示小妓

山に遊び小妓に示す

雙鬟垂未レ合。三十纔過レ半。
本是綺羅人。今爲山水伴。
春泉共揮弄。好樹同攀翫。
笑容花底迷。酒思風前亂。
紅凝舞袖急。黛慘歌聲緩。
莫レ唱楊柳枝。無レ腸與レ君斷。

【字解】【一】雙鬟　わげ。頭髮を環して飾とせるもの。【二】綺羅　あやぎぬ、うすぎぬ。【三】楊柳枝　歌曲の名。

【題義】俱に山に遊びて小妓に示した詩である。

【詩意】お前は纔に年十五を過ぎた少女でまだ鬟を結ぶに堪へずして頭髮を垂れてゐる。もと綺羅を纏ふ身であるが今日は我に伴つて山水の遊をなし、俱に春泉を弄したり好樹に攀ぢたりして、花の下に笑ひさざめき、風に臨んで酒を酌み、紅袖を飜して舞ひ、翠黛を傾けて歌ひなどしてゐる。併しどうぞ楊柳枝の曲を歌ふことはやめてくれ。お前に楊柳枝の曲を歌はれたら、吾が腸は爲に寸斷するであらうから。

神照禪師同宿

神照禪師と同宿す

八年三月晦。山梨花滿枝。
龍門水西寺。夜與遠公期。
晏坐自相對。密語誰得知。
前後際斷處。一念不生時。

【字解】【一】八年　太和八年。【二】龍門　洛陽の南に在る山の名。【三】遠公　晉の高僧慧遠なり。僧侶を呼ぶには、名の上の一字を略し、公の字を添ふるを常とす。神照禪師に比す。期は會なり。【四】晏坐　安坐なり。【五】密語　佛教の祕密の宗旨を語り合ふこと。

【題義】神照禪師と俱に山寺に宿したことを述べた詩である。

【詩意】太和八年三月晦日の山梨の花が咲き滿ちてゐる時、龍門山の水西の寺に夜神照禪師と會宿した。靜に坐して佛教の祕密の宗旨を語り合へば、前後の差別も忘れ果て一念發動せず、誰あつて吾が心境を悟り得る者はあるまい。

張常侍相訪

西亭晚寂寞。鶯散柳陰繁。
水戸簾不卷。風牀席自翻。

張常侍相訪ふ

西亭晚に寂寞、鶯散じて柳陰繁し。
水戸簾卷かず、風牀席自ら翻る。

忽聞車馬客。來訪蓬蒿門。
況是張常侍。安得不開樽。

忽ち聞く車馬の客、來り訪ふ蓬蒿の門。
況んや是れ張常侍、安んぞ樽を開かざるを得ん。

【字解】【一】蓬蒿門　茅屋といふが如し。

【題義】張常侍の來訪を喜んだことを述べた詩である。

【詩意】夕方になつて西亭のあたりが物淋しく、鶯も去つて徒に柳が茂つてゐる。水に枕んだ戸口の簾を卸せども、風が來て自づと席を吹き上げる。忽ち馬車を驅り吾が茅屋を訪れた客があると聞き、迎へて見れば張常侍であつた。こんな珍客の御入來とあつては、何はなくとも先づ一獻差上げずばなるまい。

早夏遊宴

雖慵興猶在。雖老心猶健。
昨日山水遊。今朝花酒宴。
山榴艷似火。玉蘂飄如霰。
榮落逐瞬遷。炎涼隨刻變。
未收木綿褥。已動蒲葵扇。

早夏遊宴

慵しと雖も興猶在り、老いたりと雖も心猶健なり。
昨日は山水に遊び、今朝は花酒に宴す。
山榴は艷にして火に似たり、玉蘂は飄りて霰の如し。
榮落は瞬を逐ひて遷り、炎涼は刻に隨ひて變ず。
未だ木綿の褥を收めず、已に蒲葵の扇を動かせり。

且喜物與人。年年得相見。　且つ喜ぶ物と人と、年年相見るを得るを。

【字解】【一】山榴　つつじの花。初夏に紅花を開く。【二】玉蘂　花の名。唐人甚だ此花を重んず。【三】蒲葵　草の名。之を編みて團扇を作る。

【題義】夏の初に遊宴したことを述べた詩である。

【詩意】老いて情くはあれども、心も健に感興も深いので、毎日のやうに山水の間に遊び花下に酒宴を張つて樂んでゐる。今や初夏のこととて躑躅の花は火の燃えるやうで、玉蘂の花は霰の散るやうである。花も瞬く間に或は榮え或は衰へて行くが、氣候の寒暖も刻刻に移り變つて、まだ木綿の褥を片附けないのに、はや蒲葵の扇を使つてゐる。それにしても吾が身はいつも達者で年年此等時節時節の物と相見るを得るのは誠に嬉しい。

感白蓮花　白蓮花に感ず

白白芙蓉花。本生吳江濱。　白白たる芙蓉の花、本吳江の濱に生ず。
不與紅者雜。色類自區分。　紅なる者と雜らず、色類自ら區分せり。
誰移爾至此。姑蘇白使君。　誰か爾を移して此に至らしむる、姑蘇の白使君。
初來苦顦顇。久乃芳氛氳。　初めて來るとき苦だ顦顇、久くして乃ち芳氛氳たり。

月月葉換葉。年年根生根。　月月に葉は葉を換へ、年年に根は根を生ず。
陳根與故葉。銷化成泥塵。　陳根と故葉と、銷化して泥塵と成る。
化者日已遠。來者日復新。　化する者は日に已に遠く、來る者は日に復新なり。
一爲池中物。永別江南春。　一たび池中の物と爲り、永く江南の春に別る。
忽想西涼州。中有天寶民。　忽ち想ふ西涼州、中に天寶の民有るを。
埋沒漢父祖。孳生胡子孫。　漢の父祖を埋沒して、胡の子孫を孳生す。
已忘鄉土戀。豈念君親恩。　已に鄉土を戀ふを忘る、豈君親の恩を念はんや。
生人尙復爾。草木何足云。　生人尙復爾り、草木何ぞ云ふに足らん。

【字解】【一】芙蓉花　蓮花をいふ。【二】姑蘇白使君　蘇州刺史白樂天。【三】顦顇　やせ衰へる。【四】氛氳　香氣の發散する貌。【五】陳根　古き根。故葉は古き葉。【六】西涼州　西方邊地の名。【七】天寶　唐の玄宗の年號。【八】胡　えびす。

【題義】白蓮の花を觀て感ずる所を述べた詩である。

【詩意】この白蓮はもと吳江の濱に生じたもので、少しも紅の色などを雜へず、色合も種類も世の常のものとは全く別である。蘇州刺史白樂天が此地（洛陽なり）に移し植ゑたもので、初めは大分瘠せ枯れてゐたが今では生氣を回復して盛に香氣を放ち、もとの根や葉は迹形もなく消滅し、段段と新しい根や葉が代り、一たび此池に植ゑてからは永く江南の春に別れてしまつた。これについて思ひ當

ることは、西涼州には天寶の時代に移住した民があつて、今では漢人たる父祖は死亡し去り、胡人として子孫が殘つてゐるさうだが、已に故郷たる漢土を思慕する情もなく、君親の恩をも忘れてしまつたさうだ。人でさへ此通りであるから草木の昔を忘れるのは言ふまでもない。

詠所樂

樂む所を詠ず

獸樂在山谷。魚樂在陂池。
蟲樂在深草。鳥樂在高枝。
所樂雖不同。同歸適其宜。
不以彼易此。況論是與非。
而我何所樂。所樂在分司。
分司有何樂。樂哉人不知。
官優有祿料。職散無羈縻。
懶與道相近。鈍將閑自隨。
昨朝拜表廻。今晩行香歸。
歸來北窓下。解巾脫塵衣。
冷泉灌我頂。暖水濯四肢。
體中幸無疾。臥任清風吹。
心中又無事。坐任白日移。
或開書一篇。或引酒一巵。
但得如今日。終身無厭時。

獸の樂は山谷に在り、魚の樂は陂池に在り。
蟲の樂は深草に在り、鳥の樂は高枝に在り。
樂む所同じからずと雖も、同じく其の宜きに適するに歸す。
彼を以て此に易へず、況んや是と非とを論せんや。
而して我何の樂む所ぞ、樂む所は分司に在り。
分司何の樂有る、樂い哉人知らず。
官優にして祿料有り、職散にして羈縻無し。
懶は道と相近く、鈍は閑と自ら隨ふ。
昨朝表を拜して廻り、今晩香を行ひて歸る。
歸來北窓の下、巾を解きて塵衣を脫す。
冷泉我が頂に灌ぎ、暖水四肢を濯ふ。
體中 幸 に疾無し、臥して清風の吹くに任す。
心中又事無し、坐して白日の移るに任す。
或は書一篇を開き、或は酒一巵を引く。
但今日の如くなるを得ば、身を終るまで厭ふ時無し。

【字解】【一】陂池　池沼。【二】分司　官名。太子賓客東都分司。【三】羈縻　束縛なり。【四】拜表　上書すること。【五】行香　佛寺に參詣する。

【題義】己の樂む所を詠じた詩である。

【詩意】獸の樂は山谷に在り、魚の樂は池沼に在り、蟲の樂は草叢に在り、鳥の樂は高枝に在り。その樂は各〻異つてはゐるが其性の宜しきに適することは皆同じであつて、彼と此とを易へることは出來ない。まして孰か是に孰か非なるかを問ふべきではない。さて我の樂は何ぞと謂ふに、吾が樂は分司の職に在る。人は知るまいが分司の職は高い官職で俸祿もあり、閑散で何の束縛もない。されば吾が懶惰の性は道に近く、遲鈍の質は閑に適してゐる。かくて朝には章奏を上り夕には佛に禮し、北窓の下に歸り來れば頭巾や著物を脫ぎ捨て、頭から冷水をかぶり湯で手足を濯つて休

息する。幸に無病息災なので清風の吹くに任せて寐ね、心中何の思ひ累ふこともなく、坐して時の移るに任せ、或は書物を讀んだり酒を飲んだりして樂んでゐる。こんな生活が出來れば此れで一生を終るとも毛頭異存はない。

思舊

閒日一思舊。舊遊如目前。
再思今何在。零落歸下泉。
退之服硫黃。一病訖不痊。
微之鍊秋石。未老身溘然。
杜子得丹訣。終日斷腥羶。
崔君誇藥力。經冬不衣綿。
或疾或暴夭。悉不過中年。
唯予不服食。老命反遲延。
況在少壯時。亦爲嗜慾牽。

思舊

閒日一たび舊を思ふ、舊遊目前の如し。
再び思ふに今何に在る、零落下泉に歸せり。
退之は硫黃を服すれども、一たび病んで訖に痊えず。
微之は秋石を鍊りしも、未だ老いずして身溘然たり。
杜子は丹訣を得て、終日腥羶を斷つ。
崔君は藥力に誇り、冬を經て綿を衣ず。
或は疾み或は暴に夭し、悉く中年を過ぎず。
唯予服食せず、老命反つて遲延なり。
況んや少壯の時に在り、亦嗜慾の爲に牽かる。

但耽(九)葷與血。不識汞與鉛(一〇)。
飢來呑熱物。渴來飲寒泉。
詩役五臟神。酒汨三丹田(一一)。
隨日合破壞。至今粗完全。
齒牙未缺落。肢體尙輕便。
已開第七秩(一二)。飽食仍安眠。
且進盃(一三)中物。其餘皆付天。

【字解】【一】閒日　閑暇の日。【二】零落　死亡すること。下泉は黃泉。【三】退之　韓愈の字。【四】微之　元稹の字。【五】溘然　忽ち死すること。【六】丹訣　道家燒丹の法。【七】腥羶　なまぐさき肉類。【八】崔君　崔元亮であらう。【九】葷血　肉食すること。【一〇】汞鉛　汞は水銀。道家用ひて以て丹藥を鍊る。所謂鉛汞の術是れなり。【一一】三丹田　丹田に三あり。臍下に在る者を下丹田となし、心下に在る者を中丹田となし、兩眉間に在る者を上丹田となす。抱朴子に見ゆ。【一二】第七秩　六十より七十に至る十年。【一三】盃中物　酒なり。

【題義】舊を思ひて感ずる所を敍した詩である。

【詩意】暇な時に昔の事を回想すれば舊遊はまだ目の前にあるやうに思はれるが、さて當時俱に遊んだ友達を追想すれば、多くは黃泉の客となつてしまつた。韓愈は常に硫黃を服用してゐたが、一たび

病んで終に癒えず、元稹は秋石を鍊つて服用したが、老年にもならないうちに忽ち死んでしまひ、杜子は燒丹の法を得て肉食を廢し、崔君は藥力に誇つて冬でも綿を著なかつたが、一は疾み一は暴に夭死して、俱に中年を越すことは出來なかつた。ただ予は服藥などはしなかつたが反つて今日まで生き延びてゐる。況んや血氣の頃は嗜慾に牽かれて肉食に耽り、仙藥を鍊ることなどは全く識らず、飢ゑれば熱い物でも構はずに食ひ、喉がかわけば寒泉でも何でも飲み、詩を作る爲に五臟の神を勞らし、酒の爲に丹田を害した。されば程なく身を傷ふべき筈であるのに、今日まで殆ど完全で、齒も缺けなければ肢體も自由で、六十の坂を越しても、ウンと食つてグッスリ眠る。おまけに神酒をあげて其他の萬事は一切天に任せて置く。

寄盧少尹

老誨心不亂。莊戒形太勞。
生命既能保。死籍亦可逃。
嘉肴與旨酒。信是腐腸膏。
艷聲與麗色。眞爲伐性刀。

盧少尹に寄す

老は心の亂れざるを誨へ、莊は形の太だ勞するを戒む。
生命既に能く保たば、死籍も亦逃るる可し。
嘉肴と旨酒とは、信に是れ腸を腐する膏なり。
艷聲と麗色とは、眞に性を伐る刀たり。

補養在積功。如裘集衆毛。
將欲致千里。不得差一毫。

心不亂。形太勞。至差一毫。皆出老莊及諸道書仙方禁誡。

顏回何爲者。簞瓢纔自給。
肥醲不到口。年不登三十。
張蒼何爲者。染愛浩無際。
妾媵塡後房。竟壽百餘歲。
蒼壽有何德。回夭有何辜。
誰謂具聖體。不如肥瓠軀。
遂使世俗心。多疑仙道書。

補養は功を積むに在り、裘の衆毛を集むるが如し。
將に千里を致さんと欲せば、一毫を差ふを得ず。
顏回は何爲る者ぞ、簞瓢纔に自ら給す。
肥醲口に到らず、年は三十に登らず。
張蒼は何爲る者ぞ、染愛浩として際無し。
妾媵後房に塡ち、竟に壽百餘歲。
蒼の壽きこと何の德か有る、回の夭すること何の辜か有る。
誰か謂ふ聖體を具ふと、肥瓠の軀に如かず。
遂に世俗の心をして、多く仙道の書を疑はしむ。

寄問盧先生。此理當何如。

盧先生に寄せ問ふ、此理當に何如なるべき。

【字解】【一】老　老子。【二】莊　莊子。【三】死籍　死人を登錄する帳簿。【四】伐性　壽命を斷つ。【五】簞瓢　論語に、子曰、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在二陋巷一、人不レ堪二其憂一、回也不レ改二其樂一、賢哉回也とある。【六】肥醲　肥肉美酒。【七】張蒼　漢の文帝の時丞相たること十餘年なり。【八】妾媵　妾婢。後房は婦人の居る處。【九】具二聖體一　孟子公孫丑上篇に子夏、子游、子張、皆有二聖人之一體一、冉牛、閔子、顏淵、則具レ體而微とある。【一〇】肥瓠　大きなヒサゴ。【一一】寄問　此詩を寄せて質

問する。

【題義】盧少尹（一に盧少卿に作る）に寄せた詩である。

【詩意】老子は心の亂れざることを誨へ、莊子は身を勞することを戒め、身を大切にして生命を保てば死を免れることも出來る。佳肴と美酒とは人の腸を腐らす膏であつて、聲のよい美人は人の壽命を斷つ刀である。身心の補養は永く功を積むに在る、丁度衆毛を集めて裘を成すと同じである。されば長壽を保たんと欲する者は一毫も此教に差ふべからず」などと誨へてゐる。さて彼の顏回は如何にと謂ふに、一簞の食と一瓢の水とで飢を凌ぎ、肥肉を食ひ美酒を飲むなどいふことは全くなかつた。然るに三十にもならずに夭死したではないか。張蒼は如何にと謂ふに、愛慾の念の強い男で妾婢が後房に滿つるほどであつたが、百餘歲の長壽を保つた。一體張蒼は何德があつて長壽を保ち、顏回は何辜があつて夭死したのであらう。孟子は顏回をほめて聖人の體を具ふなどと謂つてゐるが、あんな生き方は大きな瓠にも劣るではないか。こんな譯で仙道の書などに說き立ててゐる所は少しもあてにならないから、遂に世人をして疑惑を抱かしめるのである。因つて此は如何なる道理に由るのか、此詩を寄せて盧先生にお尋ね申す。

池上清晨候皇甫郎中

池上清晨、皇甫郎中を候す

曉景麗未熱。晨飈鮮且涼。
池幽綠蘋合。霜潔白蓮香。
深掃竹間逕。靜拂松下牀。
玉柄鶴翎扇。銀罌雲母漿。
屏除無俗物。瞻望唯清光。
何人擬相訪。嬴女從蕭郎。

【字解】【一】晨飈　曉風。【二】鶴翎　鶴の羽。【三】銀罌　銀の瓶。雲母漿は飲物の名。侍兒小名錄に見ゆ。【四】屏除　除き去る。【五】清光　皇甫郎中の清らかな姿。【六】嬴女　秦の穆公の女弄玉。蕭郎は蕭史なり。よく簫を吹き鳳鳴をなす。穆公弄玉を以て之に妻はす。遂に弄玉に簫を吹くことを敎ふ。後弄玉は鳳に乘り、蕭史は龍に乘りて飛昇し去る。事、列仙傳に見ゆ。ここは蕭郎を皇甫郎中に比したのである。

【題義】池上の曉に皇甫郎中（後集卷一の皇甫賓客と同一人で、皇甫は姓、名は湜、輩行は七、賓客及び郎中は官名）を訪うた詩である。

【詩意】曉景麗しくして未だ熱からず、風も涼しい。池には綠蘋が茂り合ひ霜の如く潔白な蓮花が香氣を放つてゐる。皇甫郎中は竹間の逕を掃ひ淸め、松下の牀の塵を拂つて、玉の柄の鶴の羽で作つた扇を持ち、銀瓶の雲母漿を飲んでゐる。身のまはりの俗物は盡く除き去つてあるから、遮る物もな

く郎中の高潔な容姿を仰ぎ望むことが出來る。何人が郎中を訪ひ來るであらうか。恐らく弄玉のやうな仙女が訪ひ來るのみであらう。

詠懷

我知二世如一幻。了無二干一世意。
世知二我無一堪。亦無二責一我事。
由レ茲兩相忘。因得二長自遂。
自遂意何如。閒官在二閒地。
閒地唯東都。東都少二名利。
閒官是賓客。賓客無二牽累。
嵇康日日懶。畢卓時時醉。
酒肆夜深歸。僧房日高睡。
形安不二勞苦。神泰無二憂畏。
從レ官三十年。無如二今氣味。

詠懷

我は世の幻の如くなるを知り、了に世に干むる意無し。
世我が堪ふる無きを知り、亦我を責むる事無し。
茲に由りて兩ながら相忘れ、因りて長く自ら遂ぐるを得たり。
自ら遂ぐる意何如、閒官にして閒地に在り。
閒地は唯東都、東都は名利少し。
閒官は是れ賓客、賓客は牽累無し。
嵇康日日懶く、畢卓時時醉へり。
酒肆より夜深けて歸り、僧房に日高けて睡る。
形安くして勞苦せず、神泰にして憂畏無し。
官に從ふこと三十年、今の氣味に如くもの無し。

鴻雖レ脫二羅弋一。鶴尚居二祿位一。
唯此未レ忘レ懷。有時猶內愧。

鴻は羅弋を脫すと雖も、鶴は尙祿位に居る。
唯此れ未だ懷に忘れず、時有りて猶內に愧づ。

【字解】【一】東都　洛陽。【二】賓客　官名。太子賓客なり。【三】嵇康　三國魏の人。丰姿俊逸にして、醒むる時は孤松の獨立するが如く、醉へば玉山の將に頹れんとするが如し。氣を尊き性を養ひ養生篇を著せり。中散大夫に拜せらるれども就かず、常に琴を彈じて自ら樂む。樂天自ら比して謂ふ。【四】畢卓　晉の人。吏部郎となる。常に酒を飲みて職を廢す。比舍の酒釀熟す。卓盜んで之を飲む。樂天自ら比して謂ふ。【五】酒肆　酒屋。【六】羅弋　網と、いぐるみの矢。【七】祿位　左傳に衞懿公好レ鶴、鶴有二乘レ軒者一、注に軒は大夫の車とある。樂天自ら鶴に比し、幸に祿位を得たるを謂ふ。

【題義】胸中の感懷を詠じた詩である。

【詩意】我は世の夢幻に同じきを知れる故、敢て世に求むる所はない。世も亦我の堪ふる所にあらざるを知れる故、何も我に要求する事はない。因つて世と我と相忘れ、遂に己の個性を滿足させることが出來た。個性を滿足させるとは何事ぞと謂ふに、閒散の官を得て閒地に居ることである。洛陽は名利の少い閒地で、太子賓客は束縛のない閒官である。かくて嵇康のやうに毎日ぶらぶらして、畢卓のやうに時時醉ひ、夜深に酒屋から歸つて日の高く昇るまで僧房に睡り、身心俱に勞苦もなければ憂畏もない。官に就いてから三十年になるが今ほど氣樂なことは嘗てなかつた。恰も網を逃れた鴻の如く祿位を得た鶴の如き境界である。併し未だ全く祿位の念を忘れぬことは、自ら省みて窃に愧づる所である。

北窓三友

今日北窓下。自問何所爲。
欣然得三友。三友者爲誰。
琴罷輒舉酒。酒罷輒吟詩。
三友遞相引。循環無已時。
一彈愜中心。一詠暢四肢。
猶恐中有間。以醉彌縫之。
豈獨吾拙好。古人多若斯。
嗜詩有淵明。嗜琴有啓期。
嗜酒有伯倫。三人皆吾師。
或乏儋石儲。或穿帶索衣。
絃歌復觴詠。樂道知所歸。
三師去已遠。高風不可追。
三友游甚熟。無日不相隨。

北窓の三友

今日北窓の下、自ら問ふ何の爲す所ぞ。欣然として三友を得たり、三友は誰とか爲す。琴罷みて輒ち酒を擧げ、酒罷みて輒ち詩を吟ず。三友遞に相引き、循環して已む時無し。一彈中心に愜ひ、一詠四肢を暢ぶ。猶中に間有らんことを恐れ、醉を以て之を彌縫す。豈獨り吾のみ拙にして好むならんや、古人も多く斯の若し。詩を嗜む淵明有り、琴を嗜む啓期有り。酒を嗜む伯倫有り、三人皆吾が師なり。或は儋石の儲に乏しく、或は帶索の衣を穿つ。絃歌して復觴詠し、道を樂みて歸する所を知る。三師去ること已に遠し、高風追ふ可からず。三友游甚だ熟し、日として相隨はざるは無し。

左擲白玉巵。右拂黃金徽。
興酣不疊紙。走筆操狂詞。
誰能持此詞。爲我謝親知。
縱未以爲是。豈以我爲非。

【字解】【一】四肢　手足。【二】彌縫　間隙をうめあはせること。【三】啓期　榮啓期なり。列子天瑞篇に孔子遊於太山、見榮啓期鹿裘帶索、鼓琴而歌云云とある。【四】伯倫　晉の劉伶、字は伯倫、酒を縱にして放達なり。嘗て酒德頌を著せり。【五】三人皆吾師　論語に三人行必有我師焉とある。【六】儋石儲　少しの米のたくはへ。【七】帶索　なはを帶にすること。【八】徽　琴の晉の高下を定むる標識の處。【九】親知　親交ある友。

【題義】北窓の三友、卽ち琴と酒と詩とに親んで自ら樂むことを述べた詩である。

【詩意】今日北窓の下に何を爲しつつあるかと問はば、欣然として三友を得たりと答ふるであらう。三友とは誰ぞ。琴と酒と詩とである。三友遞に相引き循環して已む時はない。一たび琴を彈じて心に愜へば、一たび詩を詠じて四肢を暢ばし、その間に隙の生ずるを恐れて酒を以てうめあはせる。僕のやうな愚拙の身を以て此三者を好むのは怪しからぬといふ非難もあるかも知れぬが、此三者を好むのは僕ばかりではない。古人も多くはさうであつた。詩を嗜めるには陶淵明があり、琴を嗜めるには榮啓期があり、酒を嗜めるには劉伶があつた。此三人は皆吾が師である。何れも貧にして儋石の儲もなく、索の帶をしめてゐたが絃歌觴詠して道を樂んでゐた。三師已に沒して其高風は復伺ふことは

出來ない。然し三友と我とは日增しに親交を加へて一日として離れることはない。左に白玉の杯を掉ひ、右に黃金の琴徽を拂ひ、興酣なるに至れば紙を疊まずに筆を走らせて狂詞を書く。此詩を持つて行つて我が親交ある友に示さば、たとひ之を是とせずとも別に非ともせぬであらう。

吟四雖　雜言

酒酣後。歌歇時。
請君添一酌。聽我吟四雖。
年雖老。猶少於韋長史。
命雖薄。猶勝於鄭長水。
眼雖病。猶明於徐郎中。
家雖貧。猶富於郭庶子。
省躬審分何僥倖。
値酒逢歌且歡喜。
忘榮知足委天和。
亦應得盡生生理。

四雖を吟ず　雜言

酒酣なる後、歌歇む時。
請ふ君一酌を添へ、我が四雖を吟ずるを聽け。
年老いたりと雖も、猶韋長史より少く、
命薄しと雖も、猶鄭長水より勝れり。
眼病めりと雖も、猶徐郎中より明かに、
家貧しと雖も、猶郭庶子より富めり。
躬を省み分を審にするに何ぞ僥倖なる、
酒に値ひ歌に逢ひては且つ歡喜す。
榮を忘れ足るを知りて天和に委す、
亦應に生生の理を盡すを得べし。

【題義】老いたりと雖も、命薄しと雖も、眼病めりと雖も、家貧しと雖もの四件を詠じた詩である。

【詩意】酒酣に歌罷む時、願はくは更に我に一杯の酒を勸め、我が四雖の吟を聽き給へ。我は年老いたりと雖も韋長史よりは少く、運拙なしと雖も鄭長水より勝り、眼を病むと雖も徐郎中よりも明かに、家貧しと雖も郭庶子より富んでゐる。我が身を省み、我が分を審にするに、實に我の僥倖なことがわかる。酒に値ひ歌に逢へば則ち歡喜し、榮を忘れ足るを知つて天命に任せてゐる。結句これで天地生生の理を全うすることが出來てゐる。

分司同官中、韋長史續、年七十餘。郭庶子求、貧苦最甚。徐郎中晦、因疾喪明。余爲河南尹時、見同年鄭僉始授長水縣令。因歎四子而成此篇也。

裴侍中晉公以集賢林亭卽事詩二十六韻見贈。

猥蒙徵和。才拙詞繁。輒廣爲五百言以伸酬獻

裴侍中晉公、集賢林亭卽事の詩二十六韻を以て贈られ、猥りに和を徵せらる。
才拙く詞繁く、輒ち廣めて五百言となし、以て酬獻を伸ぶ

三江路千里。五湖天一涯。
何如集賢第。中有平津池。

三江路千里、五湖天の一涯。
何ぞ如かん集賢の第、中に平津池有るに。

池勝主見覺。景新人未知。

池勝れて主覺られ、景新にして人未だ知らず。

竹森翠琅玕。水深洞琉璃。
水竹以爲質。質立而文隨。
文之者何人。公來親指麾。
疏鑿出人意。結構得地宜。
虛襟一搜索。勝槩無遁遺。
因下張沼沚。依高築階基。
嵩峯見數片。伊水分一支。
南溪修且直。長波碧逶迤。
北館壯復麗。倒影紅參差。
東島號晨光。杲曜迎朝曦。
西嶺名夕陽。杳曖留落暉。
前有水心亭。動蕩架漣漪。
後有開闔堂。寒溫變天時。
幽泉鏡泓澄。怪石山欹危。

竹森として翠琅玕、水深くして洞琉璃。
水竹以て質と爲す、質立ちて文隨ふ。
之を文にする者は何人ぞ、公來りて親ら指麾す。
疏鑿人意に出で、結構地の宜しきを得たり。
虛襟一たび搜索し、勝槩遁れ遺す無し。
下きに因りて沼沚を張り、高きに依りて階基を築く。
嵩峯數片を見、伊水一支を分つ。
南溪修くして且直く、長波碧逶迤たり。
北館壯にして復麗はし、倒影紅にして參差たり。
東島を晨光と號し、杲曜朝曦を迎ふ。
西嶺を夕陽と名け、杳曖にして落暉を留む。
前に水心亭有り、動蕩して漣漪に架す。
後に開闔堂有り、寒溫天時を變ず。
幽泉は鏡泓澄し、怪石は山欹危なり。

（上八所、各具二本名。）
春葩雪漠漠。（謂二杏花一。）
夏果珠離離。（謂二櫻桃一。）
主人命方舟。宛在水中坻。
親賓次第至。酒樂前後施。
解纜始登汎。山遊仍水嬉。
沿洄無滯礙。向背窮幽奇。
瞥過遠橋下。飄旋深澗陲。
管絃去縹緲。羅綺來霏微。
棹風逐舞廻。梁塵隨歌飛。
宴餘日云暮。醉客未放歸。
高聲索彩牋。大笑催金巵。
唱和筆走疾。問答盃行遲。
一詠清兩耳。一酣暢四肢。

（上八所、各具二本名。）
春葩は雪漠漠、
夏果は珠離離。
主人命じて舟を方べ、宛として水中の坻に在り。
親賓次第に至り、酒樂前後に施す。
纜を解きて始めて登り汎ぶ、山に遊びて仍ほ水に嬉む。
沿洄して滯礙無し、向背して幽奇を窮む。
瞥として遠橋の下を過ぎ、飄として深澗の陲を旋る。
管絃去りて縹緲、羅綺來りて霏微。
棹風舞を逐ひて廻り、梁塵歌に隨ひて飛ぶ。
宴餘日云に暮るるも、醉客未だ歸るを放さず。
高聲に彩牋を索め、大笑して金巵を催す。
唱和して筆走ること疾く、問答して盃行ること遲し。
一詠兩耳を清くし、一酣四肢を暢ぶ。

主客忘貴賤。不知俱是誰。
客有詩魔者。吟哦不知疲。
乞公殘紙墨。一掃狂歌詞。
維云社稷臣。赫赫文武姿。
十授丞相印。五建大將旗。
四朝致勛華。一身冠皐夔。
去年才七十。決赴懸車期。
公志不可奪。君恩亦難違。
從容就中道。俛僶來保釐。
貂蟬雖未脫。鸞鳳已不羈。
歷徵今與古。獨步無等夷。
陸賈功業少。二疏官秩卑。
乘舟范蠡懼。辟穀留侯飢。
豈若公今日。身安家國肥。

主客貴賤を忘る、知らず俱に是れ誰ぞ。
客に詩魔と云ふ者有り、吟哦して疲るるを知らず。
公の殘紙墨を乞ひ、狂歌詞を一掃す。
維れ云に社稷の臣、赫赫たる文武の姿。
十たび丞相の印を授けられ、五たび大將の旗を建つ。
四朝勛華を致し、一身皐夔に冠たり。
去年才に七十、決して懸車の期に赴けり。
公の志奪ふ可からず、君恩亦違ひ難し。
從容として中道に就き、俛僶として來りて保釐す。
貂蟬未だ脫せずと雖も、鸞鳳已に羈されず。
歷徵今と古と、獨步して等夷無し。
陸賈は功業少く、二疏は官秩卑し。
舟に乘りて范蠡懼れ、穀を辟けて留侯飢う。
豈若かんや公の今日、身安くして家國肥ゆるに。

羊祜在漢南。空留峴首碑。
柳惲在江南。祇賦汀洲詩。
謝安入東山。但說攜蛾眉。
山簡醉高陽。唯聞倒接䍦。
豈如公今日。餘力兼有之。
願公壽如山。安樂長在茲。
願我比蒲稗。永得相因依。

謝靈運詩云、蒲稗相因依。

羊祜は漢南に在り、空しく峴首の碑を留む。
柳惲は江南に在り、祇汀洲の詩を賦す。
謝安は東山に入り、但蛾眉を攜ふるを說く。
山簡は高陽に醉ひ、唯接䍦を倒にするを聞く。
豈如かんや公の今日、餘力兼ねて之れ有るには。
願はくは公の壽山の如く、安樂にして長く茲に在らんこと。
願はくは我蒲稗に比し、永く相因り依るを得んことを。

【字解】【一】三江　吳淞江、婁江、東江をいふ。其他異說紛紛たり。【二】五湖　太湖をいふ。異說多し。【三】集賢　洛陽の里名。第は邸なり。【四】平津池　池の名。【五】琅玕　石の玉に似たるもの。【六】琉璃　礦物の名。【七】勝槩　すぐれた景色。【八】嵩峯　嵩山の峯。【九】伊水　洛陽の附近を流るる川の名。【一〇】逶迤　斜に流るる貌。【一一】參差　齊一ならざる貌。【一二】杲曜　明なる貌。朝曦は旭日。【一三】杳曖　小暗き貌。落暉は夕日。【一四】漣漪　さざなみ。【一五】春葩　春の花。漠漠は廣き貌。【一六】離離　列る貌。【一七】宛　曲折に隨つて宛轉する貌。坻は小洲。【一八】羅綺　薄絹をまとへる美人。霏微は去來する貌。【一九】梁塵　文選注に、李善曰、七略曰、漢興、魯人虞公善雅歌、發聲盡動梁上塵とある。【二〇】彩牋　彩色せる紙。【二一】金巵　黃金の杯。【二二】一掃　書きなぐる。【二三】社稷臣　國家の重臣。裴度を指して言ふ。【二四】勛華　勳榮。【二五】皐夔　舜の時の大臣、皐陶及び夔。【二六】懸車　致仕すること。【二七】俛僶　勉むる貌。保釐は書經畢命篇に命畢公保釐東郊とある。安んじ治むること。【二八】貂蟬　侍中のかぶる冠。【二九】鸞鳳　英俊に喩ふ。ここは裴度に喩ふ。【三〇】等夷　匹敵す

る者。【三一】陸賈　漢の高祖の臣。【三二】二疏　漢の疏廣・疏受、太子大傅たりしも一旦年七十に滿てるを以て、官を辭して鄉に歸る。【三三】留侯　漢の張良、留に封ぜらる。晩年穀を避けて仙を學ぶ。【三四】峴首　山の名。【三五】蛾眉　美人。【三六】接䍦　白帽なり。山簡襄陽を鎭せし時、兒童歌つて曰く、倒著二白接䍦一舉鞭向二葛疆一と。

【題義】侍中は官名。裴晉公は晉國公裴度である。裴度は晩年洛陽の集賢里に邸宅を構へた。此詩は其の林亭卽事と題する、二十六韻五十二句の詩を樂天に贈り、和韻を求めたので、其れに酬いたのである。

【詩意】三江や五湖は、風景は美しからうけれども、惜しいかな天涯千里の外に在る。されば洛陽の集賢里の邸中に在る平津池の、近くして景色のよいのには及ぶまい。此池の勝概をば主人公（裴度を指す）は早く覺られたが世人は未だ知らない。竹が林立して翠琅玕の立てるが如く、水は深くして琉璃の洞のやうである。水と竹とが此園庭の質で、此に樣樣の文飾が施してある。その文飾は總て主人公が親ら指揮してさせたもので、疏鑿は人の意表に出で、結構は地形の宜しきに叶ひ、すべての勝概が遺憾なく現れてゐる。低い處には沼を掘り高い處には階基を築き、階に登れば嵩山數片の峯を望むべく、沼は伊水を分けて引いたものである。南方の溪は碧波を湛へて長く且直く、北方の館は紅の影を倒に水にうつしてちらついてゐる。東方の島は晨光と名づけられ、旭日を迎ふるに宜しく、西方の嶺は夕陽と名づけられ、夕日を留むるに宜しい。前には水心と名づくる亭があつて漣の間に架せられ、後には開闔と名づくる堂があつて寒溫氣候を異にする。幽泉は鏡の如く澄み、怪石は山の如く峙ち、春は花が咲き滿ちて一面に雪が積つたやうに見え、夏は果實が珠を連ねたやうになる。（以上は林亭結構の勝を詳敍したのである。）主人公は此池に舟を泛べ、水中の小坻に宴飲を張らしめたので、賓客が續續と來り會し、酒と音樂とが前後に設けられ、山に登つたり水に泛んだりして各〻樂を盡した。忽ち遠橋の下を過ぎ、速に深澗の陲を旋り、少しも滯礙する所なく向背して幽奇を窮めた。管絃の聲は縹緲として去り、綺羅を纏へる美妓は霏微として去來し、舞ふ者あり歌ふ者あり、日が暮れ客が醉うてもまだ歸さないので、高聲に彩牋を求むる者あり、大笑して玉杯を勸むる者あり、唱和して筆を走らす者もあれば、推問答して一向杯をささない者もある。詩を吟じて兩耳を淸め、酣醉して四肢を暢べ、主人も客も身分の貴賤を忘れ、自他を忘れて有頂天になつてゐる。（以上は宴飲の樂を極言したのである。）客の中に一人の詩魔（樂天自ら謂ふ）がゐて、詩を吟じて疲るるを知らず、主人公の殘りの紙と墨とを乞うて狂詞を書きなぐつた。また此主人公は所謂社稷の臣で、文武の才を兼ね、十たび丞相に任ぜられ五たび大將を命ぜられ、四朝（憲宗、穆宗、敬宗、文宗）に歷仕して勳功を立て、公卿の首位に居たが、去年七十になつたので致仕の志を決した。天子の强ひて引き留めようとせられる恩命默し難く、公の志も固くして奪ふことが出來なかつた。因つて中道を取り東都留守となつて洛陽に來た。未だ貂蟬を脫するには至らなかつたが、併し職責系累はなくなつた。（以上は自己と主人とを併せ敍したのである。）此の如き偉人は古來の歷史に徵するも、殆ど其匹儔を見ない。陸賈は功績が少く、二疏は官位が卑く、范蠡は禍の及ばんことを懼れて舟に乘つて去り、張良は

穀を辟けて飢ゑた。皆公に比すべくもない。晉の羊祜は漢水の南の襄陽を鎮し、民の敬慕する所となつて、峴山に碑を建てられ、梁の柳惲は吳興の太守となり、吏民の懷く所となつたが、ただ、汀洲採二白蘋一、日煖江南春の詩を賦した。謝安は東山に隱居し毎に妓を以て隨へた。晉の山簡は征南將軍となり襄陽を鎮せし時、屢〻高陽池に遊んだが、唯醉うて白帽を倒にかぶつたと謂はれてゐる。いづれも裴公の今日餘力を以て此樂を兼有するには及ばない。（以上古人を歷擧して陪襯とした。）願はくは公の壽山の崩れざるが如く、安樂にして長く此に在り、我は蒲稗の如くに其れに依託してゐたいものである。（祝頌の意を以て結んだ。）

晚歸二香山寺一因詠所懷

晚に香山寺に歸り因つて所懷を詠ず

我年日已老。我身日已閒。
我が年は日に已に老い、我が身は日に已に閒なり。
閒出二都門一望。但見二水與山一。
閒に都門を出でて望めば、但水と山とを見る。
關塞碧巖巖。伊流清潺潺。
關塞は碧にして巖巖、伊流は清くして潺潺。
中有二古精舍一。軒戶無二扃關一。
中に古精舍有り、軒戶に扃關無し。
岸草歇可藉。逕蘿行可攀。
岸草は歇ひて藉く可く、逕蘿は行きて攀づ可し。
朝隨二浮雲一出。夕與二飛鳥一還。
朝には浮雲に隨ひて出で、夕には飛鳥と還る。
吾道本迂拙。世途多險艱。
吾が道本迂拙、世途險艱多し。
嘗聞嵇呂輩。尤悔生二疎頑一。
嘗て聞く嵇呂が輩、尤悔疏頑より生ず。
巢悟入二箕潁一。皓知二返二商巔一。
巢は悟りて箕潁に入り、皓は商巔に返るを知る。
豈唯樂二肥遯一。聊復祛二憂患一。
豈唯肥遯を樂むのみならんや、聊か復憂患を祛る。
吾亦從二此去一。終老二伊嵩間一。
吾も亦此れより去り、伊嵩の間に終老せん。

【字解】【一】伊流　伊水の流。【二】古精舍　古寺。【三】扃關　とじまり。【四】嵇呂　嵇は嵇康。呂は呂安。嵇康は三國魏の人、景元中司馬昭の害する所となる。呂安は嵇康と友として善し、一たび相思ふ毎に千里駕を命ず。亦司馬昭の殺す所となる。【五】尤悔　他人のとがめ、己の後悔。【六】巢　巢父。堯の時の高士。山居して世利を營まず。堯天下を讓れども受けず。箕潁は高士傳に許由聞二堯致二天下一而讓焉、乃退而遁二於中嶽、潁水之陽、箕山之下一とある。されば箕潁に入りしは、許由にして巢父にあらず。【七】皓　商山の四皓とて秦の時商山に隱居せし四人の高士。【八】肥遯　隱居なり。易に肥遯无レ不レ利とある。【九】伊嵩　洛陽の附近に在る山と川。

【題義】日暮に香山寺に歸り感懷を述べた詩である。

【詩意】年を取るに隨つて身に暇が多くなつたので、暇を見ては都門を出て山水の間に遊んでゐる。仰いで關山を望めば碧巖巖として聳え、俯して伊水を見れば清潺潺として流れてゐる。其中に戶締もしてない古寺がある。岸の草は藉いて憩ふべく、逕の蘿は攀ぢて登るべし。因つて予は屢〻此山に遊んで留宿し、朝には浮雲と俱に此寺を出で、夕には飛鳥と共に此寺に還る。予は本來迂拙の性である

から、世路の險艱が殊に多い。聞けば嵇康や呂安が尤悔に遇うたのも疎頑の性の致す所なさうだ。故に巢父は之を悟つて箕潁に隱れ、四皓は商山に隱れたのである。必ずしも隱遁を好んだからではない。一つには身の憂患を除く爲である。されば予も此より去つて伊嵩の間に身を終らうと思ふ。

張常侍池涼夜閒讌贈諸公

張常侍の池に涼夜閒讌し諸公に贈る

竹橋新月上。水岸涼風至。
對月五六人。管絃三兩事。
留連池上酌。欵曲城外意。
或嘯或謳吟。誰知此閒味。
廻看市朝客。矻矻趨名利。
朝忙少遊宴。夕困多眠睡。
清涼屬吾徒。相逢勿辭醉。

竹橋新月上り、水岸涼風至る。
月に對する五六人、管絃三兩事。
留連して池上に酌む、欵曲す城外の意。
或は嘯き或は謳吟す、誰か此閒味を知らん。
市朝の客を廻看すれば、矻矻として名利に趨る。
朝に忙しくして遊宴すること少く、夕に困みて眠睡する。
清涼は吾徒に屬す、相逢ひて醉を辭する勿れ。

【字解】【一】欵曲　打解けて語り合ふ。【二】市朝客　朝廷に仕ふる官吏。

【題義】張常侍の池の邊で涼夜に閒宴した時一座の諸公に贈つた詩である。

【詩意】竹の橋には宵月が上り、池の岸には涼風が吹いて來る。五六人の人が月に對し、二三種の管絃を奏し、池邊に酒酌みかはして、城外清遊の樂を語り合ひ、或は長嘯したり或は謳吟したりする。この閒味は人の窺知を容れぬ所である。翻つて官界に居る者を看れば常に名利に奔走し、遊宴する暇もなく困睡に沈んでゐる。かかる清涼の氣味は唯吾等閒人の專有物である。茲に相逢うたからには醉を辭せずにウント飲まうでは御座らぬか。

和皇甫郎中秋曉同登天宮閣言懷。六韻

皇甫郎中が秋曉同じく天宮閣に登り懷を言ふに和す、六韻

碧天忽已高。白日猶未短。
玲瓏曉樓閣。清脆秋絲管。
張翰一盃酣。嵇康終日懶。
塵中足憂累。雲外多疏散。
病木斧斤遺。冥鴻羈緤斷。
逍遙二三子。永願爲閒伴。

碧天忽ち已に高く、白日猶未だ短からず。
玲瓏たり曉の樓閣、清脆なり秋の絲管。
張翰一盃の酣、嵇康終日の懶。
塵中憂累足り、雲外疏散多し。
病木は斧斤遺し、冥鴻は羈緤斷ゆ。
逍遙たる二三子、永く閒伴と爲らんを願ふ。

【字解】【一】絲管　管絃。【二】張翰　晉の吳の人、洛陽に入り齊王冏の大司馬東曹掾となる。秋風の起るに由りて吳中の菰菜蓴羹鱸魚膾を思ひ、遂に駕を命じて歸る。【三】嵇康　三國魏の人、中散大夫に拜せらるれども就かず、常に琴を彈じて自ら樂む。

【四】塵中　俗世間。【五】斧斤　なの、まさかり。【六】冥鴻　天上を翔ける鴻。自由の身に喩ふ。羈縶は縛つてある索。【七】閒伴　閒遊の伴侶。

【題義】皇甫郎中（前に見ゆ）が秋の朝、樂天と俱に天宮閣に登り、感懷を述べた詩に、樂天が和したのである。

【詩意】已に秋に入りて天は高く澄んでゐるが、日はまだ短くはならない。曉に天宮閣に登れば樓閣は玲瓏と照り輝き、閣上に奏する管絃の音が清く柔かに響き渡る。吾は古の張翰や嵇康にも比すべき身で、常に酒を飲んで爲す事もなく日を送つてゐる。兎角塵の世は累が多いが、浮世離れた身には閒暇が多い。吾は蝕んだ木のやうなもので誰あつて伐る者もなく、天上に翔る鴻のやうで何等の羈もない。願はくは諸君の仲間にはひつて永く俱に逍遙自適したいものである。

送呂漳州

今朝一壺酒。言送漳州牧。
半自要閒遊。愛花憐草綠。
花前下鞍馬。草上攜絲竹。
行客飲數盃。主人歌一曲。

呂漳州を送る

今朝一壺の酒、言に漳州の牧を送る。
半は自ら閒遊を要し、花を愛し草綠を憐む。
花前鞍馬を下り、草上絲竹を攜ふ。
行客數盃を飲み、主人一曲を歌ふ。
端居惜風景。屢出勞僮僕。
獨醉似無名。借君作題目。

【字解】【一】漳州牧　漳州刺史なり。【二】絲竹　管絃なり。【三】行客　呂漳州を指す。【四】主人　樂天自ら謂ふ。【五】端居　平居といふが如し。

【題義】漳州刺史呂氏の去るを送る詩である。

【詩意】今朝一壺の酒を擧げて漳州刺史たる君の去るのを送る。一半は君を送るのであるが、一半は自分の閒遊の爲で、花の紅なるを愛し草の綠なるを賞して、花の前には馬を下り、草の上には管絃を奏し、旅立つ君は數杯を飲み、見送る我は一曲の歌を歌つた。家に閑居してゐれば風景の移るのが氣になるので、屢〻出遊すれば僮僕に厄介をかけることになる。また獨りで醉うては名儀が立たないので、君を送るといふ名儀を借りて出遊した次第である。

短歌行

世人求富貴。多爲奉嗜欲。
盛衰不自由。得失常相逐。
問君少年日。苦學將干祿。

短歌行

世人の富貴を求むるは、多くは嗜欲に奉ぜんが爲なり。
盛衰自由ならず、得失常に相逐ふ。
問ふ君少年の日、苦學して將に祿を干めんとす。

負笈塵中遊。抱書雪前讀。
布衾不周體。藜茹纔充腹。
三十登宦途。五十被朝服。
奴溫已挾纊。馬肥初食粟。
未敢議歡遊。尚爲名檢束。
耳目聾暗後。堂上調絲竹。
牙齒缺落時。盤中堆酒肉。
彼來此已去。外餘中不足。
少壯與榮華。相避如寒燠。
青雲去地遠。白日經天速。
從古無奈何。短歌聽一曲。

笈を負ひて塵中に遊び、書を抱きて雪前に讀む。
布衾體に周からず、藜茹纔に腹に充つ。
三十にして宦途に登り、五十にして朝服を被る。
奴溫にして已に纊を挾み、馬肥えて初めて粟を食む。
未だ敢て歡遊を議らず、尚名の爲に檢束せらる。
耳目聾暗の後、堂上絲竹を調す。
牙齒缺落の時、盤中酒肉を堆くす。
彼來れば此已に去る、外餘りて中足らず。
少壯と榮華と、相避くること寒燠の如し。
青雲地を去ること遠く、白日天を經ること速なり。
古より奈何ともする無し、短歌一曲を聽け。

【字解】【一】塵中　俗世間。【二】抱書雪前讀　晉の孫康家貧にして燭なし。常に雪に映じて書を讀む。【三】藜茹　野菜なり。【四】挾纊　綿を著る。左傳に楚子伐蕭、申公巫臣曰、師人多寒、王巡三軍、拊而勉之、三軍之士皆如挾纊とある。【五】檢束　束縛なり。【六】絲竹　管絃。【七】盤中　皿の中。【八】彼　富貴を指す。此は嗜欲を指す。【九】外　嗜欲を充すべき物。中は嗜欲の情。【一〇】寒燠　寒暖なり。【一一】青雲　高位高官に喩ふ。

【題義】短歌行は樂府の曲名である。

【詩意】世人が富貴を求めるのは、以て己の嗜慾を充たさんが爲である。併し人の身の盛衰は思ふままにならず、一方を得れば一方を失ひ、兩得し難いものである。君に尋ねるが君も若い時に苦學して祿を干めんとし、笈を負うて塵世をかけまはり、雪に照らして書物を讀み、著物にも食物にも不自由を忍び、三十になつて始めて官途に就き、五十になつて朝官に列なることが出來たのであらう。されば己の召使ふ所の奴僕さへ溫かに著るやうになつてから自分も暖かに著、肥えた馬に乘ることの出來る身分になつてから厚祿を食み、己の名の爲に束縛されて自由に歡遊することをも敢てせず、耳聾し目暗くなつて始めて堂上に管絃を弄することが出來るやうになり、齒が拔け落ちてから酒肉に飽くことが出來るやうになつたのであらう。つまり富貴になつた時は已に嗜慾の去つた時で、嗜慾を充たす物の餘りある頃は嗜慾の念は已に消亡してしまつたのである。青雲の上に登ることは難く、歲月の遷るのないのと同じで、兩者を併せ得ることは出來ないのである。君よ願はくは吾が此短歌一曲を聽き給へ。は速い。これは古來人力の如何ともし難い所である。

詠懷

高人樂丘園。中人慕官職。

高人は丘園を樂み、中人は官職を慕ふ。

一事尚難成。兩途安可得。
一事すら尚成り難し、兩途安んぞ得可けんや。
(三)遑遑千世者。多苦(四)時命塞。
遑遑として世に干むる者は、多く時命の塞がるを苦しむ。
亦有愛閒人。又爲窮餓逼。
亦閒を愛する人有り、又窮餓の爲に逼らる。
我今幸雙遂。祿仕兼游息。
我今幸に雙び遂げ、祿仕游息を兼ぬ。
未嘗羨榮華。不省勞心力。
未だ嘗て榮華を羨まず、省みて心力を勞せず。
(五)妻孥與婢僕。亦免愁衣食。
妻孥と婢僕と、亦衣食を愁ふるを免る。
所以吾一家。面無憂喜色。
所以に吾が一家、面に憂喜の色無し。

【字解】【一】高人　心の高尚な人。丘園は隱居の地をいふ。易經に賁于丘園とある。【二】中人　中材の人。【三】遑遑　あくせくする貌。【四】時命　運命。岑參の詩に時命難自知、功業豈暫忘とある。【五】妻孥　妻子。

【題義】感懷を詠じた詩である。

【詩意】高士は隱居を樂み、中材の人は官職を冀ふものである。併し一つの事さへ成し遂げ難いのであるから、まして隱居と官職との二途を兼ね全うすることは出來ない。故に遑遑として世利を逐ふ者は多くは運命の塞るに苦しみ、亦閒遊を貪る者は飢餓に逼られるのである。處が我は僥倖にも此兩者を併せ遂げて、祿仕と閒遊とを兼ね、未だ嘗て榮華を羨まず、自ら省みて無理に心力を勞することをしない。妻子も婢僕も亦幸に衣食の心配を免れてゐる。故に吾が一家の者は面に憂喜の色がない。

府西亭納涼歸

府の西亭に涼を納れて歸る

避暑府西亭。晚歸有閒思。
暑を府の西亭に避け、晚に歸りて閒思有り。
夏淺蟬未多。綠槐陰滿地。
夏淺くして蟬未だ多からず、綠槐陰地に滿つ。
帶寬衫解領。馬穩人攏轡。
帶寬くして衫領を解き、馬穩かにして人轡を攏る。
面上有涼風。眼前無俗事。
面上に涼風有り、眼前に俗事無し。
路經府門過。落日照官次。
路府門を經て過ぐれば、落日官次を照らす。
牽聯縲絏囚。奔走塵埃吏。
縲絏の囚を牽聯し、塵埃の吏を奔走せしむ。
低眉悄不語。誰復知茲意。
眉を低れ悄へて語らず、誰か復茲意を知らん。
憶得五年前。晚衙時氣味。
憶ひ得たり五年の前、晚衙時氣味あり。

【字解】【一】官次　官舍なり。【二】縲絏囚　囚徒なり。【三】塵埃吏　俗吏。【四】晚衙　夕方官吏の役所を退く時の禮式。

【題義】府とは河南尹の役所をいうたもののやうである。此詩は樂天が河南尹たりし頃、府の西亭に涼を納れて歸つた時の作である。

【詩意】役所の西亭に暑を避け夕方になつて官舍に歸り、思ふともなく閒思が起つた。時に夏がまだ淺いので蟬の聲もうるさい程ではなく、綠色濃き槐の陰が一面に地にさしてゐる。帶をゆるめ襟をひろげ、穩かに馬に跨つて人に手綱を持たせて歸れば、涼風が面を掠めて快く、眼前には何一つ俗事がない。やがて役所の門前を過ぐれば落日が官舍を照らしてゐた。予は職務上囚徒を牽き聯ねたり小吏を奔走せしめたりしたが、眉を低れ悄然として、物も言はないので、誰とて我が胸中を知る者はないが、自分は五年以前蘇州刺史たりし頃、晩衙の時に丁度このやうな心持のしたことを憶ひ出した。

老熱

一飽百情足。一酣萬事休。
何人不衰老。我老心無憂。
仕者拘職役。農者勞田疇。
何人不苦熱。我熱身自由。
臥風北窓下。坐月南池頭。
腦涼脫烏帽。足熱濯清流。

老熱

一飽百情足り、一酣萬事休す。
何人か衰老せざらん、我老いて心に憂無し。
仕ふる者は職役に拘せられ、農する者は田疇に勞す。
何人か熱に苦しまざらん、我熱するも身自由なり。
風に臥す北窓の下、月に坐す南池の頭。
腦涼しくして烏帽を脫ぎ、足熱して清流に濯ふ。

慵發晝高枕。興來夜汎舟。
何乃有餘適。祇緣無過求。
或問諸親友。樂天是與不。
亦無別言語。多道大悠悠。
悠悠君不知。此味深且幽。
但恐君知後。亦來從我遊。

【字解】【一】一酣　一醉。【二】餘適　餘の快適。【三】過求　過分の求。【四】悠悠　おちついてゐる貌。

【題義】老と熱とに累はされず、悠然として自適することを述べた詩である。

【詩意】身一たび醉飽すれば他に何の慾念もなく、世に衰老せぬ者はないが、我は老いても、心に憂がない。仕宦する者は職務の爲に心を拘かれ、農夫は田畑の爲に身を勞し、誰でも熱に苦しまぬ者はないが、我は熱くとも身は自由である。北窓の下に臥して涼風に當り、南池の邊に坐して月を仰ぎ、頭巾を脫いで頭を冷し、足が熱ければ清流に濯ひ、倦怠を覺ゆれば晝でも眠り、興が起れば夜でも舟を泛べ、心の快適がいくらでもある。それといふのも畢竟過分な欲求をしないからである。因つて或人が我が親友に問うた、樂天は近來機嫌がよいかどうかと。問はれた親友は別に言ふ所もなく、ただ大に悠悠として樂んでゐると答へた。吾が悠悠たる樂みの深く且幽なる味ひは他人にはわかるまい。若

しわかつたら恐らく我の仲間になつて倶に遊ぶやうになるであらう。

新秋喜涼因寄兵部楊侍郎

新秋涼を喜ぶ、因つて兵部楊侍郎に寄す

外強火未退。中銳金方戰。
一夕風雨來。炎涼隨數變。
徐徐炎景度。稍稍涼飈扇。
枕簟忽淒清。巾裳亦輕健。
老夫納秋候。心體殊安便。
睡足一屈伸。搔首摩挲面。
褰簾對池竹。幽寂如僧院。
俯觀游魚群。仰數浮雲片。
閒忙各有趣。彼此寧相見。
昨日聞慕巢。召對延英殿。

外強くして火未だ退かず、中鋭くして金方に戰ふ。
一夕風雨來り、炎涼隨ひて數〻變ず。
徐徐炎景度り、稍稍涼飈扇ぐ。
枕簟忽ち淒清、巾裳亦輕健。
老夫秋候を納れ、心體殊に安便なり。
睡足りて一たび屈伸し、首を搔きて面を摩挲す。
簾を褰げて池竹に對すれば、幽寂僧院の如し。
俯して游魚の群を觀、仰ぎて浮雲の片を數ふ。
閒忙各〻趣有り、彼此寧ぞ相見ん。
昨日慕巢、召されて延英殿に對すと聞く。

【字解】【一】火未退　炎威の衰へないこと。【二】金方戰　金は秋の氣なり。秋氣が來ること。【三】淒清　涼しきこと。【四】老夫　樂天自ら謂ふ。【五】摩挲　こする。【六】閒忙　閑暇なると多忙なると。樂天は閒にして楊侍郎は忙なり。【七】彼此　楊侍郎と樂天。【八】延英殿　宮殿の名。

【題義】秋に入りて涼しくなつたことを喜び、因つて兵部侍郎楊汝士（虞卿の弟、字は慕巢）に寄せた詩である。

【詩意】まだ暑氣は退かないけれども既に秋氣が兆してゐる。されば一雨ごとに炎威が去つて段段涼風が吹き初め、枕や簟も冷冷として衣裳の輕きを覺える。我も秋候を迎へて身心ともに安泰で、晝寢をしあきて伸びをしたり、頭を搔いたり顏を撫でたりしてから、簾を捲いて池邊の竹に對すれば、幽寂なることは僧院のやうである。俯しては游魚を觀、仰いでは浮雲を數へ、爲す事もなく日を送つてゐる。我は此の如く閒暇であるが、君は多忙で、各〻その趣を異にし、相見る機會も少い。昨日も聞けば、君は天子の御召に因つて延英殿に拜謁したさうだ。

懶放二首。呈劉夢得吳方之

懶放二首、劉夢得・吳方之に呈す

青衣報平旦。呼我起盥櫛。
今早天氣寒。郎君應不出。

青衣平旦を報じ、我を呼びて起きて盥櫛せしむ。
今早天氣寒し、郎君應に出でざるべし。

又無賓客至。何以銷閒日。
已向微陽前。暖酒開詩帙。

【字解】【一】宵衣　婢をいふ。平旦は夜の明けたこと。【二】今早　今朝。【三】郎君　旦那樣。樂天を指して言ふ。【四】閒日　閒暇の日。【五】微陽　冬の日。【六】詩帙　詩卷といふが如し。

【題義】閒暇に任せてだらしなく日を送つてゐる有樣を述べて劉夢得（名は禹錫）吳方之二氏に呈した詩である。

【詩意】婢が夜の明けたことを告げ、我を呼び起して顏を洗ひ髮を梳らせ、さて言ふやう「今朝は大層寒いですから、旦那樣には、どちらへもおでましにならない方が宜しう御座います」と。さりとて遊びに來てくれる客もなければ、暇のつぶしやうがない。仕方なしに日向ぼつこをしながら酒を暖めて詩卷を繙くことにした。

〔二〕

朝憐一牀日。暮愛一爐火。
牀暖日高眠。爐溫夜深坐。
雀羅門懶出。鶴髮頭慵裹。

〔二〕

朝には一牀の日を憐み、暮には一爐の火を愛す。
牀暖かにして日高けて眠り、爐溫かにして夜深けて坐す。
雀羅門出づるに懶く、鶴髮頭裹むに慵し。

除却劉與吳。何人來問我。

【字解】【一】雀羅　雀を捕ふる網。漢書に下邽翟公爲二廷尉一、賓客塡レ門、及レ廢門外可レ設二雀羅一とある。人の來り訪ふ者なく雀のみ門庭に下ること。【二】鶴髮　白髮。

【詩意】朝は日の寢牀を照らすのを好んで日の高く昇るまで眠り、暮には爐の火の赫赫たるを愛して夜の深けるまで坐し、晝は訪ふ人もなくて雀が澤山下りてゐる門を出づるに懶く、鶴のやうに白い頭髮を結ぶに慵い。こんな時には誰か來てくれればよいが、君等二人を除いては外に誰も來てくれる人はない。

劉と吳とを除却せば、何人か來りて我を問はん。

六十六

病知心力減。老覺光陰速。
五十八歸來。今年六十六。
鬢絲千萬白。池草八九綠。
童稚盡成人。園林半喬木。
看山倚高石。引水穿深竹。
雖有潺湲聲。至今聽未足。

六十六

病みて心力の減ずるを知り、老いて光陰の速なるを覺ゆ。
五十八にして歸り來り、今年六十六。
鬢絲千萬白く、池草八九綠なり。
童稚盡く成人、園林半ば喬木。
山を看て高石に倚り、水を引きて深竹を穿つ。
潺湲の聲有りと雖も、今に至るまで聽きて未だ足らず。

【字解】【一】八九絲　八九回絲になつた。【二】潺湲　水の流るる聲。

【題義】六十六歳の時の閑居の情景を述べた詩である。

【詩意】病んでは心力の減退を知り、老いては光陰の特に過ぎ易きを覺える。我は五十八の時に洛陽に歸つて來て、今年は丁度六十六になる。鬢の毛は盡く白くなり、池邊の草も八九回春の綠を呈し、小供も盡く成人し庭木も大木になつた。石に倚つて山を眺め、深竹を穿ちて水を引きなどして閑居してゐるが、潺湲たる水流の聲はいくら聽いても聽き飽きない。

三適。贈道友

(一)褐綾袍厚暖。臥蓋行坐披。
(二)紫氈履寬穩。(三)蹇步頗相宜。
足適已忘履。身適已忘衣。
況我心又適。兼忘是與非。
三適今爲一。(四)怡怡復熙熙。
(五)禪那不動處。(六)混沌未鑿時。

三適、道友に贈る

褐綾袍厚暖、臥して蓋ひ行坐に披る。
紫氈履寬穩、蹇步頗る相宜し。
足適して已に履を忘れ、身適して已に衣を忘る。
況んや我心又適し、兼ねて是と非とを忘るるをや。
三適今一と爲り、怡怡復熙熙。
禪那不動の處、混沌未鑿の時。

【字解】【一】褐綾袍　毛布の長襦。【二】紫氈履　紫の毛氈の履。【三】蹇步　跛行なり。【四】怡怡　和悅なり。熙熙は悅樂の貌。【五】禪那　禪定なり。不動は心を一境に定住して動かぬこと。【六】混沌未鑿　混沌は一に渾沌に作る。清濁未だ分れざる自然に喩ふ。莊子應帝王篇に南海之帝爲レ儵、北海之帝爲レ忽、中央之帝爲二渾沌一、儵與レ忽、時相與遇二於渾沌之地一、渾沌待レ之甚善、儵與レ忽謀レ報二渾沌之德一曰、人皆有二七竅一、以視聽食息、此獨無レ有、嘗試鑿レ之、日鑿二一竅一、七日而渾沌死とある。

【題義】三つの快適を述べて道友に贈つた詩である。

【詩意】毛布の袍は厚く暖かで、寢るにも步くにも坐るにも身に纏うてゐる。紫氈の履はゆるく穩かで、我がよろめく足にも具合がよい。足は快適を得て履を忘れ、身は快適を得て衣を忘れ、心は快適を得て是非を忘れ、此三適を併せ得て和樂に滿ちてゐる。丁度禪定に入つて心が動かず、渾沌が未だ七竅を鑿たず、七情の未だ分れない時のやうである。この快適の情は到底口で說明することは出來ないが、君の爲に强ひて言つて見たのである。

此固不レ可レ說。爲レ君强言レ之。

此れ固より說く可からず、君の爲に强ひて之を言ふ。

洛陽春。贈劉李二賓客

齊梁格

(一)水南冠蓋地。城東桃李園。
雪消二洛(二)陽堰一。春入二永(三)通門一。

洛陽の春、劉・李二賓客に贈る

齊梁格

水南は冠蓋の地、城東は桃李の園。
雪は洛陽の堰に消え、春は永通の門に入る。

淑景方靄靄。遊人稍喧喧。
年豐酒漿賤。日晏歌吹繁。
中有老朝客。華髮映朱軒。
從容三兩人。藉草開一樽。
樽前春可惜。身外事勿論。
明日期何處。杏花遊趙村。

洛城東有趙村。杏花千餘樹。

【字解】【一】水南　川の南。冠蓋は衣冠車蓋。官吏なり。【二】洛陽堰　後集卷十三に洛陽堰閑行と題する詩あり。【三】永通門　唐六典に東都城南面三門、中曰定鼎、左曰長安、右曰厚載、東面三門、中曰建春、南曰永通、北曰上東とある。【四】淑景　春景色。靄靄は花曇りの貌。【五】華髮　白髮。朱軒は朱塗の馬車。

【題義】洛陽の春遊を敍して太子賓客（官名）劉・李二氏に贈つた詩で、齊梁時代の風格に倣つて作つたものである。

【詩意】水南は冠蓋の集まる處で城東は桃李の園が多い。今や雪は洛陽堰に消え、春は永通門より入り、洛陽城中に春色が滿ちわたり、遊賞する人も多くなつた。年が豐かで酒が安いので、日の暮れるまで歌つたり吹いたりして騷いでゐる。その中に白髮の老朝客があつて、兩三人でしとやかに草を敷いて酒を酌みかはしてゐる。酒に對して春色の過ぎ易きを惜み、身外の榮華などは敢て問ふ所ではない。さて明日は何處で相會遊したらよからうか。杏花の咲き滿ちてゐる趙村がよからう。

寒食

人老いて何の樂む所ぞ、樂みは鄕國に歸るに在り。
我故園に歸りてより來た、九度寒食に逢ふ。
故園何れの處にか在る、池館東城の側。
四隣梨花の時、二月伊水の色。
豈獨り好風土なるのみならんや、仍舊親戚多し。
出で去りて恣まに歡遊し、歸り來りて聊か燕息す。
官の祿俸を供する有り、事の心力を勞する無し。
但恐らくは優穩多く、微躬銷し得ざらんことを。

【字解】【一】故園　故鄕、洛陽を指していふ。【二】東城　洛陽の東城。【三】伊水　川の名。【四】燕息　休息なり。【五】優穩　無事安泰。【六】微躬　いやしき身。

【題義】寒食（冬至から百五日を云ふ）の頃、洛陽に於ける閑適の狀を述べた詩である。

【詩意】老いては故郷に歸るのが何よりの樂みである。吾は故郷に歸つてから洛陽の東城の側らに池館を構へて住み、既に九回寒食に逢つた。今やあたりには梨の花が咲き滿ち、伊水の色も美しい。ただ風景の好いばかりではなく親戚故舊も多くある。されば出でては歡遊を恣にし、歸れば樂樂と休息することが出來る。おまけに官祿を戴きながら心力を勞する程の仕事もないので、あまりの無事安泰さに、殆ど日の送りやうがないくらゐである。

寄李蘇州兼示楊瓊

李蘇州に寄せ兼ねて楊瓊に示す

眞娘墓頭春草碧。
心奴鬢上秋霜白。
爲問蘇臺酒席中。
使君歌笑與誰同。
就中猶有楊瓊在。
堪上東山伴謝公。

眞娘墓頭春草碧に、
心奴鬢上秋霜白し。
爲に問ふ蘇臺酒席の中、
使君の歌笑誰と同じき。
就中猶楊瓊の在るあり、
東山に上りて謝公に伴ふに堪ふ。

【字解】【一】眞娘墓　雲溪友議に、眞娘者吳國之佳人也、死葬三吳宮之側一、行客感二其華麗一、競爲レ詩題二於墓樹一とある。【二】心奴　奴の名であらう。【三】蘇臺　姑蘇臺なり、吳王の都せし處。【四】使君　官吏をいふ。【五】謝公　晉の謝安東山に隱居し、常に妓を以て相從ふ、ここは李蘇州に比す。

【題義】蘇州刺史李六に寄せ、兼ねて楊瓊（歌妓の名、卷一に見ゆ）に示した詩である。

【詩意】今や眞娘の墓の頭には春草が青青と茂つてゐるであらう。それと反對に心奴の鬢には秋の霜が白く置いてゐるであらう。蘇州刺史たる君は近頃誰を相手に酒を酌み詩を吟じてゐるであらう。多分楊瓊が君に伴つて東山の遊をなしてゐるであらう。

和裴令公一日日一年年雜言見贈

裴令公が一日日一年年といふ雜言を贈られしに和す

一日日。作老翁。
一年年。過春風。
公心不以貴隔我。
我散唯將閒伴公。
我無才能忝高秩。
合是人間閒散物。
公有功德在生民。

一日日、老翁と作り、
一年年、春風を過ぐ。
公の心は貴を以て我を隔てず、
我は散にして唯閒を將て公に伴ふ。
我才能無くして高秩を忝くす、
合に是れ人間閒散の物なるべし。
公は功德の生民に在る有り、

【字解】【一】一日日　一日一日の意。【二】一年年　一年一年の意。【三】高秩　高位。【四】閒散物　無用の物。

何因得作自由身。　何に因りてか自由の身と作るを得ん。
前日魏王潭上宴　前日は魏王潭の上に宴して夜を連ね、
連夜。
今日午橋池頭遊　今日は午橋池の頭に遊びて晨を拂ふ。
拂晨。
山客硯前吟待月。　山客は硯前に吟じて月を待ち、
野人樽前醉送春。　野人は樽前に醉ひて春を送る。
不敢與公閒中爭　敢て公と閒中に第一を爭はざるも、
第一。
亦應占得第二第　亦應に第二第三を占め得る人たるべし。
三人。

【題義】裴度は太和八年に留守東都となり、九年に中書令に進んだ。因つて裴令公といふ。この詩は裴度の一日日一年年といふ雜言體の詩を贈られたのに和したのである。

【詩意】一日一日と老境に入り、一年一年と春を過ごして行く。裴公は己の貴きを恃んで我を疎外せず、我は身の閒散に任せて公に伴つて遊んでゐる。我は何の才能もなき無用の物でありながら高位を忝うしてゐるが、公は生民の爲に大功德ある人であるから、仲仲自由の身になることは出來ない。先日は魏王潭の上で連夜の宴を張り、今日は午橋池の頭で晨を侵して遊び、硯の前には山客が吟じて月の出づるを待ち、樽の前には野人が醉うて春を送つた。吾は公と閒中第一を爭ふことを敢てしないが、第二第三を占めることは出來るのであらう。

【五】午橋池　池の名。洛陽に在り。ここに裴度の別墅あり。後集卷十四に奉レ和ニ裴令公新成午橋莊絲野堂一即事一と題する詩あり。
【六】山客　樂天自ら謂ふ。
【七】野人　樂天自ら謂ふ。

奉レ和裴令公三月上巳日遊太原龍泉憶去歲禊洛見示之作

【題義】依ニ來體雜言一。裴令公が三月上巳の日太原の龍泉に遊び去歲洛に禊せるを憶ひ示さるるの作に和し奉る。來體雜言に依る。

去歲暮春上巳。　去歲暮春の上巳、
共泛洛水中流。　共に洛水の中流に泛ぶ。
今歲暮春上巳。　今歲暮春の上巳、
獨立香山下頭。　獨り香山の下頭に立つ。
風光閒寂寂。　風光閒にして寂寂、

【詩意】格詩　奉和裴令公三月上巳日遊太原龍泉憶去歲禊洛見示之作

【字解】【一】香山　洛陽の龍門山の東に在る山の名。
【二】旌旆　裴公の旗。悠悠は遙に隔たる貌。
【三】晉國　山西省の太原なり。丞相裴度は晉國公に封ぜられた。

旌旆遠悠悠。
丞相府。歸晉國。
太行山。礙并州。
鵬背負天龜曳尾。
雲泥不可得同遊。

旌旆遠くして悠悠。
丞相府、晉國に歸り、
太行山、并州を礙ふ。
鵬は背に天を負ひ龜は尾を曳く、
雲泥同じく遊ぶを得べからず。

【題義】裴度が三月上巳の日に太原（山西省に屬す）の龍泉に遊び、去年洛水に禊をしたことを憶うて作つた詩を示されたのに和したのである。

【詩意】去年の三月上巳の日には、共に洛水に舟を泛べて禊をしたが、今年の三月上巳には、唯獨り風光寂寂たる香山の麓に立つてゐる。公は旌旗をおし立てて太原に歸り、ただ太行山の遙に并州を礙げて聳ゆるのを見るのみで、公の風貌を仰ぐことは出來ない。公は背に天を負ひて雲中に翔り、我は尾を曳いて泥中に遊び、其遊を俱にすることの出來ないのは殘念である。

【四】太行山　山西省に在る山の名。并州は古の十二州の一。

【五】鵬　裴令公に喩ふ。龜は樂天自ら喩ふ。

憶江南詞三首

江南好。
風景舊曾諳。
日出江花紅勝火。
春來江水綠如藍。
能不憶江南。

憶江南詞　三首

江南好し、
風景舊曾て諳んず。
日出でて江花紅火に勝り、
春來りて江水綠藍の如し。
能く江南を憶はざらんや。

【題義】憶江南は曲調の名で望江南ともいふ。唐の李德裕が浙西を鎮せし時、亡妓謝秋娘を悼み此曲を作つた。

【詩意】江南は實に風景がよい。我は久しく之を諳知してゐる。日の出る時の江邊の花は、火よりも紅に、春になれば江水が藍よりも綠である。どうして江南を憶はずにゐられようぞ。

〔二〕

江南憶。
最憶是杭州。
山寺月中尋桂子。
郡亭枕上看潮頭。

〔二〕

江南を憶ふ、
最も憶ふは是れ杭州。
山寺の月中桂子を尋ね、
郡亭の枕上潮頭を看る。

【字解】〔一〕山寺　浙江省杭州に寺あり天竺寺といふ。桂子は桂樹の實。古傳說に月中に桂實ありといふ。〔三〕郡亭　州の官舍。潮頭は滿潮。浙江は潮の滿干の甚しき處として有名なり。

何日更重遊。　何れの日か更に重ねて遊ばん。

【詩意】江南の中でも殊に杭州を憶ふ情が深い。天竺寺の月中に桂子を尋ねたり、官舍に臥して潮を眺めたりした思出が深い。いつか復遊びたいものである。

〔三〕

江南憶。

其次憶吳宮。

吳酒一杯春竹葉。

吳娃雙舞醉芙蓉。

早晚復相逢。

〔三〕

江南を憶ふ、

其次は吳宮を憶ふ。

吳酒一杯の春竹葉、

吳娃雙舞醉芙蓉。

早晚復相逢はん。

【詩意】其次に憶ひ出されるのは吳宮である。一杯の春竹葉を傾けつつ、醉芙蓉の如き美女の雙び舞ふのを見るのは何とも言はれぬ樂みである。いつか復逢ひたいものだ。

【字解】【一】春竹葉　唐人多く酒を名づけて春といふ。竹葉は酒の名。

【二】吳娃　吳地の美女。李白の詩に吳娃與二越豔一、窈窕誇二鉛紅一とある。

芙蓉は蓮花。

【三】早晚　いつか。

汎小艅二首

小艅を汎ぶ　二首

水一塘。艅一隻。　水一塘、艅一隻。

艅頭漾漾知風起。　艅頭漾漾風の起るを知る、

艅背蕭蕭聞雨滴。　艅背蕭蕭雨の滴るを聞く。

醉臥船中欲醒時。　醉ひて船中に臥して醒めんと欲する時、

忽疑身是江南客。　忽ち疑ふ身は是れ江南に客たるかと。

【題義】小舟を泛べて遊んだ詩である。

【詩意】水上に一隻の小舟を泛べて遊んだ。舳に波の音を聞いて風の起つたことを知り、艫の方に蕭蕭たる物音を聞いて雨の滴るのを知つた。醉うて舟中に臥して俄に覺め、江南に遊んでゐるのではあるまいかと自ら疑つた。

【字解】【一】漾漾　波立つ貌。

【二】蕭蕭　風雨の聲。

〔二〕

船緩進。水平流。　船緩かに進み、水平かに流る。

一莖竹篙剔船尾。　一莖の竹篙船尾を剔り、

兩幅青幕覆船頭。　兩幅の青幕船頭を覆ふ。

【字解】【一】一莖　一本なり。竹篙は舟をこぐ竿。

【二】兩幅　ふなばた。

【三】亞竹　亞は壓に通ず。垂れさが

亞竹亂藤多照岸。亞竹亂藤多く岸を照らし、
如從鳳口向湖洲。鳳口より湖洲に向ふが如し。

【詩意】舟は緩かに進み、水は平かに流れてゐる。一本の棹で船尾から漕ぎ、二幅の青幕で船頭を覆つてある。竹が垂れ下り藤が亂生してゐる處を日が靜に照らし、宛も鳳口から湖洲に向ふ時の景色のやうである。

つてゐる竹。亂藤は亂生する藤。

【四】鳳口・湖洲　竝に地名であらう。

白樂天詩後集　卷四

格詩　凡八十六首

題裴晉公女几山刻石詩後　并序

裴晉公が女几山にて石に刻める詩の後に題す　并に序

裴侍中晉公。出討淮西時。過女几山下。刻石題詩。末句云。待平賊壘報天子。莫指仙山示武夫。果如所言。剋期平賊。由是淮蔡迄今底寧殆二十年。人安生業。夫嗟歎不足則詠歌之。故居易作詩二百言。繼題公之篇末。欲使採詩者修史者後之往來觀者。知公之功德本末前後也。

【訓讀】裴侍中晉公出でて淮西を討せし時、女几山の下を過ぎ、石を刻みて詩を題す。末句に云ふ、賊壘を平げて天子に報ずるを待ち、仙山を指して武夫に示す莫れと。果して言ふ所の如く期を剋して賊を平げぬ。是れ由り淮蔡今に迄るまで寧きを底すこと殆んど二十年、人生業に安んず。夫れ嗟歎〻て足らざれば則ち之を詠歌す。故に居易詩二百言を作り、繼ぎて公の篇末に題し、採詩の者、修史の

者、後の往來して觀る者をして、公の功德の本末前後を知らしめんと欲するなり。

【字解】【一】裴晉公　裴度は功を以て晉國公に封ぜられた。女几山は河南省宜陽縣の西に在り、俗に石雞山といふ。晉書に張軌少隱二於宜陽女几山一と見ゆ。【二】侍中　官名。門下省の長官。【三】仙山　女几山をいふ。【四】剋レ期　嚴に日を限ること。【五】淮蔡　卽ち淮西の地方。【六】居易　白樂天の名。

何處畫功業。何處題詩篇。
何れの處にか功業を畫ける、何れの處にか詩篇を題せる。

麒麟高閣上。女几小山前。
麒麟高閣の上、女几小山の前。

爾後多少時。四朝二十年。
爾後多少の時、四朝二十年。

賊骨化爲土。賊壘犁爲田。
賊骨化して土と爲り、賊壘犁かれて田と爲る。

一從賊壘平。陳蔡民晏然。
一たび賊壘の平ぎしより、陳蔡民晏然。

騾軍成牛戶。鬼火變人烟。
騾軍は牛戶と成り、鬼火は人烟に變ず。

蔡寇號二騾子軍一。陳蔡間農驍銳者。人畜レ牛者。呼爲二牛戶一。

生子已嫁娶。種桑亦絲緜。
子を生みて已に嫁娶し、桑を種ゑて亦絲緜あり。

皆云公之德。欲報無由緣。
皆云ふ公の德、報ぜんと欲するに由緣無しと。

公今在何處。守都鎭三川。
公や今何れの處にか在る、都に守とし三川を鎭す。

舊宅留永樂。新居開集賢。
舊宅永樂に留まり、新居集賢に開く。

公今在何官。被袞珥貂蟬。
公今何の官にか在る、袞を被りて貂蟬を珥む。

戰袍破猶在。髀肉生欲圓。
戰袍破れて猶在り、髀肉生じて圓ならんと欲す。

襟懷轉蕭灑。氣力彌精堅。
襟懷轉た蕭灑、氣力彌〻精堅。

登山不レ拄レ杖。上馬能掉レ鞭。
山に登りて杖を拄へず、馬に上りて能く鞭を掉ふ。

利澤浸入レ地。福降自昇レ天。
利澤浸して地に入り、福降つて自ら天に昇る。

昔號二天下將一。今稱二地上仙一。
昔は天下の將と號し、今は地上の仙と稱す。

勿レ追二赤松遊一。勿レ拍二洪崖肩一。
赤松の遊を追ふこと勿れ、洪崖の肩を拍つこと勿れ。

商山有二遺老一。可二以奉二周旋一。
商山に遺老有り、以て周旋に奉ず可し。

【字解】【一】麒麟　漢の宣帝功臣を麒麟閣に圖す。凡べて十一人。【二】四朝　憲宗・穆宗・敬宗・文宗。【三】陳蔡　淮西地方。晏然は安き貌。【四】守レ都　留守東都なり。三川は劍南東西道及び山南西道をいふ。【五】永樂　長安の里の名。前集卷五に見ゆ。【六】集賢　洛陽の里の名。後集卷三に裴侍中晉公以二集賢林亭卽事詩二十六韻一見レ贈云云と題する詩あり。【七】袞　天子幷に三公の服。貂蟬は侍中の冠。【八】髀肉　三國志に、劉備曰、吾常身不レ離レ鞍、髀肉皆消、今不二復騎一、髀裏肉生、日月若レ馳、老將レ至矣。而功業不レ建、是以悲耳とある。【九】襟懷　心持。蕭灑は、さつぱりしてゐる貌。【一〇】赤松　古の仙人の名。【一一】洪崖　仙人の名。郭璞の詩に、左挹二浮邱袂一、右拍二洪崖肩一とある。【一二】商山　山の名。漢の惠帝の太子たりし時出でて之を助けし四人の隱君子あり、之を商山の四皓といふ。樂天自ら比するか。【一三】周旋　交遊といふが如し。

【題義】元和中、裴度が淮西の反賊吳元濟を討つ時女几山の下を過ぎ、石に刻して詩を題した。其詩の末に「賊を平げて天子に報ずるまでは、女几山に隱れて仙人を氣取つてはゐられない」といふ句があつたが、果して豫期の通り賊を平げ、生民が皆其業に安んずるやうになつた。因つて樂天が其詩の後に此詩を題したのである。

【詩意】昔漢の宣帝は麒麟閣の上に功臣の像を畫かしめたといふが、我が裴晉公は女几山の下に其詩を題した。其後四朝二十年を歷た今日に於ては賊骨は化して土となり賊壘は犂かれて田となり、賊兵も良民と成り鬼火も人烟と變じ、子を生んで其子が嫁娶し、桑を種ゑて絲や綿を作り、皆晉公の德を頌して之に報いんことを期してゐる。晉公は今や東都に留守となり兼ねて三川に節度使となり、其舊宅は長安の永樂里に在り、新宅は洛陽の集賢里に在る。又侍中に任ぜられて、袞龍の服を纏ひ貂蟬の冠を戴いてゐる。以前の戰功を思うて今も猶髀肉の嘆に堪へず、老いたりと雖も氣力彌〻精堅で、山に登るにも杖を用ひず、馬上でも能く鞭を振ふほどである。利澤は下民に及び功德は天に達し、昔は天下の將と號せられ今は地上の仙と稱せられてゐる。赤松子や洪崖の仲間にはひつて仙人とならずとも、商山に遺老があつて、公に從つて遊ぶことを願つてゐる。

洛陽有愚叟

洛陽有愚叟。白黑無分別。

洛陽に愚叟有り、白黑も分別すること無し。

洛陽有愚叟

洛陽有愚叟。白黑無分別。

(一)浪跡雖似狂。謀身亦不拙。
點檢盤中飯。非精亦非糲。
點檢身上衣。無餘亦無闕。
天時方得所。不寒復不熱。
體氣正調和。不飢仍不渴。
閒將酒壺出。醉向人家歇。
野食或烹鮮。寓眠多擁褐。
抱琴(二)榮啓樂。荷鍤(三)劉伶達。
放眼看青山。任頭生白髮。
不知天地內。更得幾年活。
從此到終身。盡爲閒日月。

跡を浪にすること狂に似たりと雖も、身を謀るは亦拙なり。
盤中の飯を點檢すれば、精に非ざるも亦糲に非ず。
身上の衣を點檢すれば、餘り無きも亦闕くること無し。
天時方に所を得たり、寒からず復熱からず。
體氣正に調和し、飢ゑず仍渴せず。
閒に酒壺を將て出で、醉ひて人家に向ひて歇ふ。
野食して或は鮮を烹、寓眠して多く褐を擁す。
琴を抱きて榮啓が樂みあり、鍤を荷ひて劉伶が達あり。
眼を放ちて青山を看、頭に白髮を生ずるに任す。
知らず天地の內、更に幾年か活くるを得る。
此れより身を終るに到るまで、盡く閒日月と爲さん。

【字解】【一】浪跡　行を妄にする。【二】鮮　小魚。【三】榮啓　列子天瑞篇に孔子遊泰山一見榮啓期鹿裘帶索、鼓琴而歌云云とある。【四】劉伶　晉の人、酒を縱にして放達なり。嘗て酒德頌を著す。常に鹿車に乘り、一壺の酒を携へ、人をして鍤を荷ひて之に隨はしめ、謂うて曰く、死せば便ち我を埋めよと。

【題義】己の放達恬淡の狀を述べた詩である。

【詩意】洛陽に愚叟がある。物の黑白をも辨へず、行を妄にすることは狂人のやうであるが、一身の計は決して拙ではない。其食物を見ても相當な物を食つて居り、其著物を見ても相當の身なりをしてゐる。殊に今は天時が宜しきを得て熱からず寒からざる時節であるので、體氣が調和して飢ゑもせず渴きもしない。閒に乘じ酒を携へて出で、醉うては人家に憩ひ、鮮を烹て野に食し、褐を擁して他人の家に寄宿し、琴を鼓して樂むこと榮啓期の如く、鍤を荷うて劉伶と放達を齊うし、眼を放ちて青山を看、頭には白髮の生ずるに任せてゐる。今後幾年活きるか知れないが、此から身を終るまでを閒日月として呑氣に生を終るであらう。

飽食閒坐

紅粒陸渾稻。白鱗伊水魴。
庖童呼我食。飯熱魚鮮香。
箸箸適我口。匙匙充我腸。
八珍與五鼎。無復心思量。
捫腹起盥漱。下階振衣裳。
遶庭行數匝。却上檐下床。
箕踞擁裘坐。半身在日暘。
可憐飽暖味。誰肯來同嘗。
是歲太和八。兵銷時漸康。
朝廷重經術。草澤搜賢良。
堯舜求理切。夔龍啓沃忙。
懷才抱智者。無不走遑遑。
唯此不才叟。頑慵戀洛陽。
飽食不出門。閒坐不下堂。
子弟多寂寞。僮僕少精光。
衣食雖充給。神意不揚揚。
爲爾謀則短。吾爲謀甚長。

飽食して閒坐す

紅粒陸渾の稻、白鱗伊水の魴。
庖童我を呼びて食せしむ、飯熱くして魚鮮香し。
箸箸我が口に適し、匙匙我が腸に充つ。
八珍と五鼎と、復心に思量する無し。
腹を捫して起ちて盥漱し、階を下りて衣裳を振ふ。
庭を遶りて行くこと數匝、却きて檐下の床に上る。
箕踞して裘を擁して坐す、半身日暘に在り。
憐む可し飽暖の味、誰か肯て來りて同じく嘗めん。
是歲太和の八、兵銷して時漸く康し。
朝廷經術を重んじ、草澤賢良を搜す。
堯舜理を求むること切に、夔龍啓沃忙はし。
才を懷き智を抱く者、走りて遑遑たらざるは無し。
唯此不才の叟、頑慵にして洛陽を戀ふ。
飽食して門を出でず、閒坐して堂を下らず。
子弟多く寂寞、僮僕精光少し。
衣食充給すと雖も、神意揚揚たらず。
爾が爲に謀るは則ち短し、吾が爲に謀るは甚だ長し。

【字解】【一】陸渾　地名。もと陸渾の戎の居りし處。漢陸渾縣が置く。故城今の河南嵩縣の東北に在り、俗に方山と稱す。西に伏流阪あり。伊水伏流の處たり。【二】魴　魚の名。【三】八珍　八種の珍味。五鼎は五種の佳肴。漢の主父偃曰く、丈夫生不二五鼎食、

死卽五鼎烹と。【四】敷匝　數回。【五】箕踞　兩脚を伸ばし尻をつきて坐すること。【六】日暘　ひなた。【七】太和　文宗の年號。【八】堯舜　文宗に比す。理は治なり。【九】夔龍　竝に舜の相。啓沃は天子を輔佐すること。【一〇】遑遑　奔走する貌。【一一】不才叟　樂天自ら謂ふ。【一二】揚揚　得意の貌。

【題義】洛陽に閑居して飽食暖衣してゐることを述べた詩である。

【詩意】庖童が陸渾の米と伊水の魴とを我に捧げる、飯は熱く魚は香しく、一箸ごとに、我が口を悅ばし、一匙ごとに我が腹に充つる。されば更に八珍五鼎の食を貪る心などは起らない。ふくれた腹を撫でながら起つて盥漱をなし、階を下つて衣裳の塵を振ひ、數回庭前を漫歩してから檐下の臥床に就く。夜が明けると先づ床上に箕踞し、半身を旭日に當てて暖める。この飽暖の味は實に愛すべきものであるが、我と俱に此味を賞する者は誰もない。是歳は丁度太和八年で、軍も鎭まつて世も漸く穩かになり、天子は經術を重んじて草澤の間に遺賢を搜し索め、治を求むるに意を鋭くし給うて、古の夔龍にも比すべき賢相が之を輔佐し奉つてゐる。されば才智を抱く者は盡く出でて王事に鞅掌してゐるが、ただ我のみは頑慵であるから洛陽に退居し、飽食閑坐して出ないので、子弟も羽振がわるく僮僕も景氣がわるい。衣食には不自由はないが如何にも意氣が揚らない。つまり自分の爲に謀ることは申分がないが、子弟の爲に謀ることは不十分と謂はねばなるまい。

閒居自題

閑居して自ら題す

門前有流水。墻上多高樹。
竹逕遶荷池。縈廻百餘步。
波閒戲魚鼈。風靜下鷗鷺。
寂無城市喧。渺有江湖趣。
吾廬在其上。偃臥朝復暮。
洛下安一居。山中亦慵去。
時逢過客愛。問是誰家住。
此是白家翁。閉門終老處。

【字解】【一】荷池　蓮池。【二】洛下　洛陽。【三】過客　通行人。

【題義】閑居の狀を述べた詩である。

【詩意】門の前には川流があり墻の上には大木が聳え立ち、竹逕が蓮池を繞り、周圍が百餘步もあらう。波穩かにして魚や鼈が戲れ、風が靜で鷗や鷺が下りてゐる。少しも都會の喧噪がなく江湖の趣がある。吾が茅屋が丁度其上に在つて、我は朝晩そこに寢ころんでゐる。一たび洛陽に安居してからは、この山中を出るのが如何にも大儀である。時折通行人が我が住居を稱美して、一體誰の住居であるかなどと尋ねる。その時は白氏の老翁が閉居終老の地だと答へる。

門前に流水有り、墻上に高樹多し。
竹逕荷池を遶り、縈廻すること百餘步。
波閒にして魚鼈戲れ、風靜にして鷗鷺下る。
寂として城市の喧無く、渺として江湖の趣有り。
吾が廬其上に在り、偃臥朝復暮。
洛下安んじて一たび居り、山中亦去るに慵し。
時に過客の愛するに逢ふ、問ふ是れ誰が家の住ぞと。
此れは是れ白家の翁、門を閉ぢて老を終る處なり。

覽鏡喜老

今朝覽明鏡。鬚鬢盡成絲。
行年六十四。安得不衰羸。
親屬惜我老。相顧興歎咨。
而我獨微笑。此意何人知。
笑罷仍命酒。掩鏡捋白髭。
爾輩且安坐。從容聽我詞。
生若不足戀。老亦何足悲。
生若苟可戀。老卽生多時。
不老卽須夭。不夭卽須衰。
晚衰勝早夭。此理決不疑。
古人亦有言。浮生七十稀。
我今欠六歲。多幸或庶幾。
儻得及此限。何羨榮啓期。

鏡を覽て老を喜ぶ

今朝明鏡を覽れば、鬚鬢盡く絲と成れり。
行年六十四、安んぞ衰羸せざるを得ん。
親屬我が老いたるを惜み、相顧みて歎咨を興す。
而も我獨り微笑す、此意何人か知らん。
笑罷みて仍りて酒を命じ、鏡を掩ひて白髭を捋る。
爾が輩且安坐し、從容として我が詞を聽け。
生若し戀ふに足らずんば、老亦何ぞ悲むに足らん。
生若し苟も戀ふ可くんば、老は卽ち生くること多時なり。
老いざれば卽ち須らく夭すべし、夭せずんば卽ち須らく
晚く衰ふるは早く夭するに勝れり、此理決して疑はず。
古人も亦言へる有り、浮生は七十稀なりと。
我今六歲を欠く、多幸或は庶幾からん。
儻し此の限に及ぶを得ば、何ぞ榮啓期を羨まん。

當喜不當歎。更傾酒一巵。

【字解】【一】成絲　白毛になつたこと。【二】行年　年齢。【三】榮啓期　春秋時代の人の名。嘗て曰く、人生有て不レ見二日月一不レ免二襁褓一者ハ、吾行年九十矣、何不レ樂也と。【四】一巵　一杯。

【題義】鏡を覽て己の老いたのを喜んだ詩である。

【詩意】今朝鏡を見た所が鬚も鬢も皆眞白になつてゐた。もう六十四だから、衰老するのも無理はない。然るに家族の者共は我が老いたるを憐み、皆歎聲を泄らした。自分は獨り微笑して悲まないが、吾が此心中を知る者は誰もない。因つて酒を命じ鏡を掩ひ白髭を撚つて言つた。「まア お前等は皆すわれ、そして俺の言ふことを聽け。若し生といふものが格別戀著するに足らぬものだとすれば、老いることは決して悲むに足らないであらう。若し又生といふものが戀著するに足るものだとすれば、老いたのは多く生きたのだから喜ぶべきことだ。老いなければ若死にする。若死にしなければ老いるにきまつてゐる。晚く衰へるのは早く若死にするよりは遙に勝つてゐる。これは疑なき道理ではないか。古人も人生七十古來稀なりと謂つてゐるが、我は今六歲不足してゐるが、幸にして七十まで生きられるかも知れない。若し七十まで生きられれば、敢て九十まで生きた榮啓期などを羨みはしない。して見れば我が老いたのは喜ぶべきであつて歎くべきではないのだ」と言つて、更に一杯の酒を飲みほした。

風雪中作

歲暮風動地。夜寒雪連天。
老夫何處宿。煖帳溫爐前。
兩重褐綺衾。一領花茸氈。
粥熟呼不起。日高安穩眠。
是時心與身。了無閒事牽。
以此度風雪。閒居來六年。
忽思遠遊客。復想早朝士。
蹋凍侵夜行。凌寒未明起。
心爲身君父。身爲心臣子。
不得身自由。皆爲心所使。
我心既知足。我身自安止。
方寸語形骸。我應不負爾。

【字解】【一】老夫　樂天自ら謂ふ。【二】兩重　ふたかさね。褐綺　毛布并に絹。【三】一領　一枚。花茸氈は花模樣の散亂し

風雪中の作

歲暮れて風地を動かし、夜寒くして雪天に連る。
老夫何れの處にか宿する、煖帳溫爐の前。
兩重褐綺の衾、一領花茸の氈。
粥熟して呼べども起きず、日高くるまで安穩に眠る。
是時心と身と、了に閒事に牽かるる無し。
此を以て風雪を度る、閒居して來た六年。
忽ち遠遊の客を思ひ、復早朝の士を想ふ。
凍を蹋み夜を侵して行き、寒を凌ぎ未だ明けずして起く。
心は身の君父たり、身は心の臣子たり。
身の自由を得ざるは、皆心の爲に使はるればなり。
我が心既に足るを知り、我が身自ら止るに安んず。
方寸形骸に語る、我應に爾に負かざるべしと。

てゐる毛氈。【四】閒事　無用の事。むだごと。【五】早朝　朝早く參朝する。【六】方寸　心をいふ。形骸は身なり。

【題義】風雪の時節にも安樂に日を送つてゐる有樣を述べた詩である。

【詩意】歲の暮の夜寒になつて風は地を捲き雪は天に連つて降りしきる時にも、我は煖い帳の中、溫い爐の前に、二枚の夜具と一枚の毛氈とにくるまり、粥が出來たと呼ばれても起きようともせず、日の高く昇るまで安安と眠つてゐる。かくの如くにして心も身も何物にも拘牽せられず、風雪を渡り來ること既に六年である。顧つて思ふに遠遊の客や早朝の士は、凍を蹋み夜を侵して行き、寒を凌ぎ夜の明けないうちに起きなどせねばならぬ。然も心は身の君父であり、身は心の臣子であるのに、凍を蹋んだり寒を冒したりして身の自由を得ないのは、皆心の爲に使はれるからである。所が我が心は足ることを知つてゐるから、從つて我が身も止る所に安んじてゐられる。因つて我が心が身に對して言ふ、「俺は決してお前を酷使するやうなことはしないぞよ」と。

對琴酒

西窓明且暖。晚坐卷書帷。
琴匣拂開後。酒瓶添滿時。
角樽白螺盞。玉軫黃金徽。

琴酒に對す

西窓明かにして且暖かなり、晚に坐して書帷を卷く。
琴匣拂ひ開く後、酒瓶添へ滿つる時。
角樽白螺の盞、玉軫黃金の徽。

未及彈與酌。相對已依依。
泠泠秋泉韻。貯在龍鳳池。
油油春雲心。一杯可致之。
自古有琴酒。得此味者稀。
祇應康與籍。及我三心知。

未だ彈ずると酌むとに及ばず、相對して已に依依たり。
泠泠たる秋泉の韻、貯へて龍鳳の池に在り。
油油たる春雲の心、一杯之を致す可し。
古より琴酒有り、此味を得る者稀なり。
祇應に康と籍と、我と三心知るべし。

【字解】【一】書帷　書齋のとばり。まどかけ。【二】琴匣　琴のはこ。【三】角樽　角で作つた酒樽。白螺盞は白い貝で作つた杯。【四】玉軫　軫は琴下の絃を轉ずるもの。玉のいとじめ。徽は琴音の高下を示す標識。【五】依依　相牽戀する貌。【六】龍鳳池　琴底の孔なり。上なるを龍池といひ、下なるを鳳池といふ。【七】油油　和悅の貌。【八】康　嵇康。籍は阮籍。【九】及我　及はトと訓ず。

【題義】琴と酒とに對して其樂を述べた詩である。

【詩意】夕方に書齋の帷を卷きあげて坐すれば、西の窓が明く暖かである。因つて琴の匣を開き酒瓶を滿たして琴と酒とに對すれば、まだ彈きもせず飲みもせぬうちから、早くも心が牽かれる。況えた秋泉の如き琴の音が龍池鳳池の中に貯へられ、和悅せる春の雲の如き心が一杯の酒に由つて養はれる。古來琴と酒とに對して此味を悟り得た者は稀で、ただ嵇康と阮籍と我とが知るのみである。

雪中晏起。偶詠所懷。兼呈張常侍・韋庶子・皇甫郎中

雜言。

雪中晏く起き、偶〻所懷を詠じ、兼ねて張常侍・韋庶子・皇甫郎中に呈す　雜言。

窮陰蒼蒼雪霧霧。
雪深沒脛泥埋輪。
東家典錢歸礙夜。
南家貰米出凌晨。
我獨何者無此弊。
複帳重衾暖若春。
怕寒放懶不肯動。
日高睡足方頻伸。
瓶中有酒爐有炭。
甕中有飯庖有薪。
奴溫婢飽身晏起。

窮陰蒼蒼雪霧霧、
雪深くして脛を沒し泥輪を埋む。
東家は錢に典し歸りて夜を礙へ、
南家は米を貰り出でて晨を凌ぐ。
我獨り何者ぞ此弊無し、
帳を複ね衾を重ねて暖春の若し。
寒を怕れ懶を放まにして肯て動かず、
日高け睡足りて方に頻りに伸す。
瓶中に酒有り爐に炭有り、
甕中に飯有り庖に薪有り。
奴溫に婢飽きて身晏く起き、

【字解】【一】蒼蒼　陰暗の貌。雪霧は雪の降る貌。【二】典錢　品物を質に入れて金を借ること。【三】貰米　代金を後拂にして米買ふ。

致茲快活良有因。
上無皐陶伯益廊
廟材。
的不能匡君輔國
活生民。
下無巢父許由箕
潁操。
又不能食薇飲水
自苦辛。
君不見南山悠悠
多白雲
又不見西京浩浩
唯紅塵。
紅塵鬧熱白雲冷。

茲快活を致せること良に因有り。
上は皐陶伯益が廊廟の材無く、
的に君を匡し國を輔けて生民を活かす
能はず。
下は巢父許由が箕潁の操無く、
又薇を食ひ水を飲みて自ら苦辛する能
はず。
君見ずや南山悠悠として白雲多きを、
又見ずや西京浩浩唯紅塵なるを。
紅塵は鬧熱白雲は冷かなり、

【四】皐陶・伯益　竝に舜の相。廊廟材は朝廷の大臣たる材。
【五】巢父・許由　堯が天下を讓らんとせし時、辭退せし人。箕潁操は高踏的志操。高士傳に許由聞堯致天下而讓焉、乃退而遁於中嶽、潁水之陽、箕山之下とある。
【六】食薇　伯夷叔齊首陽山に隱れ薇を採りて之を食ふ。飲水は潁淵疏食をくらひ水を飲み肱を曲げて之を枕とす。
【七】南山　長安の南に在る終南山。
【八】西京　長安。浩浩は塵の立つ貌。

好於冷熱中間安
置身。
三年徼倖忝洛尹。
兩任優穩爲商賓。
非賢非愚非智慧。
不貴不富不賤貧。
冉冉老去過六十。
騰騰閒來經七春。
不知張韋與皇甫。
私喚我作何如人。

好し冷熱の中間に於て身を安置す。
三年徼倖洛尹を忝くし、
兩任優穩商賓と爲る。
賢に非ず愚に非ず智慧に非ず、
貴ならず富ならず賤貧ならず。
冉冉老い去りて六十を過ぎ、
騰騰閒に來りて七春を經たり。
知らず張韋と皇甫と、
私に我を喚びて何如なる人と作す。

【九】徼倖　僥倖に同じ。洛尹は官名、河南尹。
【一〇】兩任　河南尹と太子賓客とを兼ねること。商賓は太子賓客をいふ。昔商山の四皓が漢の惠帝の太子たりし時、太子に賓從せし故事に因る。
【一一】冉冉　年月の過ぐる貌。
【一二】騰騰　遊惰に耽る貌。七春は七年。

【題義】雪の日に晏く起き偶然感懷を述べた詩で、張常侍（張仲方であらう。仲方は九齡の族孫で貞元中進士に擢んでられ、散騎常侍・京兆尹を歷て華州刺史に左遷された）韋庶子（韋は姓、庶子は官名、字は遠坊。後集卷十三、和韋庶子遠坊赴宴未夜先歸之作兼呈裴員外、參照）。皇甫郎中（皇甫湜）に呈したのである。

【詩意】あたりが眞暗で雪がちらちらと降り、脛も車輪も沒するほどに積つた。東鄰の家では質を置き南鄰の家では米をかけ買して、朝晩を過してゐる窮狀であるが、我のみはそんな苦みはなく、帳衾を暖かに重ねて春の如く、寒を怕れ無精の限を盡してびくともせず、日が高く昇るまで眠續けて伸びばかりしてゐる。瓶には酒があり爐には炭があり、甕には飯があり庖には薪があり、召使までが暖衣飽食して朝寢してゐる。併しかかる氣樂な生活が出來るには因由があるのだ。因由といふのは外ではない。上は皐陶だの伯益だののやうな大臣たるの材なく、君を匡け國を輔け人民を活かすことが出來ず、下は巢父や許由のやうな高踏的志操がなく、薇を食ひ水を飲んだ伯夷や顏回のやうな貧生活に安んずることが出來ないからである。君見よ終南山には悠悠として白雲が浮び、長安の都には浩浩として紅塵が立籠めてゐる。紅塵は騷騷しく白雲は淋しい。我は騷騷しくもなく淋しくもない中間の洛陽に安居し、僥倖にも河南尹・太子賓客の任を忝うし、賢にもあらず愚にもあらず智慧にもあらず、富貴にもあらず貧賤にもあらず、誠に萬事に中庸を得、安閑として六十七になつた。知らず君等三人は我を嘆んで如何なる人と謂ふであらう。

和裴侍中南園靜興見示　裴侍中が南園の靜興、示さるるに和す

池館清且幽。高懷亦如此。　池館清くして且幽なり、高懷も亦此の如し。

有時簾動風。盡日橋照水。　時有りて簾風に動き、盡日橋水に照らさる。

靜將鶴爲伴。閒與雲相似。　靜に鶴を將て伴と爲し、閒なること雲と相似たり。

何必學留侯。崎嶇覓松子。　何ぞ必ずしも留侯を學び、崎嶇として松子を覓めん。

【字解】【一】池館　洛陽に在る裴侍中の池館。【二】高懷　高尙な心。【三】盡日　終日。【四】留侯　漢の張良高祖に事へて功あり、留侯に封ぜらる。【五】崎嶇　山阪を跋涉する貌。松子は仙人赤松子なり。張良は晩年赤松子に從つて遊べりといふ。

【題義】侍中裴度が南園の靜興と題する詩を寄せたのに和したのである。

【詩意】池館は清且幽で誠に公の心と同じく、時時風が吹いて來て簾を動かし、終日橋が水に影をうつしてゐる。公は靜に鶴に伴つて遊び、その閑なることは雲のやうである。公の如き靜閑を占め得てゐる以上は、何も張良などのやうに崎嶇として赤松子などを覓めて山阪を登る必要はない。

春寒

今朝春氣寒。自問何所欲。　今朝春氣寒し、自ら問ふ何の欲する所ぞと。

酥煖薤白酒。乳和地黃粥。　酥をば薤白の酒に煖め、乳をば地黃の粥に和す。

豈唯饞口厭。亦可調病腹。　豈唯饞口を厭かしむるのみならんや、亦病腹を調す可し。

助酌有枯魚。佐餐兼旨蓄。　酌を助くるに枯魚有り、餐を佐くるに旨蓄を兼ぬ。

省躬念前哲。醉飽多慚忸。
君不聞靖節先生樽長空。
廣文先生飯不足。

【字解】【一】酥　酪なり、牛羊の乳を以て作る。蕹白は小蒜の如き野菜。【二】地黄　藥用植物の名。【三】饞口　貪り食ふ口。【四】旨蓄　うまい肉。【五】靖節先生　陶淵明。【六】廣文先生　鄭虔をいふ。玄宗皇帝鄭虔を愛し廣文館博士となす。杜甫の詩に廣文先生官獨冷、廣文先生飯不レ足とあり。

【題義】暖飽して春寒を送ることを述べた詩である。

【詩意】今朝は氣候が寒いので、酥をば蕹白の酒に煖めて飲み、乳をば地黄の粥に和して食つた。これはただ貪り食ふ口を饜かしむるのみならず、腹の病を調へることも出來る。酒の肴には乾物の魚があり、飯の菜には旨い肉がある。昔の賢人に比較すれば我の醉飽してゐるのが恥かしい。陶淵明は酒樽がいつも空で、鄭虔は飯さへ十分にも食はれなかつたではないか。

菩提寺上方晩望香山寺寄舒員外

菩提寺の上方にて晩に香山寺を望み舒員外に寄す

晩登西寶刹。晴望東精舍。
晩に西の寶刹に登り、晴れて東の精舍を望む。
反照樓臺。輝輝似圖畫。
反照樓臺に轉じ、輝輝として圖畫に似たり。
氷浮水明滅。雪壓松偃亞。
氷浮びて水明滅、雪壓して松偃亞。
石閣僧上來。雲汀鴈飛下。
石閣僧上り來り、雲汀鴈飛び下る。
西京鬧於市。東洛閒如社。
西京は市よりも鬧すしく、東洛は閒なること社の如し。
曾憶舊遊無。香山明月夜。
曾て舊遊を憶ふや無や、香山明月の夜。

【字解】【一】上方　地勢最高の處をいふ。【二】寶刹　寺。菩提寺を指して言ふ。【三】精舍　寺。香山寺を指して言ふ。【四】反照　夕日。【五】偃亞　ふしたれる。【六】西京　長安。【七】東洛　洛陽。社は僧社、僧侶の仲間。前の閒意と題する詩に、病停二夜食一閒如レ社とある。

【題義】菩提寺の高臺から夕方香山寺（前に見ゆ）を望み、舒員外に寄せた詩である。時に舒員外は香山寺に宿してゐたもののやうである。

【詩意】夕方西の菩提寺に登つて東の香山寺を望めば、夕日が樓臺の間にきらきらして畫のやうに美しく、氷が浮んで水が明滅し、雪が積つて松の枝が垂れ、石閣をば僧が上り、雲汀には雁が飛び下りなどしてゐる。君の今迄ゐた長安は市場のやうに混雜を極むる處であるが、洛陽は靜なること僧社のやうである。その洛陽の香山寺に明月の夜に宿する君は、物の數ならぬ昔の遊賞などは、トント憶ひ出しもせぬであらう。

二月一日作。贈韋七庶子

二月一日の作、韋七庶子に贈る

園杏紅蕚拆。庭蘭紫芽出。
園杏紅蕚拆き、庭蘭紫芽出づ。

不覺春已深。今朝二月一。
覺えず春已に深し、今朝二月一。

去冬病瘡痏。將養遵醫術。
去冬は瘡痏を病み、將養して醫術に遵ふ。

今春入道場。清淨依僧律。
今春は道場に入り、清淨にして僧律に依る。

嘗聞聖賢語。所愼齋與疾。
嘗て聞く聖賢の語、愼む所は齋と疾と。

遂使愛酒人。停盃一百日。
遂に酒を愛する人をして、盃を停むること一百日ならしむ。

明朝二月二。疾平齋復畢。
明朝二月二、疾平ぎて齋復畢る。

應須挈一壺。尋花覓韋七。
應に須らく一壺を挈へ、花を尋ねて韋七を覓むべし。

【字解】【一】紅蕚　紅色のはなびら。【二】瘡痏　病氣。【三】道場　寺。【四】僧律　僧侶の戒律。【五】齋與疾　論語述而篇に、子之所愼齋戰疾とある。齋は精進潔齋なり。疾は病氣。【六】愛酒人　樂天自ら謂ふ。

【題義】二月一日に作つた詩で、韋七庶子（七は輩行。前に見ゆ）に贈つたのである。

【詩意】杏の花も開き蘭の芽も生え、春も深けて早くも二月一日となつた。去年の冬は病氣に罹り療養の爲に醫術を施し、今年の春は寺に入りて戒律を守つた。嘗て聞く所に據れば聖賢は物忌と病氣とを愼しんださうだ。因つて自分も好きな酒を百日間斷つたが、明朝は二月二日で、吾が病も癒え物忌も畢るから、一壺の酒を挈へて花を尋ぬる序に君を訪れようと思つてゐる。

犬鳶

晚來天氣好。散步中門前。
晚來天氣好し、散步す中門の前。

門前何所有。偶覩犬與鳶。
門前何の有る所ぞ、偶〻犬と鳶とを覩る。

鳶飽凌風飛。犬暖向日眠。
鳶は飽きて風を凌ぎて飛び、犬は暖かにして日に向ひて眠る。

腹舒穩貼地。翅凝高摩天。
腹は舒びて穩かに地に貼し、翅は凝りて高く天を摩す。

上無羅弋憂。下無羈鎖牽。
上に羅弋の憂無く、下に羈鎖の牽く無し。

見彼物遂性。我亦心適然。
彼物の性を遂ぐるを見て、我も亦心適然たり。

心適復何爲。一詠逍遙篇。
心適して復何をか爲す、一たび逍遙の篇を詠ず。

此仍著於迹。尙未能忘言。
此仍迹に著し、尙未だ言を忘るる能はず。

【字解】【一】羅弋　網といぐるみの矢。【二】羈鎖　繩やくさり。【三】彼物　犬と鳶と。【四】適然　愉快な貌。【五】逍遙篇　莊子の逍遙游篇。【六】忘言　莊子外物篇に言者所以在意、得意而忘言とある。

【題義】犬や鳶の安穩に飛んだり眠つたりしてゐるのを見る心の樂を述べた詩である。

【詩意】夕方になつて天氣が好くなつたので門前を散歩した。門前には犬と鳶とがゐて、鳶は餌に飽きて天を摩するばかりに飛び揚り、犬は日向に腹を地に著けて暖かに眠り、弓矢の憂もなく繩や鎖の束縛もなく、各〻その性を遂ぐるを見て我が心も愉快になり、覺えず逍遙游の篇を誦詠した。併し此樂を尚文字の迹に著し、未だ言ふを忘るるまでには至らない。

夢劉二十八因詩問之　劉二十八を夢み詩に因つて之を問ふ

昨夜夢夢得。初覺思踟躕。(一)　昨夜夢得を夢み、初めて覺めて思踟躕す。
忽忘來汝郡。猶疑在吳都。(二)　忽ち汝郡に來りしを忘れ、猶吳都に在るかと疑へり。
吳都三千里。汝郡二百餘。　吳都三千里、汝郡は二百餘。
非夢亦不見。近與遠何殊。　夢に非ざれば亦見ず、近と遠と何ぞ殊ならん。
尚能齊近遠。焉用論榮枯。　尚能く近遠を齊くす、焉んぞ用て榮枯を論せん。
但問寢與食。近日兩何如。　但問ふ寢と食と、近日兩つながら何如。
病後能吟否。春來曾醉無。　病後能く吟ずるや否や、春來曾て醉へるや無や。
樓臺與風景。汝又何如蘇。　樓臺と風景と、汝又蘇に何如。

【字解】【一】踟躕　徘徊といふが如し。【二】吳都　蘇州なり。

【題義】劉二十八（名は禹錫、字は夢得、二十八は輩行。太和六年冬、禹錫は蘇州刺史に除せられ、後汝州に移り太和九年に汝州から同州に移つた）を夢みたので此詩を寄せて近況を問うたのである。

【詩意】昨夜は君を夢に見て覺めて後も心が落著かなかつた。君が今は汝州に來てゐることを忘れてまだ蘇州にゐるやうに思つた。ここから蘇州までは三千里あり、汝州までは二百餘里に過ぎないが、夢でなければ相見ることの出來ないことは遠くても近くても同じである。夢は既に遠近を齊うするからには、榮枯をも差別することはないであらう。因つて予は唯近來眠食何如、病後も尚詩を吟ずるや否や、春來尚酒を飲むや否や、樓臺と風景とが汝州と蘇州では孰れが勝れりやを問ふ。今君を思ふに就て此詩を寄せるから、君も手紙を書くことを荷厄介にせずに時時音信をしてくれよ。

相思一相報。勿復慵爲書。　相思ひて一たび相報ず、復書を爲るを慵しとする勿れ。

閒吟　閒吟

貧窮汲汲求衣食。(一)　貧窮なれば汲汲として衣食を求め、
富貴營營役心力。(二)　富貴なれば營營として心力を役す。
人生不富卽貧窮。　人生富まざれば卽ち貧窮なり、

【字解】【一】營營　汲汲に同じ。

(三)光陰易レ過閒難レ得。
我今幸在二窮富間一。
雖レ在二朝廷一不レ入レ山。
看レ雪尋レ花翫二風月一。
洛陽城裏七年間。

光陰は過ぎ易く閒は得難し。
我今幸に窮富の間に在り、
朝廷に在りと雖も山に入らず。
雪を看花を尋ね風月を翫ぶ、
洛陽城裏七年の間。

【題義】しづかに詩を作る意。

【詩意】貧窮なれば汲汲として衣食の爲に奔走し、富貴なれば心力を勞して權勢を逐ふのが、世の習である。人は富貴ならざれば必ず貧窮であり、歳月は過ぎ易くして閒暇を得ることはむづかしい。所が我は幸にも貧窮と富貴との中間に在り、仕官してはゐるが顯職には居らず、又山林に隱遁もせず、雪花風月を賞翫して洛陽に住むこと既に七年になる。

【一】光陰　歳月。閒は閒暇。

西行

衣裘不二單薄一。車馬不二羸弱一。
(一)藹藹三月天。閒行亦不レ惡。

衣裘單薄ならず、車馬羸弱ならず。
藹藹たる三月の天、閒行亦惡からず。

(二)壽安流水館。(四)硤石青山郭。
官道柳陰陰。行宮花漠漠。(五)
常聞二俗間語一。有レ錢在處樂。
我雖レ非二富人一。亦不レ苦二寂寞一。
家僮解二絃管一。騎從攜二盃杓一。
時向二春風前一。歇レ鞍開二一酌一。

壽安流水の館、硤石青山の郭。
官道柳陰陰、行宮花漠漠。
常に俗間の語を聞けり、錢有れば在處に樂むと。
我は富人に非ずと雖も、亦寂寞に苦しまず。
家僮絃管を解し、騎從盃杓を攜ふ。
時に春風の前に向ひ、鞍を歇めて一酌を開く。

【字解】【一】藹藹　草木の繁茂せる貌。【二】閒行　閒歩。【三】壽安　東京賦に其内則含德、章臺、天祿、宣明、溫飭、迎春・壽安、永寧とあり。注に八殿皆以二休令一爲レ名とある。【四】硤石　縣名。河南省硤縣の東南に在る。【五】漠漠　茂る貌。

【題義】西方に閒行したことを述べた詩である。

【詩意】見すぼらしからぬ裝をなし、痩せこけぬ車馬を驅り、花咲く春に閒行するのもわるくはない。流水に濱する壽安宮や青山に圍まれた硤石縣のあたりを行けば、柳が青青と官道を挾んで茂り、花が行宮の間に咲き滿ちてゐる。世間の人は「錢さへあれば何處へ行つても樂しい」と言ふが、我は勿論金持ではないが、さりとて貧苦に泣くほどでもなく、音樂の趣味を解する家僮や杯杓を攜ふる從者をつれて、春風の中を行き、時時馬を駐めて一酌するのは、實に愉快である。

東歸

翩翩平肩舁。中有醉老夫。
膝上展詩卷。竿頭懸酒壺。
食宿無定程。僕馬多緩驅。
臨水歇半日。望山傾一盃。
藉草坐嵬峩。攀花行踟躕。
風將景共暖。體與心同舒。
始悟有營者。居家如在途。
方知無繫者。在道如安居。
前夕宿三堂。三堂 左レ虢。
今旦游申湖。申湖 在レ陝。
殘春三百里。送レ我歸東都。

【字解】【一】翩翩　微動の貌。【二】醉老夫　樂天自ら謂ふ。【三】定程　一定の日程。【四】一盃　一杯。【五】嵬峩　小高き貌。【六】踟躕　徘徊。【七】東都　洛陽をいふ。

東歸

翩翩として肩を平かにして舁く、中に醉老夫有り。
膝上に詩卷を展べ、竿頭に酒壺を懸く。
食宿定程無く、僕馬多くは緩驅す。
水に臨みて歇ふこと半日、山を望みて一盃を傾く。
草を藉きて坐すること嵬峩たり、花を攀ぢて行きて踟躕す。
風と景と共に暖かに、體と心と同じく舒ぶ。
始めて悟る營有る者は、家に居りても途に在るが如きを。
方に知る繫がるる無き者は、道に在りても安居するが如きを。
前夕三堂に宿し、
今旦申湖に游ぶ。
殘春三百里、我を送りて東都に歸らしむ。

【題義】東方の洛陽に歸る道中の景況を敍した詩である。

【詩意】翩翩と肩を平かにして穩かに舁かれる駕輿の中には醉老夫が居る。膝の上には詩集を披き竿の先には酒壺を懸けておく。食ふにも宿るにも定まつた日程はないので、僕馬も足に信せて緩驅し、水に臨んでは半日も休息し、山を望んでは一杯を傾け、草を敷いて阜の上に坐し、花を攀ぢて徘徊すれば、風も景色も暖かに身も心もびのびとする。是に於てか名利に營營たる者は家に居ても猶行旅に在るが如く、心に係累なければ行旅に在るも猶家に居るが如きを悟つた。昨夜は三堂に宿し、今朝は申湖に游び、三百里に亙る殘春の景が我を送つて洛陽に歸らしめた。

途中作

早起上肩輿。一盃平旦醉。
晚憩下肩輿。一覺殘春睡。
身不經營物。心不思量事。
但恐綺與里。只如吾氣味。

【字解】【一】平旦　よあけ。【二】綺與里　綺里季、角里先生。竝に商山四皓中の人。

【題義】東歸（前に見ゆ）の途中で作つた詩である。

【詩意】朝起きて肩輿に乘り、夜明の景色を眺めながら一杯を傾け、夕に肩輿を下りて休息し春の睡を覺ます。身は名利の營なく心は事に屈託しないから、身心俱に安泰である。恐らくは我と此氣味を同じうする者は、綺里季と角里先生ぐらゐのものであらう。

小臺

新樹低如帳。小臺平似掌。
六尺白藤牀。一莖青竹杖。
風飄竹皮落。苔印鶴迹上。
幽境與誰同。閒人自來往。

【題義】小臺の景を敍した詩である。

【詩意】新綠の樹木が垂れて帳の如く小臺を繞り、小臺は掌のやうに平である。そこに六尺ばかりの白藤のこしかけがあり、一本の青竹の杖がある。風は新竹の皮を吹き落し、苔の上には鶴の足迹がついてゐる。この幽境をば誰と共に賞翫するかといふに、閒人があつて招かずとも時時遊びに來るのだ。

睡後茶興憶楊同州

昨晚飲太多。嵬峩連宵醉。
今朝餐又飽。爛熳移時睡。
睡足摩挲眼。眼前無一事。
信脚遶池行。偶然得幽致。
婆娑綠陰樹。斑駁青苔地。
此處置繩牀。傍邊洗茶器。
白瓷甌甚潔。紅爐炭方熾。
沐下麴塵香。花浮魚眼沸。
盛來有佳色。嚥罷餘芳氣。
不見楊慕巢。誰人知此味。

【字解】【一】嵬峩　醉ふ貌。太平廣記に、盧思道常曉醉、從姪賁曰、阿父何處飲來凌晨嵬峩云云と。又歐陽修の詩に賓歡正喧謔、翁醉已嵬峩とある。連宵は徹宵なり。【二】爛熳　熟眠の貌。杜甫の詩に衆雛爛熳眠、喚起沽三盞鑿一とある。【三】摩挲　こする。【四】婆娑　影の動く貌。【五】斑駁　まだらなこと。【六】繩牀　繩をはりたる腰掛。【七】白瓷　白色の磁器。【八】麴塵　淡黃色をいふ。【九】魚眼　沸湯なり。沸き立つこと魚眼の如くなればなり。

【題義】晝寢をした後で茶を飲み、同州刺史たる楊汝士（字は慕巢）を憶うた詩である。

【詩意】昨晩は酒を飲み過ぎたので朝まで醉ひ、今朝は飯を食ひ過ぎたのでグッスリ眠つてしまつた。眠り飽き眼をこすつて起きても此といふ仕事もないので、足に信せて池のまはりを散歩し、偶然幽致を悟つた。新樹の綠が影を搖かし、地上には青苔が斑に生えてゐる。そこに繩牀を置き、その傍で茶器を洗ひ、白瓷の甌を潔らかにし、紅爐の火を盛にして、花の浮ぶが如き沸湯を灌いで茶を煎じ、之を茶椀に盛れば淡黃色の沫が香しく滴り、嚥んだあとまで芳氣が殘る。楊慕巢を置いては世に此味を知る者はない。

題文集櫃

破柏作書櫃。櫃牢柏復堅。
收貯誰家集。題云白樂天。
我生業文字。自幼及老年。
前後七十卷。小大三千篇。
誠知終散失。未忍遽棄捐。
自開自鏁閉。置在書帷前。

文集の櫃に題す

柏を破りて書櫃を作る、櫃牢くして柏復堅し。
收め貯ふるは誰が家の集ぞ、題して白樂天と云ふ。
我生れて文字を業とし、幼より老年に及ぶ。
前後七十卷、小大三千篇。
誠に終に散失するを知るも、未だ遽に棄捐するに忍びず。
自ら開き自ら鏁閉し、置きて書帷の前に在り。

身是鄧伯道。世無王仲宣。
只應分付女。留與外孫傳。

【字解】【一】書帷　書齋の帳。【二】鄧伯道　晉の鄧攸、字は伯道、終身子なし。【三】王仲宣　三國魏の人、名は粲、字は仲宣、博物多識にして問へば知らざるなし。【四】分付　たのむ。【五】外孫　監察御史談弘譽の子、名は闇童。

【題義】己の文集の櫃に題した詩である。

【詩意】柏樹を伐つて書櫃を作り、堅牢な書櫃が出來あがつたので、その中に我が文集を收めることにした。我は幼より文詞を作り、既に前後七十卷大小三千餘篇の詩を成した。いつかは散失するものと覺悟してはゐるが、今遽に棄て去るには忍びないので、自ら此櫃に收めて書帷の前に置くのである。我は鄧伯道と同じく子といふものを持たず、世に王仲宣の如き物覺えのよい人はないから、此集を我が女に言ひ附け外孫に授けて世に傳へようと思ふのである。

身は是れ鄧伯道、世に王仲宣無し。
只應に女に分付し、外孫に留與して傳ふべし。

旱熱二首

彤雲散不雨。赫日吁可畏。
端坐猶揮汗。出門豈容易。
忽思公府內。青衫折腰吏。

旱熱　二首

彤雲散じて雨らず、赫日吁畏る可し。
端坐するも猶汗を揮ふ、門を出づる豈容易ならんや。
忽ち思ふ公府の內、青衫折腰の吏。

復想驛路中。紅塵走馬使。
征夫更辛苦。逐客彌顦顇。
日入尚趨程。宵分不遑寐。
安知北窓叟。偃臥風颯至。
簟拂碧龍鱗。扇搖白鶴翅。
豈唯身所得。兼示心無事。
誰言苦熱天。元有清涼地。

復想ふ驛路の中、紅塵走馬の使。
征夫更に辛苦、逐客彌顦顇。
日入りて尚程に趨り、宵分寐ぬるに遑あらず。
安んぞ知らん北窓の叟、偃臥して風颯として至る。
簟は碧龍の鱗を拂ひ、扇は白鶴の翅を搖かす。
豈唯身の得る所のみならんや、兼ねて心の無事を示す。
誰か言ふ熱天に苦しむと、元より清涼の地有り。

【字解】【一】彤雲　赤い雲。【二】赫日　照りかがやく日。可レ畏は左傳の注に夏日可レ畏、冬日可レ愛とある。【三】揮レ汗　汗を拭ふ。【四】公府　役所。【五】青衫　官服なり。折腰は腰を折りて上官の前に拜伏すること。【六】征夫　旅客。【七】逐客　貶謫せられる人。顦顇は痩せ衰へること。【八】程　一日の旅程。【九】宵分　夜分、夜半。【一〇】北窓叟　樂天自ら謂ふ。

【題義】靜に旱熱の日を送る閒適の狀を述べた詩である。

【詩意】雲散じて雨ふらず、日が燬くやうに照りつける。ぢッとしてゐてさへ汗を拭ふに暇がないくらゐだから、一歩でも門を出るのは容易でない。青衫をまとうて上官の前に拜伏する役人や、紅塵の中に馬を走らせる驛路の使やは、思ひ遣るだに氣の毒である。特に長途に辛苦する旅客や、日夜顦顇する貶客は、日が暮れても旅程を追ひ、夜半になつても寐ることも出來ない。ただ北窓の下に偃臥する我は、龍の鱗のやうな簟の上に横はつて鶴の翅の扇を搖かし、身が安泰であるばかりでなく心も亦無事である。こんな清涼の地に居れば、熱天に苦しむ人があるとは殆ど信ぜられないくらゐだ。

〔二〕

勃勃旱塵氣。炎炎赤日光。
飛禽颭將墜。行人渴欲狂。
壯者不耐飢。飢火燒其腸。
肥者不禁熱。喘急汗如漿。
此時方自悟。老瘦亦何妨。
肉輕足健逸。髮少頭清涼。
薄食不飢渴。端居省衣裳。
數匙粱飯冷。一領綃衫香。
持此聊過日。焉知畏景長。

〔二〕

勃勃たり旱塵の氣、炎炎たり赤日の光。
飛禽颭りて將に墜ちんとし、行人渴して狂せんと欲す。
壯なる者は飢に耐へず、飢火其腸を燒く。
肥えたる者は熱に禁へず、喘急にして汗漿の如し。
此時方に自ら悟る、老瘦亦何ぞ妨げん。
肉輕くして足健逸、髮少くして頭清涼。
薄食して飢渴せず、端居して衣裳を省く。
數匙粱飯冷かに、一領綃衫香し。
此を持して聊か日を過ぐ、焉んぞ畏景の長きを知らん。

【字解】【一】飢火　腹飢ゑて耐へ難く火の中に燒くるが如きをいふ。【二】薄食　少し食ふ。【三】端居　閒居なり。【四】粱

飯。米の飯。【五】一領　一枚。絹衫は絹の上衣。【六】畏暑　夏の日をいふ。左傳の注に夏日可レ畏、冬日可レ愛とある。

【詩意】熱氣が盛に起り赤い日が照り輝き、飛鳥は爲に目をまはし、行人は渴して狂せんばかりである。されば壯者は飢ゑて火の腹中に燒くるが如く、肥者は熱に耐へずして息が急に汗が流れる。こんな時は結句老いて瘦せてゐる方がましである。肉が輕く足も達者で、髮が少く頭も涼しく、少し食へば飢ゑることもなく、閒居して衣裳を省き數匙の冷飯を食つて一枚の絹衫をひつかけてゐる。かうしてゐれば夏の熱さなどは少しも畏るるに足らない。

偶作二首

戰馬春放歸。農牛冬歇息。
何獨徇名人。終身役心力。
來者殊未已。去者不知還。
我今悟已晚。六十方退閒。
猶勝不悟者。老死紅塵間。

【字解】【一】歇息　休息する。

偶作　二首

戰馬は春放たれて歸り、農牛は冬に歇息す。
何ぞ獨り名を徇ふ人のみ、身を終るまで心力を役する。
來る者は殊に未だ已まず、去る者は還るを知らず。
我今悟ること已に晚く、六十方に退きて閒なり。
猶勝れり悟らざる者の、紅塵の間に老死するに。

【題義】ふと感ずる所を述べた詩である。

【詩意】戰馬は春になつて放たれて歸り、農牛は冬になつて休息してゐる。ただ名利を求むる人は生涯心力を勞し、來る者は已むことを知らず、去る者は還るを忘れてゐる。我は悟ることが晚く、六十になつて始めて閒地に退いた。それでも永く紅塵の間に老死して、生涯悟らずに終る者よりは遙にましである。

〔一〕

名無高與卑。未得多健羨。
事無小與大。已得多厭賤。
如此常自苦。反此或自安。
此理知甚易。此道行甚難。
勿信人虛語。君當事上看。

〔一〕

名は高と卑と無く、未だ得ざれば多く健羨す。
事は小と大と無く、已に得れば多く厭賤す。
此の如くなれば常に自ら苦しめり、此に反すれば或は自ら安し。
此理知ること甚だ易きも、此道行ふこと甚だ難し。
人の虛語を信ずる勿れ、君事上に當りて看よ。

【字解】【一】健羨　うらやむ。【二】厭賤　いとひいやしむ。

【詩意】名は高卑に拘らず、未だ得ざれば多く之を羨み、事は小大を論せず、已に得れば厭ひ賤むも

のである。名利を貪れば常に自ら苦しみ、名利を棄つれば心が安らかになる。此道理は知り易いけれども、行ふは容易でない。人の虚語を信せず、自ら事に當つて實驗せられよ。

池上作

西溪南潭、皆池中勝處也。

池上の作　西溪・南潭、皆池中の勝處なり。

西溪風生竹森森。
南潭萍開水沈沈。
叢翠萬竿湘岸色。
空碧一泊松江心。
浦派縈廻誤遠近。
橋島向背迷登臨。
澄瀾方丈若萬頃。
倒影咫尺如千尋。
泛然獨遊邈然坐。
坐念行心思古今。

西溪風生じて竹森森、
南潭萍開いて水沈沈。
叢翠萬竿湘岸の色、
空碧一泊松江の心。
浦派縈廻して遠近を誤り、
橋島向背して登臨に迷ふ。
澄瀾方丈萬頃の若く、
倒影咫尺千尋の如し。
泛然獨り遊びて邈然として坐す、
坐念行心古今を思ふ。

【字解】【一】森森　茂盛の貌。
【二】萍　うきぐさ。沈沈は盛なる貌。
【三】叢翠　叢竹の綠。湘岸は湘水の岸。竹の名産地なり。
【四】空碧　池水の色。湖澤を泊といふ。松江は太湖の支流、今の吳淞江。
【五】方丈　一丈四方の廣さ。
【六】坐念行心　坐しては念ひ行きては思ふ。
【七】菟裘　春秋の時の魯の邑。魯の隱公が隱居所を此に營みしより、後人官を退きて隱居するの義とす。
【八】西河　今の陝西省舊同州府の地。春秋の時子夏此に居る。

菟裘不聞有泉沼。
西河亦恐無雲林。
豈如白翁退老地。
樹高竹密池塘深。
華亭雙鶴白矯矯。
太湖四石青岑岑。
眼前盡日更無客。
膝上此時唯有琴。
洛陽冠蓋自相索。
誰肯來此同抽簪。

菟裘には聞かず泉沼有るを、
西河亦恐る雲林無きを。
豈如かんや白翁退老の地、
樹高く竹密にして池塘深きに。
華亭の雙鶴白くして矯矯、
太湖の四石青くして岑岑。
眼前盡日更に客無し、
膝上此時唯琴有り。
洛陽は冠蓋自ら相索む、
誰か肯て此に來りて同じく簪を抽かん。

【九】白翁　樂天自ら謂ふ。
【一〇】華亭　地名。今の江蘇省松江縣西の平原村。晉の陸機將に死せんとする時嘆じて曰く、華亭鶴唳可二復聞一乎と。矯矯は勇む貌。
【一一】太湖　湖名。笠澤、五湖等の名あり、江蘇浙江二省に跨る。岑岑は聳ゆる貌。
【一二】盡日　終日。
【一三】冠蓋　冠と車蓋。高位高官の人をいふ。
【一四】抽簪　官を辭するをいふ。

【題義】樂天の洛陽の邸内に在る池の邊で作つた詩である。

【詩意】西溪の竹が風に吹かれて綠を漂はし、南潭の水が茫茫として碧を湛へ、浦曲が縈廻して人をして遠近を誤らしめ、橋や島が向背して登臨に迷はしめる。澄瀾の廣さは方丈に過ぎないが萬頃もあるかと思はれ、倒にうつる影は咫尺に過ぎないが千尋もあるかと思はれる。舟を泛べて獨り遊び、坐

しては念ひ行きては思ひて古今を回想するに、隱公の菟裘にも此の如き泉沼があつた事を聞かず、子夏の閑居してゐた西河にも恐らく此の如き雲林は無かつたであらう。されば我が退老の地の樹高く竹茂り池深きには比すべくもなかつた。況んや我が家には二羽の鶴の矯矯たるもあり、四個の太湖石の青青と聳ゆるもあり、眼前には終日來客もなく、膝の上には唯琴のあるのみである。洛陽は官人の常に相索むる處であるが、誰か此に來て俱に退老する人はないであらうか。

何處堪避暑

何處堪避暑。林間背日樓。
何處好追涼。池上隨風舟。
日高飢始食。食竟飽還遊。
遊罷睡一覺。覺來茶一甌。
眼明見青山。耳醒聞碧流。
脫襪閒濯足。解巾快搔頭。
如此來幾時。已過六七秋。
從心至百骸。無一不自由。

何れの處か暑を避くるに堪ふる

何れの處か暑を避くるに堪ふる、林間日に背く樓。
何れの處か涼を追ふに好き、池上風に隨ふ舟。
日高くして飢ゑて始めて食し、食し竟りて飽きて還遊ぶ。
遊罷めて睡一たび覺め、覺め來りて茶一甌。
眼明かにして青山を見、耳醒めて碧流を聞く。
襪を脫して閒に足を濯ひ、巾を解きて快く頭を搔く。
如此の如くにして來る幾時ぞ、已に過ぐ六七の秋。
心より百骸に至るまで、一として自由ならざるは無し。

拙退是其分。榮耀非所求。
雖被世間笑。終無身外憂。
此語君莫怪。靜思吾亦愁。
如何三伏月。楊尹謫虔州。

【字解】【一】一甌　一個の瓶。【二】襪　靴下、足袋。【三】六七秋　六七年。【四】百骸　身體をいふ。【五】拙退　暗愚の者の隱退すること。【六】三伏　夏至の後の第三の庚の日を初伏といひ、第四の庚の日を中伏といひ、立秋の後の第一の庚の日を末伏といふ。【七】楊尹　楊虞卿、字は師皐、京兆尹より虔州司戸參軍に貶せられ、開成元年卒す。樂天の妻は此人の從妹なり。

【題義】首句を取つて題としたのである。

【詩意】暑を避くるには林間の日に背いた樓があり、涼を納れるには池上の風に隨ふ舟がある。飢ゑては食ひ飽けば遊び、倦めば睡り覺むれば一甌の茶を啜り、眼が冴えた所で青山を眺め、耳が冴えれば碧水の流を聞き、足を濯ひ頭を搔きて快を取る。洛陽に退いて此の如き生涯を送ること既に六七年になるので、心も身も一として自由ならぬはない。愚者の退くのは固より其分であつて榮耀は吾が求むる所ではないから、たとひ世人の笑を買ふとも身外の憂は全然ない。此語を聞きて君怪む勿れ、吾は楊尹が三伏の暑中に虔州に謫せられたことを愁へてゐる。

詔下

昨日詔下去罪人。
今日詔下得賢臣。
進退者誰非我事。
世間寵辱常紛紛。
我心與世兩相忘。
時事雖聞如不聞。
但喜今年飽飯喫。
洛陽禾稼如秋雲。
更傾一樽歌一曲。
不獨忘世兼忘身。

【題義】 詔の下れるに感じて作つた詩である。

【詩意】 昨日は詔が下つて罪人を退け、今日は詔が下つて賢臣を擧げた。進められた者は誰で退けられた者は誰だか、我の關知する所ではないが、世間の寵辱は紛紛として定めなきものである。我が心は世と相忘れてゐるから世間の時事は聞いても聞かないと同じである。ただ喜ばしい事は洛陽の稻が豐熟して、飽くまで飯を食ふことが出來る。因つて更に一樽の酒を傾け一曲の歌を歌ひ、獨り世を忘るるのみならず、我が身をも忘れた。

詔下る

昨日詔下りて罪人を去り、
今日詔下りて賢臣を得たり。
進退する者は誰ぞ我が事に非ず、
世間の寵辱常に紛紛たり。
我が心と世と兩ながら相忘る、
時事聞くと雖も聞かざるが如し。
但喜ぶ今年飽くまで飯を喫ひ、
洛陽の禾稼秋雲の如くなるを。
更に一樽を傾けて一曲を歌ふ、
獨り世を忘るるのみならず兼ねて身を忘る。

七月一日作

七月一日天。秋生履道里。
閒居見清景。高興從此始。
林間暑雨歇。池上涼風起。
橋竹碧鮮鮮。岸莎青靡靡。
蒼然古盤石。清淺平流水。
何言中門前。便是深山裏。
雙僮侍坐臥。一杖扶行止。
飢聞麻粥香。渴覺雲湯美。

胡麻粥
雲母湯。

七月一日の作

七月一日の天、秋は履道の里に生ず。
閒居して清景を見、高興此れより始まる。
林間暑雨歇み、池上涼風起る。
橋竹碧にして鮮鮮、岸莎青くして靡靡。
蒼然たり古盤石、清淺なり平流水。
何ぞ中門の前と言はん、便ち是れ深山の裏。
雙僮坐臥に侍し、一杖行止を扶く。
飢ゑて麻粥の香しきを聞き、渴して雲湯の美なるを覺ゆ。